

日本・ラテンアメリカ交流史(Ⅰ)

中 川 清

第一編 明治末期まで

第一章 鎖国期以前

- 一 ヌエバ・エスパニア
- 二 ガレオン船
- 三 呂宋との交易
- 四 メキシコ副王の使節
- 五 支倉常長
- 六 ヌエバ・エスパニア最後の航海

第二章 鎖国期

- 一 新大陸に関する知識の紹介
- 二 「古巴」をめぐって
- 三 『東航紀開』
- 四 『海外異聞』
- 五 浜田彦蔵『漂流記』
- 六 『東海漂客談奇』

第三章 開国期

- 一 遣米使節団
- 二 福沢諭吉
- 三 メキシコ・ドル

第四章 明治期——新たな交流の始まり

- 一 マリア・ルース号事件
- 二 ベルーとの和親貿易仮条約締結
- 三 メキシコ天文観測隊の来日
- 四 中南米諸国との外交関係
- 五 日墨修好通商条約

第五章 明治期海軍とラテン・アメリカ

- 一 南米で客死した海軍々人達
- 二 南米への遠洋航海
- 三 チリから購入した軍艦
- 四 アルゼンチンから購入した軍艦

第六章 ラテン・アメリカに渡った

- 一 旅芸人達
- 二 海外移民の開始
- 三 「南米『ガテマラ』へ本邦人出稼一件」
- 四 榎本メキシコ殖民
- 五 ベルーへの移民
- 六 榎本殖民以後のメキシコ移民
- 七 ブラジルへの移民
- 八 その他中南米諸国への移民

第七章 高橋是清とベルー鉱山

- 一 ベルー銀山事件の発端
- 二 日秘鉱業会社の設立
- 三 ベルーへの旅立ち
- 四 ベルーからの撤退
- 五 その後の屋須弘平

第八章 知識人の往来

- 一 南方熊楠
- 二 小泉八雲
- 三 ホセ・ファン・タブラーダ
- 四 パナマ運河の日本人技術者
- 五 青山 士
- 五 横山源之助

第九章 米西戦争と日本人

- 一 メーリン号に乗っていた日本人
- 二 観戦武官
- 三 軍事情報としての米西戦争
- 四 内村鑑三と幸徳秘水
- 五 米西戦争と日本

第十章 明治期におけるスペイン語

- 一 学習とラテン・アメリカの紹介
- 二 明治期におけるスペイン語学習書
- 二 西語学会
- 三 東京外国語学校
- 四 金澤一郎助教授
- 五 『海潮音』のキューパ詩人
- 六 ラテン・アメリカの紹介

第十一章 東洋汽船—中南米航路の開闢

- 一 東洋汽船株式会社の設立
- 二 中南米航路の開闢
- 三 輸送状況及び就航の中断
- 四 ブラジル移民の輸送及び
- 五 南米線の再開

(以下、次号)

第二編 大正期

第十二章 メキシコ革命と日本人

- 一 代理公使堀口九萬一
- 二 軍艦出雲の派遣
- 三 革命渦中の日本人移民

第十三章 大正期知識人と

- 一 ラテン・アメリカへの関心
- 二 志賀重昂
- 三 堀口英世
- 四 野口英世
- 五 木下幸太郎
- 六 片山潜

第十四章 中南米航路の開闢

- 一 概況
- 二 東洋汽船
- 三 日本郵船
- 四 大阪商船
- 五 川崎汽船

第十五章 中南米貿易の開闢

- 一 概況
- 二 三井物産
- 三 日本綿花
- 四 三菱商事
- 五 専門商社
- 六 横浜正金銀行
- 七 コーヒー輸入

第十六章 外交関係と移民の開闢

- 一 新たな外交関係
- 二 移民会社
- 三 移民の増加

- (一) パルー
- (二) メキシコ
- (三) ブラジル
- (四) アルゼンチン
- (五) キューバ

第十七章 大正期におけるラテン・アメリカ

- 一 関係出版物及びスペイン語・ポルトガル語の学習
- 二 ラテン・アメリカの紹介
- 二 スペイン語辞書の刊行
- 三 東京外国語学校と私立学校
- 三 大阪外国語学校と天理外国語学校の新設
- 四 高等商業学校とスペイン語
- 五 ポルトガル語の学習
- 六

第三編 戦前昭和期

第十八章 外交関係と移民の開闢

- 一 昭和期における外交関係
- 二 中南米移民の総数
- 三 各国への移民状況

- (一) ブラジル
- (二) パルー
- (三) メキシコ
- (四) アルゼンチン
- (五) キューバ
- (六) ポリビア
- (七) パラグワイ
- 四 商業移民天野芳太郎

第十九章 中南米航路の開闢

- 一 東洋汽船の解散

二 日本郵船
三 大阪商船
川崎汽船

第二十章 中南米貿易の展開
一 第二次大戦前のラテン・アメリカ
二 戦前における我国中南米貿易の背景
三 コーヒー輸入
四 輸出組合の結成

第二十一章 大手商社の進出状況
一 大手商社と中南米貿易
二 三菱商事
三 三井物産
四 兼松商店
五 日本綿花・東洋棉花・江商
六 伊藤忠商事・大同貿易・三興
七 岩井商店と日商

第二十二章 中南米を訪れた文化人達

一 北川民次
二 藤田嗣治
三 佐野碩
四 石川達三
五 古賀政男
六 田中耕太郎

第二十三章 戦前におけるラテン・アメリカ
関係出版物及びスペイン語・

一 ラテン・アメリカ関係出版物
二 スペイン語・ポルトガル語の学習

第二十四章 太平洋戦争への過程

一 石油供給国メキシコ
二 二つの太平洋石油株式会社
(一) エクワドル (二) メキシコ

三 駐在武官
四 中南米諸国における反日感情

第二十五章 太平洋戦争の開戦
一 中南米諸国の対日宣戦布告
二 パナマ運河爆破作戦
三 在留邦人の抑留

参考文献

日本・ラテンアメリカ交流史
関係略年表

第一編 明治末期まで

第一章 鎖国期以前

一 ヌエバ・エスパニア

南米大陸の南端を廻って太平洋に達したマゼランのひきいる五隻のスペイン艦隊が、更に西航して一五二一年にフィリピン群島に達している。マゼラン自身はマクタン島の原住民に殺害されているが、世界一周を達成した航海者として彼の名は今も記憶されている。その後も、ヌエバ・エスパニアと呼ばれていたメキシコを出発したスペイン艦隊が

この群島に派遣されているが、「フィリピン」と命名されたのは、四度目に派遣された艦隊が群島の南端に碇泊していた一五四一年である。そしてこの年、ポルトガル人の商人が種子島に漂着している。

一五六四年、ミゲル・デ・ロペス・レガスピー司令官にひきいられたスペイン艦隊は、メキシコ太平洋岸のナビダー港を出港した。ガレスピーによってフィリピン群島の本格的な植民地化がすすめられ、一五七一年五月には現在のマニラがスペイン領フィリピンの首都に定められた。こうして、三百年以上に及ぶスペインの植民地支配が続けられることになった。

ガレスピーの艦隊には、アウグスチヌ会派の修道士アンドレス・デ・ウルダネーダが加わっていたが、一五六五年メキシコへ戻るに際して、北方寄りの太平洋航路を発見した。これは、日本近海を航行することによって、太平洋海流と東に向かって吹く風を利用した航路である。

それ以前に、イエズス会修道士フランシスコ・ザビエルは、フランシスコ会派の修道士とともに多数のスペイン人がメキシコから日本へ渡来してくるのではないかと危惧していた。一五五二年四月にザビエルがポルトガル本国のシモン・ロドリゲス神父に宛てた書簡第一〇八号には、次のように記されている。⁽¹⁾

「スペイン人は、この「日本の」島を銀の島と呼んでいます。日本で会ったポルトガル人が語るところによると、メキシコからモルッカ諸島へ行くスペイン人は、この「日本の」島の近くを航行しているのだそうです。」

そして、メキシコからどれだけ多くの艦隊が派遣されても、日本の近海で難破するか、「たいへん好戦的で強欲」な日本人によって「すべて捕獲」されてしまうだろう。また、日本の土地は肥沃でないため、船員達は餓死してしまうだろうとも記している。ともかく、「暴風雨が激しい」日本へはメキシコから艦隊を派遣せぬよう、スペイン皇帝

(カルロス一世)やカスチリヤ国王(フェリーペとイサベラ)に要請するよう依頼している。メキシコに進出しているフランシスコ会派が日本に勢力を伸ばしてゆくのを牽制しようとするのが、ザビエルの意図のようである。

フィリピンから日本に向かった貿易船が、更に東に向かってヌエバ・エスパニアに達するためには、前述の北寄りの航路が利用されていた。また、マニラ・アカプルコ間を往復するガレオン船が日本に漂着するものも、この航路を利用したためである。こうして、十六世紀の日本では、「ノビスニア」、「ノビスパン」あるいは、「のびすはんにゃ」、「延須蜜」(ノボスバン)など様々な呼称をもって、ヌエバ・エスパニアの存在が知られるようになった。

一五二一年にメキシコを征服したスペイン人は、この地を「新スペイン」を意味する「ヌエバ・エスパニア」と称し、スペイン国王を代理するヌエバ・エスパニア副王によって統治した。現在では観光地として知られるアカプルコは、一五三〇年代初めから北米及びペルー沿岸地方にまで派遣された探検隊の基地として重要拠点となっていた。前述の太平洋航路が発見されたのちは、フィリピンと新大陸を結ぶ太平洋岸有数の港町として、アカプルコの地理的重要性は増大している。

ところで、コロンブスの新大陸到達に六年遅れて、ヴァスコダ・ガマは一四九八年にインドに到着している。更に、ポルトガル艦隊は一五一〇年にゴアを占領しており、ポルトガルアの東洋進出の拠点となった。こうして、アジアの東端に位置する日本では、ポルトガル商人に支援されてイエズス会派遣道士の布教活動が盛んになっていった。

我国に最初に渡来した宣教師フランシスコ・ザビエルがマラッカから鹿兒島に到着したのは、一五四九年八月(天文十八年七月)である。ザビエルが所属していたイエズス会東インド管区は、エチオピアからインド、更には日本に至るまでのアジアの広い地域を管轄しており、東洋の伝道では他の会派に先んじていた。

十六世紀末から十七世紀初めにかけて、イエズス会の宣教師百十六名が日本全土にわたって配置されており、フランシスコ会派は九名の司祭を含めて三十名を越える宣教師を当時の我国に派遣していた。更に、ドミニコ会士九名、アウグスチヌス会士四名が日本での布教に従事していたことが、ロレンソ・ペレス（野間一正訳）『ベアト・ルイス・ソテロ伝―慶長遣欧使節のいきさつ』（東海大学出版会 一九六八年）に記されている（同書七二頁）。

織田信長が南蛮人に対して人並み以上の関心を抱いていたことは、良く知られている。松田毅一『秀吉の南蛮外交―サン・フェリーペ号事件』（新人物往来社 一九七二年）によれば、信長は上洛（一五六九年）後、一五八二年の本能寺の変に至る迄の十三年間に少なくとも合計三十一名の南蛮人に面談している。そのうち、ポルトガル人五名、イタリア人四名、スペイン人二名である。新大陸を経由して我国に到来したスペイン人宣教師は、右の数字にはまだ含まれていないだろう。

スペイン人によるフィリピン群島の植民地化が開始された一五七〇年代の初め頃、イエズス会派の宣教師達が京畿地方の布教を開始していた。

一方、新大陸に進出していたフランシスコ会派は、ヌエバ・エспаニア総管区長Comisario general de Nueva Españaをメキシコに派遣しており、日本での布教のため日本管区長Comisario de Japonに任命していた。

ところが、一五八五年一月、グレゴリオナ三世の教令発布によって、日本に入学する宣教師は東回りのルートをとるイエズス会士に限られることになった。これは、既に我国での布教を開始していたイエズス会派のポルトガル人宣教師アレックスサンドル・ヴァリニャーノが「日本における布教の混乱を防ぐため」という理由をもって、メキシコからのスペイン人宣教師の渡航禁止をグレゴリオ十三世に要請した結果である。しかしながら、一五八七年に豊臣秀吉が

公布したキリスト教禁止令によって、イエズス会士が公然と布教出来なくなったため、フィリピンに待機していたフランシスコ会修道士にも日本布教の機会が到来した。一五九二年、秀吉はフィリピン総督に対して日本入貢の勧告状を送っているが、これによって日本とフィリピン、そして間接的には日本とメキシコの交流が開始されることになった。

ヌエバ・エスパニアに代表される新大陸と十六世紀末から十七世紀初頭の日本との交流の背景には、フランシスコ会修道士とガレオン船の存在が重要な役割を占めていたと言える。

二 ガレオン船

アカプルコからマニラへ向かう往路は赤道に近く、帰路東へ向かうスペイン船は北寄りに日本近海を航行していた。いずれも、海流と風向きを最大限に利用するためである。そして、新大陸とアジアを結ぶ航路を往来していたのが、ガレオン船である。アカプルコを出発したこの大型帆船は、四ヵ月かけてマニラ港に到着していた。

十五世紀から十八世紀末にかけて活躍したガレオン船は、ペルー及びメキシコで産出された金・銀をはじめ新大陸の産物をスペイン本国へ輸送するために使用された貿易船であるが、軍船としても使用されていた。三層あるいは四層の甲板構造を有するこの大型帆船の標準仕様は、排水トン数二百五十トン、全長約二十八メートル、幅八メートル、積載人員数は二百五十名乃至三百名程度である。

アカプルコからマニラに向かっていたガレオン船は、当時の日本と新大陸を結ぶ唯一の輸送手段でもあった。そして、新大陸からの渡航者の何人かは、フィリピンから更に東に向かってマカオにまで達しているが、そのなかにペルー

船長ファン・デ・ソリスがいた。

一五九二年七月、フィリピン総督が日本に派遣したドミニコ会修道士ファン・コーボ等の使節には、ソリス船長が同行していた。その頃、朝鮮出兵のため名護屋の陣営に滞在していた豊臣秀吉は、マニラから到着したスペイン人使節の一行に面会している。そしてこの時、ファン・コーボ等が日本で布教しているイエズス会宣教師を中傷したと伝えられている。信長と異なり、南蛮人宣教師達の布教活動に不信感を抱いていた秀吉であるが、この時の中傷が、サン・フェリーペ号事件の伏線となっているといわれている。

二百三十人の乗客を乗せてマニラからアカプルコへ向かっていたスペイン船サン・フェリーペ号が一五九六年九月、土佐に漂着しているが、アウグスチヌス会四名、ドミニコ会一名、更にフランシスコ会修道士フェリーペ・デ・ヘスス及びファン・ポープレの二名を含めて計七名の宣教師達が乗船していた。

秀吉が、サン・フェリーペ号の積荷の没収、フランシスコ会修道士など二十六名の処刑を命じた背景については、様々な論議がある。結局のところ、メキシコ、ペルー、フィリピン諸島を次々に征服していったスペイン人の背後には、フランシスコ会の力が働いていたのではないかという秀吉の疑念によるものであると推測されている。こうして、フランシスコ会日本管区長ペドロ・パウティスタ・ベラスケスら四名とともに、サン・フェリーペ号に乗船していた二人のフランシスコ会修道士、更には日本修道士及び信徒ら二十名を加えて、一五九七年二月に長崎で処刑された。このわが国最初の殉教は、「二十六聖人殉教」として記憶されている。

サン・フェリーペ号に乗船していたフェリーペ・デ・ヘススは、メキシコ生まれの修道士である。長崎で処刑された二十六名の殉教者達は、一八六一年に列聖されているが、フェリーペ・デ・ヘススはメキシコ最初の聖人である。

メキシコ市に近いクエルナバカの聖堂には二十六聖人殉教の壁画が描かれているが、日本とメキシコの遠い交流の記録である。

この時処刑されたフランシスコ会日本管区長ペドロ・バウティスタは、フィリピンの第二回使節として一五九三年六月に来日している。この時、彼に同行した修道士バルトロメーはコルドバ生まれのスペイン人であるが、メキシコに渡って宣教師となった。この時の処刑を免れているが、のちにマカオに追放されている。

二十六聖人の殉教の様子とその前後の我国の事情を、スペイン人の商人アビラ・ヒロンは『日本王国記』に詳しく報告している。⁽²⁾

一五九〇年、新総督として着任したダマリーニャスとともに、ヒロンはメキシコからマニラに渡って来た。彼の『日本王国記』に注をつけたモレホン神父はイエズス会に属しており、インドを経由して日本に到着している。一六一四年に高山右近らとともにマニラへ追放されているが、その後、シャムでの布教のちメキシコに渡った。更に、スペイン、イタリアを旅行したのちマカオに戻り、この地で没している。その当時、メキシコからマニラを経由して日本に渡って来たスペイン人は少なくなかったが、日本を離れたのちメキシコに渡った宣教師はきわめて少なかっただろう。

三 呂宋との交易

一九五三年に開始された日本と呂宋(ルソン。現在のフィリピン)の交易も、サン・フェリーペ号事件とともに杜絶した。しかしながら、秀吉の死後、徳川家康は、伊勢の国に潜伏していたフランシスコ会士ジエロニモ・デ・ジュエズ

スに謁見している。ヌエバ・エスパニアとの交易を望んでいた家康は、この時、メキシコに向かうガレオン船が自国領内に寄港することを認めると言明している。

更に一五九八年十二月には、家康の使節がマニラに派遣されている。フィリピン及びヌエバ・エスパニアとの通商を希望していた家康の働きかけに対して、フィリピン総督の反応が冷淡であったのは、サン・フェリーペ号の忌まわしい記憶によるものである。

その後、フィリピン新総督ペドロ・デ・アークーニャが、一六〇二年五月にマニラに着任した。その翌年六月、徳川家康宛の書簡と贈物を携えた宣教師四名が、二隻のスペイン船に分乗して来日したが、フランシスコ会修道士ベアト・ルイス・ソテロが同行していた。メキシコからフィリピンに渡ったソテロは、早くから日本布教の機会を望んでいたが、以下の稿で触れることの多い人物である。なおソテロ神父に関する記述は、前出のロレンソ・ペレス『ベアト・ルイス・ソテロ伝』に負うところが大きいことを明記しておく。

一六〇六年、ソテロ神父は、スペイン人船長とともに家康及び秀忠に謁見しているが、日本の最高実力者に接近する絶好の機会である。

一六〇八年、家康の外交顧問として起用された三浦按針ことイギリス人ウイリアム・アダムスはフィリピンに派遣されているが、新任のフィリピン総督ロドリゴ・デ・リベールとの会見が実現している。三浦按針の説得によって、日本との交易が有利であることを確認したビベロ総督は、家康との間に親書を交換している。こうして、毎年マニラからアカブルコへ航海していたガレオン船は浦賀に寄港し、航海に必要な物資の補給、更には破船の修理が行われることになった。このため、日本とルソンの交易量も増加していった。

フィリピン総督の任期を終えたビベローに乗せたサン・フランシスコ号は、二隻の僚船とともに、一六〇九年七月、アカプルコに向けて出帆した。折柄の暴風によってサン・フランシスコ号は関東海岸に漂着したが、ビベローら三百名の難破者は日本側の手厚い保護を受けた。

家康の招待を受けたビベロー前総督は、江戸に赴き、ソテロ神父が僧院長をしていたサンフランシスコ修道院に宿泊している。そのあと、家康はビベローに謁見しているが、これによって、ヌエバ・エスパニアと日本の新たな交流が実現した。

先ず、帰路アカプルコに向かうリベローのため、家康は、按針ウイリアム・アダマスにサン・ブエナベントゥーラ号の建造を命じた。一六一〇年八月、ビベローはアカプルコに向けて出発しているが、これには商人の田中勝介、朱屋キユサイなど二十三人の日本人が同行した。メキシコでは、副王ルイス・デ・ベラスコに歓待された日本人は、一六一一年三月まで同地に滞在し、セバ스티アン・ビスカイノを伴って帰国している。田中勝介らの一行は、公式に新大陸を訪れた最初の日本人である。

ラテン・アメリカ諸国に在任し学究肌の外交官として知られる井沢実によれば、メキシコに渡航しようとした最初の日本人は、クリストファーとコスモスと呼ばれる、いずれも二十歳前後の若者である。一五七八年、マニラとアカプルコ間を往復するスペイン船サンタ・アナ号に乗船していたが、カリフォルニア半島南端でイギリス海賊の襲撃を受け英国に連れてゆかれたと言われている(井沢実『ラテン・アメリカの日本人』日本国際問題研究所 一九七二年)。いずれにせよ、二人の若者は、新大陸の土地を踏むことはなかっただろう。

四 メキシコ副王の使節

スペイン国王の命令を受けたヌエバ・エスパニア副王ルイス・デ・ベラスコは、日本の北部に存在すると噂される金銀島の調査に着手した。このため、五名のフランシスコ会士及び、田中勝介ら二十三名の日本人とともに、セバスティアン・ビスカイノが乗船したサン・フランシスコ号は、一六一一年三月にアカプルコを出帆し、六月には浦賀に到着した。

スペイン国王フェリーペ三世及びヌエバ・エスパニア副王サリナス侯爵の使節兼司令官の資格を来日したビスカイノは家康に謁見しているが、ルイス・ソテロ及びペドロ・バウティスタの両神父が通訳を努めた。

そのあと、ビスカイノは金銀島の存在を確認すべく東北地方太平洋岸を調査しているが、暴風雨に遭遇して危うく難破しかけている。やっとの思いで浦賀に辿り着いたが、その後のビスカイノの行動については、イタリア人宣教師アマティが「伊達政宗遣使録」に詳しく記述している。⁽³⁾

右の史料によれば、日本滞在中のビスカイノ司令官の一行は金銭に困窮したようである。持ち物は「褌衣（しやつ）に至るまでも売払い、又商品を有するものは、悉く之を貸すことを奨励し、司令官（ビスカイノ引用者注）先ず、家の装飾用に供する蒔絵の器具買入れの資に宛てる為に、メキシコの紳士等より預かりたる商品と、自己の所有品、寝台の布団、並に一人の黒奴を出して」、借入金金の「返済金の中に加することを申出せり」。ともかく、「サン・フランシスコ号を修理して、異教徒の地を離れ、仮令（たとえ）水と米とを以てするも、新イスパニアに航行することを決したり」とある。

メキシコへの帰港に関して、ビスカイノと伊達政宗との間に契約（CAPTULACIONES）が締結された。そして、ヌ

エバ・エスパニアへ航行する船の建造、機装その他必要品一切の供給は、政宗が負担することになった。また、日本人渡航に対するヌエバ・エスパニア副王の許可を取得していないが、少数の日本人乗務員(factors)及び若干名の見習い水夫(grumetes)の乗船が、前記の契約によって取決められた。

こうして、五〇〇トンのサン・ファン・パウティスタ号が建造された。

五 支倉常長

ルイス・ソテローロなど三人のフランシスコ会派神父、支倉六右衛門常長及び日本人従者一五〇人、そしてビスカイノ司令官の一行を乗せたサン・ファン・パウティスタ号は、一六一三年十月二十八日に奥州月浦(宮城県石巻市)を出帆した。前記の契約には、日本人乗客は少数となるべきことが規定されているにもかかわらず、総勢一五〇名の日本人が乗船している。また、ルイス・ソテローロが全体の指揮をとるよう伊達政宗が命じたため、ビスカイノ司令官は乗客の一員として乗船せざるを得なかった。この措置に大きな不満を抱いたビスカイノによって、日本人及びソテローロ神父に対して悪意に満ちた報告が提出されている。このため、スペイン及びメキシコ(ヌエバ・エスパニア)との交易を望んでいた政宗の意図に反して、一六一四年五月二十日付のヌエバ・エスパニア副王からスペイン国王宛の書簡には、次のように記されている。

「日本人のことを詳しく知るに従い、当地(メキシコ引用者注)との間に開かれようとしている通商には、一層熟慮し慎重に行動することが必要と思いました」(前出の『ベアト・ルイス・ソテローロ伝』六四頁)。

こうした状態はさておき、支倉常長の一行は一六一四年一月二十五日にアカプルコに到着している。イタリア人宣

教師アマティの記述によれば、「一行の上陸するに及びて、盛なる儀式を備え、喇叭及び太鼓を以て之を迎へ、離宮に宿泊せしめ、闘牛その他の催しをなして、歓迎の意を表せし」とある（『大日本史料 第十二編之十二』）。

その一方、上陸地のアカプルコで日本人と原住民との間に衝突事件が発生している。このため、支倉常長及び、彼が指名した随員などの上位の使節団員を除く日本人の刀が取りあげられている。そして、「取り上げた武器は之を保管して、帰国の際還付す」るか、あるいは売却すべしとのヌエバ・エスパニア副王の布告が、前出の『大日本史料 第十二編之十二』に記されている。更に、日本人に危害を及ぼす乱暴を働いてはならない。また、日本人を怒らしめ、紛争を惹起こすような挙動をしてはならないという一六一四年三月十五日付の布告を、ヌエバ・エスパニア副王・長官・総督兼総指揮官グワダルカサル長官は出している。⁽⁴⁾

常長の一行は陸路をメキシコ市へと向かったが、同市に到着したのは、おりしも聖週間（この年は三月二十三日より二十九日まで）のさなかであり、様々な宗教儀式を目撃している。メキシコ人の「宗教に熱心なるを見て、支倉の随員の内七十八名は洗礼を志望するに至れり」と、アマティは記している。そして、支倉常長及び主立った日本人三十名が、ルイス・ソテロ神父その他の修道士とともにスペインに向かってメキシコ市を出発したのは、一六一四年五月九日「基督昇天の日」である。残りの日本人は一六一五年四月二十八日までメキシコ国内に滞在しているが、その後の彼らについては後述する。

メキシコ市を出発したのちプエブラ市に到着した常長らの一行は、この市の市長からも歓待されている。そして、大西洋岸の港サン・フワン・デ・ウルーア（現在のベラクルス）から十三日間を要してハバナに到着したのは、一六一四年七月二十三日である。

ところで、ハバナへ向かう一行が乗船した軍艦は、アントニオ・デ・オケンド司令官がひきいる艦隊に属していた。このオケンド司令官は、のちにオランダ海軍と交戦した英国ケント沖海戦で敗北を喫しているものの、その雄名は後世に残されている。この海将の名をとった「アルミランテ・オケンド」(オケンド提督)号は、米西戦争に際してスペイン本国からキューバに派遣された。この時、サンティアゴ・デ・クーバ沖海戦を観戦した秋山真之大尉(当時)は、この艦の最期を見とどけている。

さて、ハバナに到着した常長らは、「総督、司教及び高位の人々によって、大いなる愛情と丁寧さの表現をもって(Con molta dimostrazione d'amore e de cortesia)」迎えられたと、アマティは記している。ローペ・デ・メンダリス司令官のひきいる艦隊のハバナ到着を待ため、常長らはハバナに十八日間滞在することになった。

スペイン本国と新大陸を往来するスペイン船は、英国及びフランスの海賊によってしばしば襲撃されていた。海賊といっても、遅れて新大陸への進出を意図していた自国の王室によって彼等は支援されていた。これに対抗して、スペイン船はフロータ(船団)を組んで大西洋を渡っていた。一五六一年以降、船団体制は更に強化されており、如何なるスペイン船も単独で新大陸に向けて航行することは禁止された。こうして、カルタヘナ、ベラクルス、サント・ドミンゴなど大西洋岸及びカリブ海の主要港を出帆した船は、すべてハバナ港に終結した後、船団を組んでスペインを目指していた。

一六一四年八月七日、常長の一行はスペインへ向かってハバナを出発した。その後の常長については、既に多数の出版物で触れられている。また、新大陸の主要な海上輸送根拠地であるハバナを離れたあとの彼等の動向は、この稿の対象をはずれることになるので、ここでは省略する。

六 ヌエバ・エスパニア最後の航海

常長に同行したもののメキシコに残された日本人達は、一六一五年四月二十八日、アカプルコを出発したサン・ファン・デ・パウティスタ号とともに日本に向かった。この時、ヌエバ・エスパニア副王は、日本人に対して今後は日本からメキシコに直航することなく、必ずフィリピンを経由することを命じている。また、スペイン人の航海士及び水夫に対しては、日本からフィリピンを経由せずにメキシコに帰来した場合には、死刑に処すことを申し渡している。

一方、この船には、スペイン国王フェリーペ三世の使節として、サンフランシスコ会派のディエゴ・デ・サンタ・カタリーナら三人の神父が同乗していた。

サン・フワン・デ・パウティスタ号は、八月十五日に浦賀に到着した。カタリーナ神父らは、早速、家康及び秀忠への謁見を希望したものの実現しなかった。その頃既に、キリシタンに対する徳川幕府の迫害は激しくなっていた。在日宣教師の大部分は海外に追放され、全国の教会も破壊されていた。

結局、サンタ・カタリーナ神父らは、マニラから渡航していたペドロ・パウティスタ神父及び、江戸で獄中にあつたディエゴ・デ・サンフランシスコとともに、国外追放さながらに日本を離れざるを得なかった。彼等に乗せたサン・フワン・デ・パウティスタ号は、一六一六年九月に浦賀を出帆しているが、途中四十回もの暴風に遭遇した。二百名近い犠牲者を出し、五ヵ月かけてグワダハラ州のティントーケ湾に到着したのは、一六一七年二月下旬である。サン・フワン・デ・パウティスタ号は、その後アカプルコへ回航されている。

一方、ヨーロッパからメキシコへ帰って来た支倉常長の一行は、一六二〇年四月二日、アカプルコでサン・フワン・デ・パウティスタ号に乗船し、七月にマニラに到着した。日本で建造され、二度にわたって太平洋を横切りアカプル

コまで到着したサン・フワン・デ・パウティスタ号が、そののちどのような運命を辿ったかは不明である。

支倉常長は、マニラからの便船によって一六二〇年九月に日本に帰着している。一方、マニラから日本へ潜入しようとしたルイス・ソテロ神父は、一六二二年十月に薩摩で捕らえられ、一六二四年八月、大村で処刑された。

幕府は、一六二四年(寛永元年)にスペイン船の来航を禁じており、新大陸との交流は完全に杜絶した。一六三九年(寛永十六年)にはポルトガル船の渡航も禁止され、鎖国体制は強化されることになった。

第二章 鎖国期

一 新大陸に関する知識の紹介

明朝の中国に渡り、利瑪竇(りまとう)の漢名で知られるイエズス会宣教師マテオ・チッチが坤輿(こんよ)萬国全図を完成したのは、一六〇二年である。のちに我国にも渡来した坤輿全図は、新大陸を含めて世界地理に関する知識を鎖国時代の我国に伝えている。十七世紀の極く早い時期に到来したと思われる坤輿全図は、いくつかの模写図が作られている。例えば、仙台藩岩出山伊達家学問所である有備館に伝わり、現在、仙台市博物館に所蔵されているのは、その一つである。

寛永七年(一六三〇)、「欧羅巴人利瑪竇(まておりっち)之作三拾貳之書邪門強化之書」の輸入閲覧が禁じられている。いわゆる「寛永の禁書」であるが、当時の中国において刊行された天主教関係の書籍及び邪蘇会士が記述した西洋科学書の輸入及び閲覧禁止令である。

のちに徳川吉宗の時代の享保五年（一七二〇）には、「寛永の禁書」の対象となっていたマテオ・リッチ等の著作の禁入禁止令を弛めた「弛禁令」が出されている。当時の洋書輸入に關しては、キリスト教に關係した書物の輸入が禁止されていたのであって、全面的な禁令が実施されていたのではないとの見解を板沢武雄博士は示しておられる。⁽⁵⁾

鎖国体制が強化されて七十年が経過した寛永五年（一七〇八）、布教を目的に屋久島に潜入したイタリア人宣教師ジョバンニ・シドッチが捕えられ、江戸の切支丹屋敷に護送られている。その翌年、シドッチの尋問にあたった新井白石は、このイタリア人宣教師から得た知識をもとに、『菜覧異言』と『西洋紀聞』を著している。

正徳三年（一七二三）に著された『菜覧異言』は、我国における最初の体系的な地理書として、当時の人々に新知識を与えている。一方、正徳五年（一七一五）に完成した『西洋紀聞』は、キリシタンに関する記述が多いため、その内容は門外不出とされていた。

三冊本の『西洋紀聞』の中巻は、世界地理する記述である。「イスパニヤ」については、「其属国十八あり。またソイデ・アメリカの地を併せて、新たにノーワ・イスパニヤと号す。ノーワとは、此にいふ新（あらた）也。余皆これに倣（なら）ふ。其俗に、ノロバインパンヤといひし、これ也」と、南米（ソイデ・アメリカ）とメキシコについて簡単に説明している。

更に、「ノオルト・アメリカ諸国」の見出しがある北米大陸の項には、メキシコに関する次のような記述がある。

「ノーワ・イスパニア、漢に新伊西把你亜と翻訳す。我國の俗にノロバイスパニヤ、またはノビスパンヤといひし此也。ノオルト・アメリカの南地にあり。ここを過て南する時は、すなわちソイデ・アメリカの地也。イスパニア人

併せ得て、新たに国を開きし所也。其海口アカプールといふ也。番舶輻湊、人民富饒(じよう)之地也といふ。」

これに続いて、マニラからアカプルコに向かったサン・フランシスコ号が我国に漂着した史実が極めて簡単に記されている。なお、新井白石は、その時期を「慶長十五年」と記しているが、正しくは慶長十四年(一六〇九)である。

そのあと、「ソイデ・アメリカ諸国」の項では、ブラジル、ペルーについて極く簡潔な記述が見られる。そして興味がひかれるのは、「南亜墨利加、巴太温^{バタウン}の地は、長人国也と注せり(中略)。大きな屋の内に、火を焼きし跡ありて、其辺に足跡あるが、よのつねの人の足、二つを合わせしほどにて(後略)」とある。パタゴニアの地名の由来となっている巨人伝説及び、「火の島」といわれるティエラ・デル・フェゴに関する記述である。

二 「古巴」をめぐって

洋書輸入に関する「弛禁令」を契機に、十八世紀後半以降の我国では、世界地理に関する著述が活発になっている。そのなかで、新大陸に関する地理的知識がどの程度まで紹介されていたのか、キューバに関する記述を中心に辿ってゆくことにする。

まず、中国の明代に作成された坤輿萬国全図には、「牙壳加」(ジャマイカ)、「小以西把你亜」(イスパニョーラ島)などのカリブ海の島々とともに、「古巴」(キューバ)が描かれている。現代北京語による「古巴」の発音は、*gu ba* である。この場合、(g)は無気音であって、(k)の発音に近く、(b)も無気音である。現代中国語でも、キューバは「古巴」と表記されており、その発音を片仮名表記すれば「クーバ」となる。スペイン語の発音¹⁾ *kuβa* にはほぼ等しい。

次に、新井白石の『菜覧異言』の目録には、

「卷之五 北亜墨利（ノオルト・アメリカ）

古巴（クハ）島

小伊斯把你亜（スパンヨウラ）」

とあり、キューバの説明して、

「クハ 古巴島 花地南海中ニ在ル島。牙里加。著名ヤマイカ。亦其南ニ在リ。即（チ）小島也。スパンヨウラ

小伊西把你亜 古巴ノ東ニ在ル島」。要するに、キューバは花地（フロリダ）の南海にある島であり、その更に南にはジャマイカ、東にはイスパニョーラ島があると、極めて簡単な地理知識を伝えている。

豊後中津藩の藩医前野良沢がオランダ語の学習を志したとき、既に四十歳を越えていた。晩学にもかかわらず、多くのオランダ語学習書、そして物理学、築城、地理などのオランダ書の翻訳を刊行している。

加えて良沢は、一七七七年に『管蠡（かんれい）秘言』を著している。⁽⁶⁾これは、西洋の自然科学を紹介した著述であるが、南亜墨利加（ソイトアメリカ）及び北亜墨利加（ノウルドアメリカ）の二大州を含めた「六大州」に関する地理的説明がある。ここで興味深いのは、コロンブスに関する次のような記述である。

ヨーロッパは、元来、世界は欧州、アジア、アフリカの「惟（ただ）三世界ノミニテ、復（また）国土アルコトヲ知ラズ」。「然ルニ（中略）吾邦明応二年」即ち一四九二年に、「意大利亜（イタリア）国の人閣竜（コンリヨン）ナル者」即ちコロンブスが、「三世界ノ外ニ、海中尚国土アルベキコトヲ量テ、西海ニ舟行ス」と記しているが、良沢は、コロンブスを海外布教の宣教師であると推測していた。

コロンブスは新大陸に到着したが、そこは「果テシ別天地ナリ」。そして「遂ニ彼地ニオイテ許多(あまた)ノ国邑ヲ創造スルニ至ル。即、今南亜墨利加(ソイドアメリカ)ノ内、『イスパニヨラ』、『クウハ』(古巴)、『ヤメイカ』、『セントミンカ』等ノ諸国是ナリ」。「ヤメイカ」はジャマイカ、「セントミンカ」はサント・ドミンゴ島(現在のドミニカ共和国及びハイチ)である。

その五年後には、ポルトガル人「亜墨利求息」(アメリカギウス即ちアメリカゴ・ウェスプッチ)が「西南海中ニ到リ」、アメリカが大陸であることを発見した史実を良沢は伝えている。「其人ノ名ニ因(ちなん)デ、亜墨利加(アメリカ)ト号ス。南亜墨利加(ソイドアメリカ)是ナリ」。以上は、新大陸「発見」に関する極めて簡単な記述であるが、当時の日本人にとっては新知識である。

一七八〇年代以降、前野良沢、大槻玄沢、志筑忠雄らによるオランダ書の翻訳あるいは地理地理に関する著述が活発である。十九世紀初めには、山村昌永(才助)が、『西洋雜誌』及び『増訳采覧異言』を相次いで完成させている。文化五年(一八〇五)には、司馬江漢の『和蘭通舶』が刊行されている。⁽⁷⁾江漢は我国最初の銅版画を作成するとともに、はじめて油絵を描いた江戸時代の画家として知られているが、『和蘭通舶』二巻は、世界地理に関する著述である。この書では、世界を五大州にわけており、「天下第四ノ大州ヲ『亜墨利加(アメリカ)ト云(う)」。そして、アメリカの「南北二国アリテ、広大無限ノ地ニシテ、多クは人物愚癡、剛狂ニシテ理非ヲ弁セズ」とある。「新大陸」に関する当時のヨーロッパ人の理解を、司馬江漢はそのまま借用しているのである。

「卷之二」は、アフリカ南端の希望岬を回ってアジア、インド、中国、日本に至るオランダ船の航路と沿岸各国の地理について説明しており、南北アメリカ大陸に関する記述は除外されている。

更に四十年後の弘化二年（一八四五）には、箕作省吾が『坤輿図説』を刊行している。国立国会図書館には原本四巻が所蔵されているが、その目録に「南北亜墨利加有名諸島」とある。そして「巻四上」には、「亜墨利加州、一名西印度。有名島嶼左ニ列挙ス」として、キューバなどの西印度諸島が紹介されている。

次に引用するのは、原典では五行にわたるキューバに関する記述であるが、それ以前に刊行された地理書に比べると、遙かに詳細な内容である。

「古巴（きゅは）、分（チ）テ六州とす。伊斯把泥亜に隸ス。土地肥沃トイエドモ巖石多シ。其ノ東部ハ一連ノ青山断続連綿シテ西ニ走ル。氣候ハ常ニ苦熱、終歲冬ヲ知ラズ。タダ時々恐ルベキ海嘯アリ。其首府ヲ『ハハナ』ト云。商口ニ萬五千、其府内ニ此近傍伊斯把泥亜所領ノ総督鎮アリ。」

「分（わかち）テ六州トス」とあるが、伊斯把泥亜（イスパニア）人総督の支配下にあった当時のキューバは六州に分割されていた（一九七六年の新行政区画によって現在のキューバは特別自治区及び十四州である）。

キューバ東部の山岳地帯そして、シクロン（台風）の時に見られるカリブ海及び大西洋の荒波を指していると思われる「時ニ恐ルベキ海嘯アリ」などの記述は、カリブ海最大のこの島の特徴を巧みに描いている。この書の序文には、「引用西書」として、参考にした七冊のオランダ書が挙げられているが、この地理書の内容が充実していることを裏付けている。

ところで、この『坤輿図説』という書名あるいは、前出の『坤輿萬国全図』にも用いられている「坤輿」は、中国語の *kūnyu* であるが、この当時の我国でも「地球」あるいは「世界」を示す記号として用いられていた。

ところで、オランダ語で表記されていた外国地名の漢字表記には、江戸時代の洋学者達の苦心のほどがうかがわれ

るが、ここでは「キューバ」の地名表記について考えてみよう。

まず、新井白石が「クハ」と片仮名表記しているのは、『坤輿萬国全図』に表記されている「古巴」を当時の漢音の知識を援用したものであろう。オランダ語によるキューバの表記はCubaであり、ky・baと発音されるが、英語の発音kjuːˈbɑːにはば等しい。前野良沢が「クウハ」と表記しているのは、正確な発音はさておいてオランダ語表記に基づくものであろう。ただ、片仮名表記が「クウバ」でなく「クウハ」となっているのは、濁音記号をつけなかった当時の表記方法に従った慣習である。

箕作省吾は、「キユハ」と表記している。彼の著述『坤輿萬国全図』及びその翌年(一八四六年)に刊行された『坤輿図識補』に示された世界地理及び西洋史に関する知識は、それ以前に刊行されている類書の水準を遙かに凌いでいる。箕作省吾の知識は、オランダ書から得られたものであるが、「キユハ」の発音も、オランダ語の正しい発音に近づいていると理解されるが、濁音記号の脱落は、前野良沢の場合と同じ理由によるものである。

三 『東航紀聞』

鎖国時代にあつて異国の土を踏み得たのは、不運な漂流者達である。漂流者達が見聞した外国事情は、海外に関する貴重な情報であり、また、江戸期も終りに近い当時の我国にあつては国防につながる資料である。このため、幕府あるいは漂流者の出身地の藩当局によって、漂流者の聞き書きが作成されていた。紀州徳川家の家臣岩崎俊章が、嘉永四年(一八五二)に藩公に献上した『東航紀聞』も、そうした文書の一つである。

酒、塩、砂糖などの積荷とともに、兵庫西宮を出帆した栄寿丸は、天保十年十月、犬吠岬の沖合を漂流し、翌年(

一八四二二月にスペイン船に救助されている。その翌月、船頭善助ら九名は、カリフォルニア半島南端に上陸するが、そこはメキシコである。

彼等はやがて大西洋岸の港町マサトランへと移されているが、九ヵ月間にわたってメキシコに滞在したのち、マカオを経由して天保十四年（一八四三）十二月、長崎に帰着している。船頭善助は紀州牟婁郡出身であるため紀州藩に引渡されることになり、長崎奉行所において「善助を相渡さ」れた。同じ船の水主（水夫頭）弥市も、牟婁郡の出身である。彼もまた、『東航紀聞』の作成に際してその見聞を聴取されているが、彼のメキシコ滞在は二年間にわたっていた。

こうして、数ヵ月間にわたる聞き書きののち、「風土紀事」六巻を含めた『東航紀聞』十巻が作成された。『東航紀聞』作成の目的について編者の岩崎俊章は、「亜墨利加州絶遠といへども（中略）海外に隣れる地なれば、其国情、俗尚を辨知せん事、海防事務の要なるものなり」と序文に記している。

また、「亜墨利加州」は、他の大陸とは「隔在せるが故に、輿地図をはじめ、西洋の譯説等すべて此地の事を記せるの簡略にして詳審ならず」。要するに、アメリカ大陸に関する詳細な情報が我国に伝わっていないと言うのである。したがって、この『東航紀聞』は、メキシコに漂着した善助の「親見実聞の紀事なれば、此地風土の梗概を觀察するにをゐては、此編に若（しく）はなかるべからん」と、自負している。更に、「採摘書目」として、前節でとりあげた『増譯采覧異言』、『坤輿図識補』を含めて計六十二冊の参考文献を列記している。善助は紀州候への伺候を許されており、藩公に献上される目的をもって編述されているため、万全を期したと思われる。

こうして編述された『東航紀聞』であるが、「漂流始末」三巻よりも、「風土紀事」六巻（現存は三巻）に関心が持

たれるが、その当時においてはメキシコ事情を伝える極めて貴重な報告書である。また、善助らは「番字(スペイン語―引用者注)をも学習せしとなれば、番字番語をも詳に記注し置(く)べしと」の藩公の尊命によって、編者は「善助と対注し、亜墨利加番字輯纂一卷を編録してこれを上げり」とある。「番字筆墨」、「音辞」など、「亜墨利加番字」たるスペイン語に関する記述が多いのはそのためである。なお、「番字」は「蕃字」と同じであり、外国語に対する当時の呼称であることは言うまでもない。

『東航紀聞 卷之四』では、「風土紀事総括」として、先ず「墨皮可(メヒコ)の管内、加里勿爾亞(カリホルニヤ)マサタラン地方の、「天象氣候」に触れている。続いて「歳曆節序」の項では、「ヌメロは数をいふ。デは辞のつなぎなり」と、スペイン語前置詞 *de* について説明している。更に、少々おぼつかない字体であるが、*numero de* というスペイン語の筆記体が例示されている。⁽⁸⁾更に、その年(天保十三年)の西暦年号が、一八四二年であることを算用数字で記している。

「月の呼称」では、二月を「ヘペレロ」(正しくはフェブレロ)、四月はアプリールと表記すべきを「マユウ」、五月をマーマヨとすべきを「アプリール」と順序を間違えて表記している。こうした誤りを除いたその他の月名の片仮名表記は、一応納得出来る。一方、「日の呼称」については、根本的な間違いがあるものの、わずか九ヵ月間のメキシコ滞在で善助がスペイン語の発音を記憶したのであれば、驚くべき努力の結果である。

「卷之五」の冒頭の項は、「番字筆墨」である。先ず、「メヒコ国にて用ゐる文字を、カステイヤノといふ」とあるが、Castellano(カスティジャーノ)はスペイン語と同義である。続いて、「其字体運用俱(とも)に和蘭文字と大同小異なるものなり」と記し、スペイン語の「字数二十八字」と説明している。

字母について説明したのち、「メヒコ」は、ホタ・イ・セ・オ即ちMEXICOの六字の字母によって構成されると具体例を示している。更に、「真字」として活字体大文字、「行字」として筆記体大文字をそれぞれ例示しているが、基本的な誤りは見られない。

更に、「言辞」の項は、約六百十字で記された前書きと、主題別の単語集によって構成されている。この前書きの部分は、スペイン語に対する編者の理解を知る上で興味深いので、左にまとめてみよう。

(一) 漂流者達が耳にしたスペイン語は、「同謂なるも聞きを異にし、或は聞訛(なま)れるも多かるべく」と知らされている。要するに、同一内容の表現であっても、表音が異なると言うのである。同一事物に対して異なった表現があっても当然なのだが、スペイン語名詞の文法上の性genderによる名詞及び形容詞の語尾変化あるいは、動詞語尾の活用変化に漂流者達がとまどったことは容易に想像される。

(二) 編者は、メキシコの「言語は佛蘭西語を原(もと)とす」と記している。そして、ヨーロッパには、ほぼ三種の言語があり、その「第一は羅甸(ラテン)語なり。コレ伊太利亚(イタリア)、拂郎察(フランス)、伊斯把你亜(イスパニア)等諸国ノ言語由(よ)つて出る所なり」とある。そして、他に「入爾馬泥亜語」があつて、「オランダ、イギリス、テナマルカ、スエシヤ等諸語の言語由て出る所なり。第三はスラボニア語なり」として、「オングリア(ハンガリー)、ポロニヤ、ヤロシヤ等諸国の言語」の源となつてると記している。更に、スペイン語は伊語、仏語とは「少(々)異なれども俱(とも)に羅甸語より出て、其原語同じきものと察(み)るべし」との理解を記している。

(三) 「此国の言語、マネラの語と同じきもの多く、英吉利(イギリス)の語とは皆異り」とある。「マネラ」はマニラを指しており、右の理解は正しいのだが、「マネラ語と同義語多きは、マネラは伊国の管地なればなり」とあ

る。鎖国期以前の日本人には、フィリピンがスペインの植民地であることが充分に理解されていたことを考えれば、右の間違った理解は極めて興味深い。

そして、マニラで使用される言語が、「英辞(英語—引用者注)」と異なるは、是亦(コレマタ)国語の出所異なる故なり」としている。

更に、次に示すように主題別に、日常使用される単語及び、極めて簡単な会話表現が収録されている。

天文	二十五語
地理	六十三語
已下南北亞墨利国地ノ名	十五語
時令	十一語
人倫(人及び職業)	四十四語
身体	四十四語
家室	十四語
服飾	二十九語
飲食	二十語
器材	九十六語
草木、附穀豆類	二十三語

鳥獸

二十七語

虫魚

十六語

言語

百五十四語

数日(数字)

三十七語

右の各項目において、合計六百十八の語彙あるいは表現に関して、日本語に対するスペイン語の片仮名表記が集録されている。

「飲食」、「服飾」など日常生活に関係の深い表現、例えば、米(コメ)といった単語には「アロース」と正確な発音が表記されている。一方、動作に関する表現では、動詞の原形、命令形などの動詞の活用形に混同がみられ、聞き取りが充分でない。また、感情に関する表現の理解に困難を感じたようであり、片仮名による発音表記に正確さを欠いているが、言語習慣の違いを考えれば止むを得ないだろう。

四 『海外異聞』

『東航紀聞』の編者岩崎俊章が、その序文に「彼絶域に流寓し、唐山を転歴し、恙(つが)なく帰朝せしは、奇幸にして亜墨利加風土見聞の嚆矢ともいふべし」と記しているように、アメリカ大陸への漂着とその後の生還は、それ以前には例がなかった。それ故に、善助らの漂着に関しては、『東航紀聞』以外にも『天保新話』などいくつかの記録文書が刊行されているが、ここでは『海外異聞 一名亜墨利加新話』をとりあげる。

善助ら漂流者の一行に、阿波出身の水夫初太郎がいた。善助とともに帰国した初太郎は、徳島藩主蜂須賀公の庭前に召され、侍臣によって漂流事情が尋問されている。その結果、儒臣前川 文らに対して漂流記の編纂が命じられ、天保五年(一八四四)に『亜墨新話』が藩公に献上されており、これには同藩儒臣の那波祈願が漢文で記された識語が附されていた。更に、編者の前川 文は、誤謬を避けるために「地理図説」を参考にし、「且(かつ)他言の載するところも採録し」と、序文に記している。『東航紀聞』の場合と同様に藩主に献上されるため、当時刊行されていた地理書を参考にして万全を期したことがうかがわれる。

ところで、嘉永七年(一八五四)には、那波及び前川が記した識語並びに序文を削除して『海外異聞 一名亜墨利加新話』として刊行されている。その前年(一八五三)のペリー来航を契機に開国の気運がたかまっていた世情のなかで、一般読者を対象にした刊本である。以下の稿では、荒川秀俊編『異国漂流記読集』(地人書館一九六四年)所収の『海外異聞』を参考にした。

見慣れない異国の事物を紹介するのに、絵で示するのが最も効果的である。『海外異聞』には、初太郎のメキシコ滞在中の見聞に基づく多数のスケッチが描かれているが、「マサトラン街上」などメキシコの風物描写が含まれている。『海外異聞』の識語には、徳川島の「画史」守住定輝に絵を描かせたことが記されている。漂流者の初太郎から状況を聴取して描いたのだろうか、「瑪撒禿蘭(マサトラン)三階造り人家の図」など、中国的な異国風である。

漂流者達が体験した様々な異文化のなかでも、食生活における全く目新しい食事や嗜好の違いは、彼等にとって大きなカルチャー・ショックだっただろう。『海外異聞』にも、「飲食」の項があり、次のような記述がみられる。

「飲食ハ鳥獸を主として(中略)、朝ハ過稀(こうひい)、触各刺茶(ちよろらうちえ)などと云ふもの、或は常に煎

茶(中略)に砂糖をまじへて吞、燕餅(パン)を食する迄なり」。

右は、朝食に供せられるコーヒー、ココアあるいは紅茶に関する記述であるが、更に、コーヒーについて詳細に説明されている。

「コウヒイは其樹高さ八尺より一尺計(ばかり)に至る」。その実は、「大きな桜の実の如し。熟すれば紅なり。(中略)採(つ)て乾けば黒色に変(ず)。殻の中に二ツの豆の如きものあり。是を炒(つ)て」、「挽碎、砂糖にまぜて熱き湯に点し飲(む)也」とある。そして、「味香し能(よく)飲食を進め、心氣を健にし、頭腦を輕し、風邪」などの諸病に有効であると説いている。

コーヒーとはほど遠い存在であった当時の日本人が、右の説明を実感するのは不可能だっただろう。それから四十年後、コーヒー栽培のため「榎本殖民団」がメキシコに入植している。コーヒーと全く無縁の食生活を送っていた明治二十年代後半の日本の若者達にとって、未知の農産物との苦難であった。彼等が味わった数々の辛苦については、後述する。

この『海外異聞』にも、「言語」の項がある。「亜米利嘉の言語六種あり。墨是可(めきしこ)に用ゆるを墨是可語といひ、字露(ペーリウ)にもちゆるを字露語といひ、伯刺西自(ふらしいる)にもちゆるを打弼韻些(たひいゆひすへ)語とし、加刺苛印(からべいん)にもちゆるところを加児奇些(かるきすえ)語とす。以上の四種ハ、其土にいにしへより伝へたる語なり」。

右の記述は、インディオと言われる先住民族の使用言語についての説明であるが、「外に羅甸(らてん)語都逸(といつ)語の二種あり。これハ欧羅巴より伝ふる所なりとぞ」とある。以上の理解が正確でないのは当然であるが、先

住民固有の言語と外来者であるヨーロッパ人の言語という、新大陸における言語の複数性を指摘している点に興味を持たれる。

『海外異聞』にも、天文、時令、地理など十項目に分類して、スペイン語の単語及び表現計三百二十七が、片仮名で表現されているが、『東航紀聞』の表記よりも不正確である。

『東航紀聞』及び『海外異聞』のいずれもが、それぞれ藩主の指示によって編集されているが、開国の圧力が加わっていた当時あっては、新しい時代の流れに対応するために海外知識が必要とされていたからである。

五 浜田彦蔵『漂流記』

のちに米国民権を取得してジョセフ・ヒコを名乗り、「アメリカ彦蔵」とも称された浜田彦蔵は、その『漂流記』及び英文で記された『自伝』“The Narrative of a Japanese”（『ある日本人の物語』）を残している。⁽⁹⁾鎖国期末期の漂流者として彦蔵の名はよく知られており、彼に関する伝記類の刊行も少なくない。⁽¹⁰⁾

彦蔵ら漂流者は、米国船オークランド号に救助され、嘉永四年（二八五二）二月、サンフランシスコに到着している。約一年間の在米ののち、漂流者の一行は帰国すべく米国軍艦に乗船して香港、マカオに到ったが、彦蔵ら三名は再度渡米すべく、嘉永六年六月にサンフランシスコに入港した。

ところで、彦蔵の『漂流記』には、彼の最初の渡米時の記述として、「此処を『カルホニア』といふ。元『メキシコ』国の領分」であったが、「四ヶ年前、アメリカ領に定（ま）り」とある。そして、「又一度メキシコと亜国（米
国——引用者注）の合戦を遠見し、又大炮打合（い）の軍艦中に有（り）し事あり」と記されている。メキシコが、カリ

フォルニア、ニュー・メキシコ、アリゾナ、ネバダなど当時の国土面積の四〇パーセントを米国に割譲することになった米墨戦争は、一八四八年である。従って、彦蔵が「遠見し」た「メキシコと亜国の合戦」とは、米墨戦争以後における両国の国境紛争を指すのだろう。

二度目のサンフランシスコ到着後間もない一八五三年七月、サンフランシスコ港税関長サンダースに伴われてニューヨークへ旅行している。『自伝』（以下の稿は、平凡社版『アメリカ彦蔵自伝』による）には、「七月のなかば、海路サン・ジュアン・デル・スーをへて東部に向かい一八五三年八月五日ニューヨークに到着」とある。プエルトリコの主要港サン・ファンに寄港する「海蒸気船」（汽船）を利用したと思われるが、彼等は現在のパナマ共和国の大西洋岸の港コロンから乗船したのだろう。帰路は翌年十一月三日に「私たちはニューヨーク・パナマ経由で、サンフランシスコへ向け出発した。そして一八五四年十一月二十八日に（サンフランシスコ）に到着した」とある。

米国企業のパナマ鉄道会社が、太平洋と大西洋を結ぶパナマ地峡横断鉄道の建設を開始したのは一八五〇年である。そして、一八五五年にこの鉄道は開通している。彦蔵らがパナマ地峡を横断した一八五四年当時にとっては、まだパナ横断鉄道を利用出来なかった。ともあれ、彦蔵は、パナマ地峡を横断した最初の日本人である。

のちに日本に帰国した彦蔵は、一八六一年十一月再度渡米している。そして同年十二月、「パナマに着き、地峡部を横断、ニューヨーク行の会社の汽船チャムピオン号に乗船」した。この時の彦蔵は、パナマ地峡横断鉄道を利用したはずである。そして、その前年（万延元年）には、遣米使節団の一行が既にこの鉄道を体験しているが、次章で改めて触れることにする。

六 『東洋漂客談奇』

天保十二年(一八四二)一月、土佐の漁師万次郎ら五人は土佐沖で遭難し、現在の鳥島に漂着した。五ヵ月にわたる無人島生活ののち米国の捕鯨船ジョン・ホーランド号に救助されている。ホノルル入港とともに他の漁師達は下船したが、万次郎は捕鯨船に乗組んで航海を続けた。

嘉永五年(一八五二)、万次郎は十二年ぶりに故国に帰って来たが、これ迄に紹介した他の漂流者達と同じように、土地の学者の聞き取りによって漂流記が編纂されている。こうして、吉田正督『東洋漂客談奇』が残されているが、この書の記述に従って万次郎の航海を辿ってみると、二度にわたって南米大陸の南端を通過している。⁽¹¹⁾

最初の航海では、万次郎らを救助してくれた捕鯨船ジョン・ホーランド号に乗船して、一八四一年に米国西海岸を出航している。航海中にジョン・万次郎と改名しているが、のちの中浜万次郎である。ジョン・ホーランド号はグワム島沖及び日本近海での捕鯨ののち、南太平洋へ移動した。

『東洋漂客談奇』の記述に従えば、「南アメリカ火地岬を廻り、一八四三年四月に米国東海岸マサチューセッツ州に帰港している。「火地岬」とは、スペイン語で「火の土地」を意味する「Tierra del Fuego」ティエラ・デル・フエゴ島である。

三年余にわたる米国滞在中に、万国地理や航海術などの新知識を学んだ万次郎は、弘化三年(一八四六)第二回目の大航海に出发している。この時は大西洋を横断して、アフリカ大陸南端の希望峰を廻って琉球に至っている。帰路もふたたび希望峰沖合を通過して、一九四九年に米国東海岸に帰着した。その翌年には、サンフランシスコへ向かう商船があったので、万次郎はこれに乗船している。

この時の航海では、「南アメリカの岬を廻り、此地方の人、身丈ケ八尺、女七尺餘有之候段承り候。南アメリカの内に、タコアナと云（い）、イスハニヤより開き候処に御座候由。入津、数日滞在仕り、薪水を取り入」れている。

男性の身長八尺は約四・二メートル、女性でも二・一メートルの身長となる。これは、一五二〇年にこの海峡を通ったマゼランが、原住民の逞しい姿を見て、古いスペイン語で「巨人」を意味する *patagón* と呼んだと言う巨人伝説に由来している。そして、万次郎亜数日滞在した「タコアナ」とは、ペルー南部の Tacna と思われる。チリとの国境に近い町である。

更に、ジョン万次郎の談話として、「南アメリカ南之岬を廻りし時、氷山の如き流（れ）来り候を見申（し）候。大成は四、五里周りも御座候よし、船に触れぬ様に乗り申候」とある。

万次郎はサンフランシスコからホノルルに渡り、その翌年（一八五二）に日本に帰国しているが、これまでの漂流者と同じように長崎奉行所の取調べを受けている。

その後の万次郎は、土佐藩の士分に召抱えられ、教授館出仕となっている。のちに江戸に出た万次郎は、旗本にとりたてられ御普請役格となり、中浜万次郎を名乗ったのは嘉永六年（一八五三）である。開国期にあって英語通訳あるいは軍艦操練所教授、開成所教授を歴任した万次郎は、明治新政府によって開成学校二等教授として中博士を命じられている。

第三章 開国期

一 遣米使節団

万延元年(一八六〇)一月、正使新見(しんみ) 正興(外国奉行兼神奈川奉行)、副使村垣範正(外国奉行兼箱館奉行・神奈川奉行)に諸役人及び従者を加えた一行七十七名が、米国に向けて出帆している。使節団の目的は、その前年に締結された日米通商条約の批准書交換である。彼等に乗せた米国軍艦ポーハタン号は、サンフランシスコに寄港したのち、同年四月二十五日(陽暦)、パナマ港に到着した。ポーハタン号に同行した威臨丸も、本来はパナマ回航を計画していたが、主として技術的な理由によってサンフランシスコ迄の航海となっている。

その頃のパナマは、グラナダ連邦として、現在のコロンビア共和国(当時はコロンビア合衆国)の一部を構成していた(一九〇三年、パナ共和国はコロンビア共和国から独立した)。当時のパナマでは、太平洋岸のパナマ市と大西洋岸のコロンを結ぶ横断鉄道が一八五五年に開通したことは既述の通りである。

ここで、一九世紀のラテン・アメリカにおける鉄道敷設状況に触れることにする。先ず、ラテン・アメリカ地域において最初に開通した鉄道は、一八三七年のハバナ・グイネス間の四〇キロメートルである。次に、一八四五年の英領ジャマイカ及び、一八四八年の英領ギアナにおける鉄道敷設がこれに続いている。そして、一八五五年当時のラテン・アメリカにおける鉄道総距離は八九一キロメートルに達していたが、なかでもカリブ海地域が突出しており六四四キロメートルの総距離数である。⁽¹²⁾ ちなみに、我国最初の鉄道が新橋・横浜間二九キロにわたって開通したのは、明治五年(一八七二)である。

ともあれ、一行が到着した四月末のパナマでは、そろそろ雨期が始まろうとする時期であるが、この地は高温多湿で知られている。パナマ運河建設は、熱帯病の流行によって工事が難航し、フランスのパナマ運河会社は一八八九年に破産している。その原因となった熱帯病の蔓延に拍車をかけたのが、この地の気候である。

「巴納摩」(パナマ)の「街市はホノルルにも劣りて人家少なく」、また「季候極めてあしく、他邦の人は一泊しても必ず煩(わづら)ふよしなれば、陸に揚れば速に車にてアスヒンワルに達し、直(ただち)に船にのる事とす」と、副使の村垣淡路守は彼の『航海日記』に記している。

日本人の一行は、この地の暑さへきえきしながらも、亜熱帯の風物は物珍しかったに違いない。

勘定組頭として一行に参加していた森田岡太郎は、この地の風物を次の七言絶句に記している。⁽¹³⁾

奇獸珍禽^{ムラガル}簇^ニ異花^ニ

有^ル椰株^ニ処^ニ兩三家

眼前^ノ風景難^シ看取^ン

電激^ニ奔過^ス霹靂車^ニ

現在の我々から見れば、パナマにそれほどの「奇獸珍禽」が生息しているとは思えないが、日本人の一行には「椰株」(椰子の木)は物珍しい熱帯樹である。なによりも、日本人として初めて体験した霹靂車(汽車)は、風景を看取し得ないほどの速さであり、まさに電激奔過である。そして、森田岡太郎自身は、初めて実感したパナマ運河鉄道について、自らが書き記した『亜東日記 二』に、次のように記している。⁽¹⁴⁾

「其早キコト譬え(たと)フルニ物ナク、六輜ノ車輪一条ノ鉄路ニキシリ鳴動ノ響キ雷鳴ノ如ク途中ノ景色人物ハ

走馬燈ノ趣(おもむき)ニ似タリ」。

遣米使の一行に少し遅れて、開化期の日本人達数名が、このパナマ地峡鉄道を利用しているが、右の森田の記述は、彼等が抱いた印象を等しく物語っていると言えるだろう。

また、賄方として同行していた加藤素毛は、「二夜語」(ふたよかたり)を残しているが、パナマ地峡について次のような一節がある。⁽¹⁵⁾

「其頃遠境にての風説にハ、海路を一に通せしと申(し)触(れ)たるハ、ただ其議論の様となりしを伝聞へたるあやまり也」。

太平洋と大西洋を結ぶ運河をパナマ地峡に開削する可能性は早くから論議されていたが、遣米使の一行もサンフランシスコからの船中で聞かされたのであろう。フランス人技師レセップスによってスエズ運河が開通したのは一八六九年である。そして、パナマ運河建設権を獲得したレセップスが工事に着手したのは一八八一年である。途中で建設工事の中断もあったが、ともかくパナマ運河が完成したのは一九一四年である。遣米使の一行がパナマ地峡を通過してから、既に半世紀が経過していた。

ところで、遣米使節団の参加者数名が、それぞれ日記を書き残している。そして、大西洋岸の港町について、「アスシンワル」(村垣範正『航海日記』)、「アスシンワル」(森田岡太郎『亜行日記』)、「アスヘンワール」(益頭尚俊『亞行航海日記』)、「アスベンヤル」又は「アスヘンヤル」(村山伯元『奉使日録』)、「アスペンワル港」(名村元度『亜行日記』)、「アスペンワルト」(加藤素毛『二夜語』)、「アスペンオール」(野々村忠実『航海日録』)、「アスペンアール」(福島義言『花旗航海日誌』)と、全く各人各様に表記されている。外国語の素養がなかった彼等にとって、微妙に

異なった発音として聴きとれた英字は、Aspinwallと表記される。このアスピンウォールという地名は、パナマ横断鉄道会社の創立者Aspinwallにちなむものである。しかしながら、この地の主権を有していたコロンビア合衆国は、外国人に由来する地名を好まず、クリストバル・コロン（英語ではクリストファー・コロンブス）にちなんで「コロン」と命名し、現在に至っている。

二 福沢諭吉

ポーハタン号には、咸臨丸がサンフランシスコまで同行しているが、福沢諭吉も提督木村攝津守（軍艦奉行）の従者として乗船していた。

それから七年後の慶応三年（一八六七）一月、幕府が米国から購入した軍艦引取りの使節団に同行して、諭吉は再度渡米している。サンフランシスコに滞在したのち、「太平洋汽船会社の別の船に乗り換えてパナマに行って、蒸気車にのってあの地峡を踰（こ）えて、向こう側に出て」ニューヨークに向かったことが、『福翁自伝』に記されている。

その前年（慶応二年）に出版された『西洋事情』は、偽版が横行するほどの評判を得ており、福沢諭吉の名を有名にしている。この『西洋事情』では、米国、オランダ、英、仏、ポルトガル、プロシヤなど各国の地誌、歴史、政治、軍事が詳しく説明されているが、中南米諸国に関する記述は見当たらない。

この頃から諭吉は、海外事情あるいは世界地理について平易な啓蒙書を盛んに出版している。

二度目の米国から帰国した年（慶応三年）の十二月、諭吉は『西洋旅案内』を著している。ここでは、船賃の支払

方法、外貨の交換レートと交換方法など、西洋旅行に関する実用的な知識が説明されている。そして、「巻の下」にはサンフランシスコ、アカポルコ(アカプルコ)を経てパナマ地峡で蒸気車に乗り換えたのち、ニューヨークに至る航路が興味深く説明されているが、二度目の訪米時の体験に基づく記述である。

「又左手に西班牙領のキューバといへる島を見る。この島はよほど広し。物産は煙草、砂糖。世界に名高き名産なり」。二年後の明治二年(一八六九)に出版された『世界国尽(くにづくし)』には、「北米利加州」の後半部に「女喜志古(メキシコ)、そして「中央亜米利加」について簡単に説明している。更に、「『中央亜米利加』の東方に群がる島は、『西印度』とあり、「印度に所縁なき島を、西の印度と名けしは」と、その由来を説明している。

『世界国尽』の構成は上下二段にわけられているが、下段が本文となっており、やや小さな活字を使った上段で補足的に説明されている。

例えば、西印度諸島に関する個所の下段の本文では、「千島の数多き中、世界の耳に慣れし名は、拜地、邪麻伊嘉、久場、馬浜、時候は熱く冬知らず、土地の産物豊にして、衣食足らざるものはなし。砂糖、骨非、綿、煙草、拜地に多き芭蕉の実、久場に製する巻煙草、葉羽奈の銘の箱入は、世界無類の名品なり」とある。そして、その上段には、椰子の木の下を歩いている土民らしい数名の人物が描かれている「西インドの風景」及び、「芭蕉」と「ぱいなつぶる」の挿絵が描かれている。更に続けて、「久場は西印度諸島の中に最も大ひなり。その都を葉羽奈といふ。西班牙これを領す」と説明している。

鎖国期に刊行された地理書の漢文体に対して、『世界国尽』は七五調で書かれており極めて口調が良い。また、各国の主要産物を列挙するなど、実用的な知識を提供している。

三 メキシコ・ドル

安政元年（一八五四）に米・英・露・仏・蘭など五ヵ国と締結された和親条約に続いて、同五年には日米修好通商条約が締結された。安政六年（一八五九）の横浜開港とともに、来日した米、英、露、仏、蘭、プロシヤ各国の商人との交易が開始されている。幕末及び開化期の貿易決済に使用されていた通貨が、洋銀あるいはメキシコ・ドルと称されたメキシコ銀貨である。

十六世紀以降、スペイン人征服者達は、金・銀を追い求めながら次第に新大陸を侵食していった。そして、ヌエバ・エスパニアと称され、スペイン人の副王によって統治されていたメキシコは銀の産出地として知られていたが、新大陸において広く通用していたスペイン銀貨は、植民地時代のメキシコで大量に鑄造されていた。

一方、アジアにおいては、清朝政府は、一六九六年に広州を実質的に貿易港として使用することを英国に容認していたが、一七五七年には正式開港が認められている。これに伴い、フランス、デンマーク、スウェーデンなどの欧州各国も広州に進出して来たが、英国商人の勢力は強く、清国との貿易を独占していた。

十八世紀後半以降の中国貿易では、メキシコで鑄造されたスペイン銀貨そして、のちにはメキシコ銀貨が使用されていた。その理由は、メキシコ鑄造のスペイン銀貨の質量が安定しており、中国商人によって最も信頼される通貨であったからである。メキシコ銀貨（あるいはメキシコ鑄造のスペイン銀貨）は、番銀又は洋銀と称されていたが、やがてアジア全域で通用するようになった。メキシコ・ドルを駆逐しようとしたイギリス政府は、一八六六年に香港ドルを発行したが、メキシコ銀貨の信用はゆるぐことなく、英国の意図は挫折した。

日本貨幣史の開国期の項には、メキシコ・ドルに関する記述はあるものの、この銀貨自体がどのような貨幣であっ

たかの説明は少ないようである。

スペイン植民地時代のメキシコで鑄造されていた銀貨は銀の品位も高く、ハレアル貨の重量二七グラムが忠実に守られていた。このため、ヨーロッパ及びアジア各地の商人や一般民衆によって最も好まれる交易通貨となっていた。そして、このハレアルがメキシコ・ドルと称され、我国でも使用されるようになった。

レアルRealは、十一世紀から十九世紀に至るスペイン及び中南米各地で広く使用されていた通貨であるが、銀貨と白銅貨が流通していた。そして、ハレアルが一米ドルに換算されており、一時期にはアメリカ合衆国通貨ともなっていた。

メキシコが独立したのは一八二一年であるが、一八三三年にはREPUBLICA MEXICANA(メキシコ共和国)の刻印のあるハレアル通過が鑄造されている。このハレアル貨には、「前向きの鷲」(一八三三年以降の鑄造)と「横向きの鷲」(一八二四年以降の鑄造)の二種類がある。⁽¹⁶⁾このあとメキシコは、ペソ貨を発行している。我国において、一般に「メキシコ・ドル」という呼称が用いられているが、正式なメキシコ法貨としては、「ドル」貨は存在していない。

幕末期における日本の本位貨幣は小判に代表される金貨であり、補助貨幣として一分銀が使用されていた。ところが、開国にあたって米国は、金一に対して銀五の比価を我国に要求し、これに同意させているが、当時の実際の国際比価は金一に対して銀一五である。従って、メキシコ・ドルを日本に持ち込み、小判に交換して海外に持ち出すと、国際価格で三倍のドルを取得出来る計算になる。このため、大量の金が海外に流出したが、その対策として、銀の品位を落とした安政二朱銀を発行している。この二朱銀は、メキシコ・ドルの銀品位とほぼ同じであるが、重量はその

半分である。従って、メキシコ・ドルに代表される貿易銀一枚に対して、同種同類の原則に基づいて、安政二朱銀二枚と交換されることになった。

明治二年（一八六九）七月、在日各国公使館に対して、新貨幣の鑄造とその品質を告げる書状が送られているが、これには「一円ヲ以テメキシコ洋銀一枚ニ此比較シ起等スル所ノ者ナリ」という通告が添附されている。⁽¹⁷⁾

ところで、『横浜市史稿 産業編』（昭和七年初版 昭和六十一年復刻 臨川書房）には、横浜が開港された安政六年（一八五九）から明治元年（一八六八）迄の期間における「幕末渡来の欧米人」が記されている。同書の記述によれば、英人一九二人、米人五一人のほか、オランダ、フランス、プロシアなどのヨーロッパ人計五四人（ポルトガル人四人を含む）総計二九七人が来日しているが、スペイン人及び中南米諸国からの渡航者は見あたらない。

更に、「横浜開港直後の外国商事会社」（同じく一八五九—一八六八）が、前掲書に記されている。開港と同時に進出して来たジャーディン・マセソンJardin, Matheson & Co., デントDent & Co., などの「英商」四六社、同じ一八五九年に設立されたウォルシュ・ホールWalsh Hall & Co., など「米商」九社に加えて、オランダ六社、フランス六社、スイス四社、ポルトガル一社が続いている。合計七九社の外国商会のなかには、スペイン及び中南米諸国の企業は含まれていない。

第四章 明治期——新たな交流の始まり

一 マリア・ルース号事件

明治五年（一八七二）七月、暴風による損傷を修理するため、ペルー船マリア・ルース号が横浜に入港した。所轄官庁である神奈川県庁には二三一名の清国人が乗客として申告されていた。しかしながら、これらの乗客は、可成り悪い手段を使ってマカオで狩り集められた清国人労働者であった。

一八二二年に独立したペルーでは、植民地時代の繁栄は過ぎ去り、経済的混乱と停滞に見舞われていた。ところが、ペルー太平洋岸に大量に堆積されていたグワノ（鳥糞）が、一八四〇年頃から欧米諸国に輸出されるようになり、ペルー経済は活況を呈するようになった。その結果、鉄道の敷設工事がすすめられ、農業生産も拡大したため大量の労働力が必要とされたが、一八五四年に奴隷制度が廃止されていた。このため、新しい労働力として着目されたのが中国人労働者であるが、約七百人の中国人が最初の移住労働者としてペルーに到着したのは、一八四七年である。その後もひき続いて、マカオから大量の中国人労働者がペルーに運ばれていた。

苦力（クーリー）と呼ばれていた中国人労働者を多量に運んでいたペルー船は、通常はマカオからペルー最大の港カジャオへ直航していた。たまたま暴風に遭遇したマリア・ルース号は、止むなく横浜に入港した。この時、ペルー船内での苛酷な取扱いに耐え切れず、数名の中国人労働者が逃亡を図ったのが、この事件の発端である。

この「マリア・ルース号事件」は、開国したばかりで、欧米諸国との外交に対して極めて臆病であった明治政府が、中国人労働者を保護するためにペルー国籍船の船長を被告とした、我国最初の国際司法事件である。国際法や外交慣行にも不慣れであった明治政府にとっては、誠に厄介な問題である。更に、この事件の当事者であるマリア・ルース号のペレイラ船長が帰属するペルー国と当時の我が国との間には、外交関係が設立されていなかった。神奈川県庁がこの事件に対応していたが、何分にも国際司法事件に関する知識は乏しく、横浜在勤の各国領事（米、英、仏、ポルト

ガルなど十一カ国)を集めて協議していた。

外務省編集『日本外交文書第五卷 自明治五年一月 至同年十二月』には、この事件の関係文書が収録されている。先ず、「秘露国(ペルー——引用者注)風帆船『マリア・ルス』號二関スル件」によって、この事件の経緯を知ることが出来る。続いて、関連事項として「秘露国トノ修好通商条約締結二関スル件」が収められている。

『アメリカ彦蔵自伝 (2)』(注(9)参照)は、この事件について次のように言及しているが、浜田彦蔵は法廷通訳としてこの事件に関与していた。

「ペルーは日本と条約を結んでいないので、問題の訴訟事件(マリア・ルス号事件——引用者注)は日本の法廷に提起されねばならなかった。それは弁護士によって英語で行われることになっている。そこで大江県令は英語にあまり明るくなかったので私に同席してもらいたい。さすれば問題なく先方の言うことも理解できるから、というのである」。近代的な法廷運用にも不慣れであり、ましてや英語を用いて裁判が進行されるとなれば、明治政府の当事者にとっては誠に頭の痛い問題である。

逃亡を図った数名の中国人苦力(クーリー)は、近くに投錨していた英国軍艦に救いあげられたため、英国代理公使ワトソンによって、ペルー船マリア・ルース号の調査が日本政府に要請された。このため、時の外務卿副島種臣は、神奈川県令大江卓にこの事件の調査を命じた。

一方、ペルー人のペレイラ船長は、中国人苦力に対して契約不履行を提訴している。結局、原告側の要求は棄却され、ペレイラ船長はペルー船を放棄して明治五年十月に帰国した。中国人労働者全員が横浜で解放されているが、これによって事件が完全に解決したわけではない。

思いがけず横浜に入港したペルー船は、当時の日本にいくつかの波紋をもたらした。ペルー船長側のイギリス人弁護士は、当時の我国における娼妓、芸妓制度を指摘して、日本においても人身売買が行われていると主張した。このため、明治政府は娼妓や芸妓を束縛するような契約を廃止する命令を出している。更に、この事件を契機に、ペルーとの修好通商条約が締結されることになった。

二 ペルーとの「和親貿易仮条約」締結

帰国したペレイラ船長は、ペルー政府に対して日本における裁判の不当性を訴えた。このため、損害賠償と謝罪を日本政府に求めたペルーは、この事件を契機に日本との修好通商条約を締結しようとした。そして明治六年特命全権公使としてアウレリオ・ガルシア・イ・ガルシア海軍中佐が我国に派遣された。

アウレリオ・ガルシア公使の来日を伝える当時の外交文書には、「オーレリオ・デー・ワイ・ガルシア閣下」と表記されている。このペルー公使の名はアウレリオ Aurelio であり、父方及び母方の姓はともにガルシア Garcia である。スペイン語圏諸国では、一般には父方と母方の姓が並記される。ところが、この場合にはともに同姓の Garcia であるため、スペイン語の接続詞 y によって両姓が結ばれているが、この接続詞は「i」と発音される。

前出の『日本外交文書 第五巻』には、ペルー外務省からスペイン語原本とともに英訳が送られて来たことが注記されている。当時のわが外務省ではスペイン語の理解者がいないままに、英語訳文に頼ったものと思われる。スペイン語の接続詞 y を「イ」と片仮名表記せずに、英語読みに「ワイ」と表記しているのは、これも氏名の頭文字と理解したのだろう。

着任したばかりのガルシア公使を紹介するため、副島種臣外務卿との会見を求めた駐日米国公使デロングの書簡の訳文には、「秘魯国公使セノル・ガルシア」と記されている。スペイン語の素養のない翻訳官が、スペイン語の尊称 *Señor* (セニョール) の読み方に苦勞したことがうかがわれる。

「マリア・ルース」号の表記についても、当時の外交文書には「マリヤ、ルス」、「マリヤーシー」、「マリヤルーツ」、「マリヤルズ」などと書かれており、一貫していない。スペイン語圏諸国では、“*Maria Luz*” は極くありふれた船名であるが、当時の関係者達はどのように発音し表記すれば良いのか、多に困惑したと思われる。

我国政府に信任状を捧呈したガルシア公使は、条約締結の交渉にからめて、マリア・ルース号に関する領事裁判の最終的な解決を副島外務卿に要請している。しかしながら、明治六年八月、副島外務卿に宛てたガルシア公使の書簡によって、「将来条約改正ノ際迄ニ関係アル諸国ト協議スベキ」として、マリア・ルース号事件の最終的な解決も懸案事項とされることになった。

明治六年（一八七三）八月には、「秘露国トノ和親貿易航海仮条約」が東京において調印された。Preliminary Treaty と英語で表記されているこの条約は、「日、西、英ノ三ヶ国語ヲ以テ記載セラレ居ルモ各国語ノ文意ニ関シ議論生ズル場合アルハ英文ヲ原文トス」ることが特記されている。スペイン語で書かれた文書であれば、相互の理解齟齬をきたすことを恐れたのであろう。

この頃の日本・ペルー両国間の交渉に関して、「日秘条約締結ニ関シ支那移民処置問題判断ノ件」と題した明治六年八月八日付の外交文書がある（『日本外交文書 第六巻』）。これには、「マリア・ルーツの事は前代未聞」の事件であるが、今後再発することもあり得るので、「此節魯国皇帝の裁判」に委ねることとし、これによって「両国間の不

快の念は断絶」させたいことが記されている。ロシア皇帝アレキサンドリア二世の裁決によって、この懸案事項を最終的に解決しようというものである。

ところで、ほぼ同じ頃(明治六年六月以降)から、樺太において、ロシア兵士が現地在住の邦人に乱暴を働くという事件が相次いで発生している。『日本外交文書 第六卷』には、事項六「秘露国トノ修好通商条約締結ニ関スル件」に続く事項七には、「樺太問題ニ関スル件」が収録されているが、これらの二つの事件は、ほぼ同じ時期にあって、その解決がせまられていた外交問題であった。当時の日本は、樺太(サハリン)の領有を主張しており、この事件もまた明治政府にとっては頭の痛い問題であった。この問題解決のため、明治七年(一八七四)一月、榎本武揚は海軍中将に任じられ、同時に露国駐劄一等特命全權公使を命じられている。榎本公使が早急に手がけねばならない問題は、樺太問題の解決であり、また、マリヤ・ルース号に関して我が国に有利な裁決を、ロシア皇帝から手に入れることにあった。前者は、ロシアと我が国の利害が全く対立する事件である。そして後者は、ひとえにロシア皇帝の好意を期待しなければならぬ問題である。状況が全く相反する二つの問題の解決が、榎本公使に期待されていた。

明治八年八月、樺太全島をロシアに譲渡する代わりに、我が国は千島列島を領有することによって、樺太の帰属問題は解決することになった。

もう一つの懸案事項「マリヤ・ルース号事件」に関しても、榎本公使は、着任間もない明治八年一月から、当時の寺島外務卿との間に頻繁に電話及び文書を交わしている。また、ペテルスブルグにあって榎本は、「露国駐劄秘露国公使ラヴァレ」とも交渉を重ねていた。榎本から寺島外務卿に宛てられた書簡には、この在露ペルー国公使の名が「ラファレ」とも記されており、別の文書では「ジ、ア、ド、ラヴァレ」と記されている。ペルー国公使が榎本に宛

てた書簡には、J. A. de Lavalleと署名されているので、スペイン語読みでは「デ・ラバージェ」と表記するべきであろう。

樺太問題の解決によってロシア側の心証を良くした榎本は、明治八年（一八七五）六月、「『マリヤ、ルース』號事件二関スル日本政府ノ措置ハ正當ト露国皇帝裁決アリタル旨」を、寺島外務卿宛に發電している。

『日本外交文書 第八卷 自明治八年一月、至同年十二月』には、「秘露国風帆船『マリヤ・ルース』號二関スル件」の項があり、この懸案事項の解決に至る迄の榎本公使等の苦勞が、一一八頁にわたって記録されている。ここには、榎本武揚と日本国外務省との往復文書、駐露ペルー国公使との交渉に関する覚書などとともに、露国皇帝に対して充分なる謝意を述べるようにとの本国からの訓令が収められている。

我が国の体面を傷つけることなく国際司法事件の決着をみたことに、政府当局者が深く安堵した様子が、これらの文書からうかがうことが出来る。樺太問題とあわせて、明治政府が最初に直面した領事裁判事件がようやく解決されたことに対して、榎本公使の功績が高く評価されたことはいうまでもない。

三 メキシコ天文観測隊の来日

明治七年（一八七四）十二月、金星が太陽面を通過するにあたって、アメリカ、フランス、メキシコ及び日本の四カ国が、我国において共同観測を実施することになった。一七六九年以来ほぼ百年目の機会であるが、日本が初めて経験した国際観測である。

その年の十一月、メキシコ天文観測隊の五名が横浜に到着した。隊長はフランシスコ・ディアス・コバルピアスで

ある。帰国後の彼は『メキシコ天文観測隊の日本旅行』を出版しているが、ラテン・アメリカからの渡来者が最初に記した日本旅行記である⁽¹⁸⁾。

この旅行記には、当時の横浜及び東京の状況、そして金星観測の様子が詳細に記述されている。更に、「日本の生活と文化」、「日本の歴史」、「東京の庭園と寺院」など四章にわたって、日本の文化と歴史が紹介されている。

メキシコ観測隊には、海軍省水路寮から吉田中尉など三名が実習生として派遣されていた。これらの日本人青年が「天体観測の実習で示したあくなき学習態度には真に称賛に値するものがある(中略)。彼らの大変熱心でたゆまぬ献身に大いに心を動かされた」と、コバルピアスは記している。しかしながら、「彼らはスペイン語も英語もフランス語も解せず、私も日本語もわからず」、「極度の困難に直面することもあった」。そして、「普段は通訳に頼って意志の疎通をはかっていたが、通訳は数学に門外漢で、専門用語で説明してもほとんど通訳ができ」なかった。

一方、「ある日本の若者がフランス語の勉強を志、私の滞在中ずっと側に居て通訳をしていたが、帰国の日が近づくと、さらに勉強を続けるためメキシコまで同行させて欲しいと申し出てきた」(以上、註(18)の大垣・坂東訳による)。この時の青年が、屋須弘平と考えられている。弘化三年(一八四六)岩手県で生まれた屋須は、幼時にして蘭学を学び十五歳で江戸に出たのち、横浜でフランス人について医学と天文学を学んだと伝えられている。明治元年には一旦故郷に帰っているが、三年後に再び横浜に到りフランス語を学んでいる。

明治八年二月、帰国するコバルピアスに同行して屋須はメキシコに渡っている。そして、四年後の一八七八年(明治十一年)、コバルピアスはグワテマラ駐劄公使に任命されているが、屋須もこれに同行している。それから十一年後の明治二十二年、一時帰国していた屋須は、高橋是清に同行してペルーに渡っているが、これについては後述する。

のちに、グワテマラに永住する屋須弘平は、明治期にあってラテン・アメリカと深くかわりあった最初の日本人であるが、寺田和夫（東京大学教授・故人）「屋須弘平——グアテマラへの最古の日系民」に詳しく紹介されている。

四 中南米諸国との外交関係

安政元年（一八五四）三月に米国政府と締結された「日本国米利堅合衆国和親条約」をもって、近代日本の外交関係が開始された。続いてイギリス、ロシア、オランダ、フランスとの間にも和親条約及び修好通商条約が締結されている。こうして、明治二年（一八六九）までの十六年間で、欧米十五カ国との間に二十件の和親及び修好通商条約が締結されているが、明治四年にはハワイ及び清国との間にそれぞれ外交条約が調印されている。

そして、前述のように明治六年に「日本国秘魯国和親貿易航海仮条約」が締結された。このため、ペルーは第十八番目の条約調印相手国となり、開国以降の日本が締結した二十三番目の条約であるが、ラテン・アメリカ諸国を相手に最初に締結された条約である。

明治六年（一八六八）から同二十年（一八七八）迄の期間において、十七カ国の特命全権公使あるいは代理公使が任命または信任されているが、ペルーの場合は左の通りである。⁽²⁰⁾

ファン・フェデリコ・エルモレー（Dr. Juan Federico Elmore）

（1） 代理公使（兼清国）

任命 一八七四年（明治七年） 八月

信任 同年 十一月 「一八七六年（明治九年）引揚げ」

(2) 弁理公使(兼清国及びハワイ)

任命 一八七八年(明治十一年) 三月

信任 同年 七月

(3) 特命全権公使(兼米国、清国及びハワイ)

任命 一八八四年(明治十七年) 五月

信任 同年 十一月 (一八八六年(明治十九年) 四月引揚げ)

明治六年に來日したガルシア公使の後任といえるフェデリコ公使であるが、在任期間はしばしば中断されている。しかも、近隣国(といっても、当時の事情を考えれば遙か遠国であるが)の公使を兼任している。その後、明治四十一年までの期間に次の中南米諸国との間に外交関係が開かれている。

相手国	調印日	効力発生日	条約名(日本語正文)
メキシコ	明治二十二年一月三〇日	明治二十二年 六月 六日	日本国及墨西哥合衆国間修好通商条約
ブラジル	明治二十九年一月 五日	同 年十二月一八日	日本国白刺西爾亜合衆国修好通商条約
チリ	明治三〇年 九月二五日 三十二年一〇月 追加約款を調印	明治三十九年十一月 五日	日本国及智利共和国間修好通商航海条約

アルゼンチン	明治三二年 二月 三日	同上	日本国及亜爾然丁共和修好通商条約
コロンビア	明治四一年 五月二五日	同 年十二月十二日	日本・コロンビア共和国修好通商条約

その他の中南米諸国との条約締結は、いずれも大正期に入ってからとなる。

五 日墨修好通商条約

幕末期の日本が欧米諸国と締結したのは、いわゆる不平等条約である。このため、明治政府は治外法権の撤廃、関税自主権の回復など条約改正を強く求めていた。こうしたなかで、明治二十一年（一八八八）、ワシントンで調印された日墨修好通商条約は、我国最初の「平等条約」として注目されている。

ワシントン駐節の日本・メキシコ両国公使によって、既に明治十五年（一八八二）に非公式ながら国交開設の話し合いが開始されていた。しかし、翌十六年一月、臨時代理公使高平小五郎は、メキシコとの国交開設を希望するものの、欧米諸国との条約改正が達成され次第、改めて正式な交渉に入りたいと申し入れている。

その後中断されていた両国間の交渉は、明治二十年（一八八七）、駐日ベルギー公使ジョージ・ネイトによって再開されているが、来日前のネイト公使はメキシコに駐節していた。日本側からは、両国間の交渉の基盤として相互に最恵国特権を認め、治外法権は放棄されるべきことがメキシコ政府に通告されていた。

対米関係を重視していたメキシコは、日本との平等条約の締結によって米国の対日政策あるいは国益に影響を与えないのではないかと懸念していたが、結局、一八八九年六月、日墨両国によって批准書が交換された。⁽²¹⁾メキシコにとっ

ては、アジアの国と最初に締結した条約である。一方、日本にとっては、清国、朝鮮国、シヤムなど近隣諸国との間に締結された条約は別として、非アジア諸国との間で日本の主権が認められた最初の条約である。

明治二十三年(一八九〇)には、米国駐箚公使陸奥宗光がメキシコ駐箚公使を兼任するとともに、在サンフランシスコ珍田領事が調査のためメキシコに出張している。同じ年の横浜にはメキシコ領事館が開設され、その翌年に公使館に昇格している。

明治二十四年八月、在メキシコ日本領事館が設置され、領事代理藤田敏郎が着任した。これは、我国がラテン・アメリカに開設した最初の在外公館であるが、明治三十年(一八九七)には公使館に昇格している。

その他の中南米諸国における、我国公館の開設状況は次の通りである。

初代ブラジル駐箚公使珍田捨巳がリオ・デ・ジャネイロに着任したのは、明治三十年八月である。その後、ブラジルへの組織的移民が拡大するとともに、明治四十一年(一九〇八)七月にはサンパウロ総領事館が開設された。更に、在ブラジル公使館は、大正十二年(一九二三)に大使館に昇格している。

チリは、明治三十二年(一八九九)七月に東京に公使館を開設し、初代公使を派遣している。これに対し、日本政府も明治四十二年(一九〇九)二月にサンティアゴに公使館を開設し、初代公使を派遣した。

一方、在ブラジル公使がアルゼンチン駐箚を兼任し、また、在米日本国大使によってコロンビア駐箚公使が兼任されるという状態が永らく続いた。特にコロンビアの場合、ボゴタに公使館が設置されたのは、昭和八年(一九三三)である。

第五章 明治期海軍とラテン・アメリカ

一 南米で客死した海軍々人達

兵部省（のちの陸軍省及び海軍省）は、明治二年九月、築地に海軍操練所を創設したが、同年十一月に海軍兵学寮と改称している。兵学寮生徒は各藩の貢進生によって構成されていたが、翌年には海外留学生が派遣された。選抜されたのは、薩摩藩出身の前田十郎左衛門と徳島藩の伊月一郎である。明治期海軍最初の留学生二名は、英国ダートマスに二年間留学すべく、明治三年三月、英艦オーデシアス Audacious に乗り組んだ。

太平洋を横断した同艦は、パンクーパーに寄港したのち南下を続け、南米大陸の南端を回航した。同年十月、オーデシアス号はブラジル領バイアに停泊していたが、この時、前田は割腹自殺を遂げている。明治期以降、南米で客死した最初の邦人である。この事実は防衛研究所図書館蔵の『海軍兵学校沿革 第一巻』に記載されているが、自殺の原因については触れられていない。

前田とともに乗艦していた伊月一郎は、のちに在英大使館附武官などを歴任したのち、明治二十四年に四十歳で病死しているが海軍大佐に昇進していた。

ところで、明治初期の我国海軍の保有艦船は、幕藩時代に各藩が所有していた艦船によって構成されており、軍艦十四隻、運送船三隻、合計十七隻（二三、八三二トン）という貧弱な海軍力であった。そのなかには、一八六五年に英国で建造され熊本藩が所有していた「竜驤」（二五三〇トン）が含まれており「日進」（一八六九年オランダで建造）とともに、「上等艦」に格付けされる当時の主力艦である。⁽²²⁾

後述のように、わが海軍は明治十五年頃から近代的な軍艦を入手しているが、保有軍艦の拡充とともに、遠洋航海によって海軍生徒及び乗組員の訓練が実施されていた。先ず、明治八年には「筑波」がサンフランシスコに入港している。幕末の咸臨丸に続く我国海軍第二回のアメリカ訪問であるが、明治期海軍としては最初の遠洋航海である。

「筑波」は明治十一年には豪州へ回航しているが、当時の練習航海は太平洋を南下するコースが多かった。のちに述べるように、この「筑波」も南米へ航海している。

明治十五年(一八八二)十二月、軍艦「龍驤」は練習航海のため、品川沖を出帆した。寄港地はニュージーランドのウエリントンを経て、チリのバルパライソ、ペルーのカジャオそしてホノルルの四港が予定されていた。艦長伊東東祐亨大佐(のちに元帥)をはじめ総乗組員三七八名である。

航海の途中、火薬庫に積み込まれていた火薬が爆発する事故があったが、明治十六年四月、チリの要港バルパライソに入港した。日本の艦船が南米に寄港したのは、この時が最初である。

艦長ら士官は大統領に謁見するとともに、チリ海軍の軍艦を表敬訪問している。ところがこの時、乗組員の四等水兵猪股孝之進が重症の脚気のため死亡している。⁽²³⁾日本の軍艦が南米に回航したのはこの時が最初であるが、十三年前にブラジルで自殺した海軍生徒前田十郎左衛門について、南米における二人目の犠牲者を出すことになった。このあとカジャオ及びホノルルに寄港した「龍驤」は、この時の航海で、乗組員三七八名中六九名が脚気におかされ、二十三名が死亡した。⁽²⁴⁾その頃多発していた脚気は、明治期海軍にとって深刻な問題となっていた。

二 南米への遠洋航海

近代的な軍隊組織の創設を目指していた明治期陸海軍は、兵士のなかで多発する脚気患者の対応に苦慮していた。特に、生鮮食品が不足する遠洋航海が必要な海軍の場合、脚気問題は一層深刻である。

多数の脚気患者が発生した「龍驤」の悲劇を重視した海軍当局は、明治十六年、脚気病調査委員会を組織した。委員の一人である海軍々医大監（のちに海軍々医総監）高木兼寛は、脚気予防に糧食の改善が必要であることを主張していた。

翌十七年（一八八四）、「筑波」が遠洋航海に従事することになったが、高木は「龍驤」と同じ航路を辿るよう主張した。艦内の糧食を改善した「筑波」の結果を「龍驤」と比較するのが高木の狙いであるが、莫大な経費を必要とするため海軍当局は難色を示していた。

結局、高木軍医総監の主張が認められ、「筑波」もまたニュージーランドを経てチリへ向かった。チリではバルパライソ及びコキンボに寄港しているが、両港あわせて一ヵ月間碇泊している。「筑波」の乗組員三三三名のうち、遠洋航海中における脚気患者は十五名にとどまり、この病気による死者は発生していない。「筑波」がバルパライソに入港したのは明治十七年六月二十二日であるが、その九日前に帆柱から転落した一等水兵永井某が南米大陸の沖合で荒波に呑み込まれてしまった。

艦内における糧食改革に着手した海軍では、この頃から脚気患者が激減しているが、「龍驤」「筑波」両艦の南米への航海が重要なきっかけとなっている。一方、東京大学医学部及び陸軍軍医本部では脚気細菌説が受け入れられており、海軍軍医総監高木兼寛の主張と激しく対立していた。このため、陸軍における脚気患者の発生は、日露戦争に

至るまで減少することはなかった。日露戦争における陸軍の戦死者計四七、〇〇〇名に対し、脚気による死亡者は二七、八〇〇名を越えていた(以上、吉村昭『白い航跡 下巻』による)。

それから二十六年が経過した明治四十三年、アルゼンチン建国百年の祝典に参加すべく派遣された軍艦「生駒」は、希望峰の沖合をアルゼンチンに向かっていった。この時、艦首甲板で作業していた三等水兵水口勘吉が、大波にさらわれて行方不明となった。彼もまた、南米における明治海軍の犠牲者といえるだろう。

三 チリから購入した軍艦

明治期海軍の主力艦は、すべて海外から購入されていた。特に、英国のアームストロング社あるいはヴィッカース社への発注が多く、日本国内の造船所による主力艦の建造は大正期以降である。また、緊急を要する場合には、他国が発注していた軍艦を買受ける場合も少なくなかった。

明治七年(一八七四)四月、台湾征討事件が発生しており、清国との戦火も辞さないという事態に至っている。このため、軍艦二隻の緊急購入が必要とされた。その頃、ブラジルとチリが木造艦から甲鉄艦への改造を英国の造船所に発注していたので、この購入が計画された。しかしながら、日清間の和議条約が調印されたので、軍艦二隻の購入計画も中止されることになった。⁽²⁶⁾ 明治期の日本海軍は、南米諸国から四隻の軍艦を購入しているが、右の購入計画はその遠い伏線である。

明治十五年の第五回海軍拡張計画に基づいて、扶桑、金剛、比叡の三艦が英国に発注されているが、更に筑紫が購入された。これは、チリが英国に発注したのちキャンセルにした三隻のうちの一隻である。筑紫は明治十六年に横須

賀に到着しているが、明治海軍が手に入れた最初の近代艦である。ところで、この時チリ政府がキャンセルした残りの二隻は清国海軍に購入され、「超勇」及び「揚威」となっている。⁽²⁷⁾北洋艦隊に購入された二隻の軍艦は、十一年後の日清戦争においていずれも日本海軍によって沈められている。

日清戦争開戦後、日本海軍はチリからエスメラルダ号を購入した。一八七九年から八三年にかけて、ペルー及びボリビアを相手に、チリはいわゆる「太平洋戦争」を戦っている。この時のエスメラルダ号艦長プラット大佐の英雄的な行動及び、沈没した艦の運命は、チリ国民によって永く記憶されることになった。

そして、その栄誉を記念して新たにエスメラルダ号が建造されたが、清国との戦争で一隻でも多い軍艦を必要としていた我国は、エクワドル共和国コルドーロ大統領の仲介により海軍の関係者によって回航されて来たエスメラルダ号は、明治二十八年（一九八五）二月に横須賀に到着しているが、「和泉」と命名された。

日清戦争には間に合わなかった巡洋艦和泉（二六七トン、一八八三年進水）は、日露戦争では第三艦隊第六戦隊に配属されている。この艦の購入の経緯は、ラテン・アメリカ協会前田正裕理事長が海行正史の筆名で書かれた「チリから来た軍艦『和泉』」に詳しく記されている。⁽²⁸⁾この稿のこれまでの記述との重複を避けて整理すると、次のような事情である。

清国との緊張状態を背景に、日本海軍の増強が急を要していたことは前述の通りである。しかしながら、ヨーロッパ列強も自国の軍備拡張に追われており、保有軍艦を売却する余裕はなかった。一方、ブラジル、アルゼンチン、チリにおいて売却可能な軍艦があるとの情報を得た日本政府は、これら南米諸国に対して軍艦購入の交渉を開始しようとした。清国と戦争状態に入っていた明治二十七年（一八九四）八月、わが政府は在ワシントン日本公使館宛に、

チリ軍艦プラット号購入交渉に関する訓令を発している。しかしながら、プラット号は一八九〇年に進水した新鋭戦艦であり、チリ政府は売却に応じなかった。

同時に、アルゼンチンとの交渉も開始され、価格の同意に達したものの同国上院の承認が得られなかった。また、ブラジルからも軍艦購入の可能性があると思われたが、具体的な交渉に至っていない。

チリ政府とは引き続き交渉が継続され、難航の末に前述のようにエスメラルダ号の購入に漕ぎつけることが出来た。しかしながら、チリ政府は日本との直接取引を拒否し、中南米のいずれかの第三国を経由する引渡し方法を要求した。結局、エクワドルがエスメラルダ号の引渡しに介入することに同意した。

ところが、こうした変則的な引渡し形態に対して、エクワドルの新聞が非難キャンペーンを展開したのをきっかけに同国の反政府勢力を刺激し、エクワドルは内乱状態に入ってしまった。エクワドルを巻き添えにしたエスメラルダ号が「和泉」と命名されたのは、横須賀入港の直前である。

四 アルゼンチンから購入した軍艦

日露戦争開戦の前年、日本はアルゼンチンから軍艦一隻を購入している。ラテン・アメリカ協会前田正裕理事長が書かれた「アルゼンチンから購入した軍艦『春日』と『日進』」⁽²⁹⁾には、この経緯が詳細に記されているので以下の稿では参考にさせていただいた。

明治三十五年(一九〇二)五月、チリとアルゼンチン間の国境問題が合意され、建艦競争休止に関する協定が成立した。これによって、両国は欧州で建造中の軍艦を売却することになった。こうして、チリは、英国で建造中の軍艦

二隻（各々排水量一一、八〇〇トン）を売却するとの意向を我国に打診した。折柄、日露関係は切迫しており、足許を見たチリは売却価格を釣りあげて来た。当時の日本の財力では購入し得ないほどの高額であるため、交渉は中断されることになった。一方、ロシアがこの二隻の軍艦を購入する動きを見せたため、わが同盟国のイギリスが両艦を購入したので最悪の事態を避けることが出来た。

一方、アルゼンチンがイタリアに発注していた装甲巡洋艦二隻（各七七〇トン）を購入しないかと、英国政府が我国に打診してきた。アルゼンチンの国民的英雄の名にちなんで、それぞれ「リバダビア」と「モレノ」と命名されていた二隻の軍艦は、明治三十六年（一九〇三）にはほとんど完成していた。

その年の十二月二十日、在ブラジル代理公使でありアルゼンチン駐節を兼務していた堀口九萬一宛に小村寿太郎外相から暗号電報が届いた。前記の軍艦二隻をアルゼンチンから購入せよとの訓令である。ロシアもまたこの二隻の軍艦に食指を動かしていたので、直ちにアルゼンチンに赴いた堀口公使は、アルゼンチン大統領及び海軍大臣との交渉ののち、軍艦売買の合意に達することが出来た。代金は即金で支払われ、同三十六年十二月三十日にはロンドンにおいて林董（ただす）公使と在英アルゼンチン公使の間で売買契約が調印された。そしてその翌日には、両艦は「日進」及び「春日」と命名され、日本艦籍に編入された。誠に迅速な処置であるが、それほど日露の関係が切迫していたのである。

イタリアから回航された二隻の巡洋艦が横須賀に到着したのは明治三十七年二月十六日であるが、対露宣戦布告の六日後である。二月十九日には、両艦の歓迎大会が日々谷公園で開催されたが、いつしか緒戦の勝利を祝う戦勝祝賀会に切り換えられ、熱狂した雰囲気包まれていた。

両艦の建造に立合っていたアルゼンチン海軍のマヌエル・ドメック・ガルシア海軍大佐が、両艦回航のため来日していた。その後、ガルシア大佐は観戦武官として「三笠」に同乗している。その時の見聞に基づいて、「一九〇四年の日露戦争」を刊行しているが、のちに海軍大臣に就任している。また、アルゼンチン・日本協会会長を務めるほどの親日家でもあった(以上、前田氏の前掲論稿による)。

その後の「春日」は、大正九年(一九二〇)メーン州百年祭に参加のため訪米しているが、その六年前に完成したパナマ運河を通過している。我国の軍艦として最初のパナマ運河通過である。アメリカ合衆国東海岸各地に寄港したのち、ハバナを経由して再びパナマ運河を通過し、サンフランシスコ、ハワイを経て帰国した。

第六章 ラテン・アメリカに渡った明治期の人びと

一 旅芸人達

慶応二年(一八六六)四月、幕府は「海外渡航の差許し」を布告しているが、幕末から明治初期にかけて早い時期に海外に出かけていった民間人のなかに、曲芸師などの旅芸人がある。安岡章太郎『大世紀末サーカス』(朝日新聞社一九八四年)は、幕末の頃海外に出かけていった旅芸人達の姿を追っているが、富岡謙二『異国通路 旅芸人始末書』(中公文庫)の記述も参考に要約すれば、以下の通りである。

慶応二年、足芸人浜碇定吉の一行に、独楽(こま)廻しの松井菊二郎一家、更に手品と綱渡りの隅田川浪五郎一家を加えた総勢十八人が、幕府の許可を得て渡航している。一行には、芸名を岩吉とする高野広八が参加していたが、

広八が記した「日記帖」を安岡章太郎が入手したものである。広八の記録によると、一行は慶応二年十月末に横浜を出港し、アメリカを経てヨーロッパ各地を巡業ののち、明治二年二月に帰国している。

サンフランシスコを出発した一行が、二週間かけてパナマに到着したのは慶応三年二月である。広八の日記には、パナマを「はんのま」と表記されているが、「くろんぼうのすむ処」と記している。安岡氏の著書からそのまま再録させていただければ、パナマに関する広八の記述は次の通りである。

「あめりかと申す国は、かたち福べ（瓢）なりの国なり。大きなほうが北あめりか、又ちいさき方が南あめりかなり。北あめりかハ皆ひらけて白き異人なり。南あめりかハまだひらけずして、半分くろんぼう半ぶん白き異人ときくなり。右、福べなりの中のくびれめのはそき処、これをくろしん国と申すなり。道のり六十里ほどの処を上き（蒸気）車と申すくるま二のり、三時（間）にてまいる」。

「くろしん国」とは、地峡横断を意味する Crossing である。現在のコロンビア、ベネズエラ及びエクワドルの三カ国が独立して大コロンビア共和国と宣言したは、一八一九年である。そして、二年後の一八二二年、スペインから独立したパナマも大コロンビア共和国に編入され、一つの州即ち地峡州となった。「くろしん国」とは、地峡州を意味しているが、一八六七年当時のパナマはコロンビア合衆国の一部である。

旅芸人の一向もパナマ横断鉄道を利用して大西洋岸に出ている。更に、ニューヨークへ向かう汽船で西インド諸島の沖合いをと追っているが、広八は次のように記している。

「今日も島見いへ（える。この島の人ハくろんぼう、鬼のごとし。にくじき（肉食）、また友ぐいも致す事と聞く也（中略）。この国ハいんでいと申し、ようやく百五十里程の嶋と聞くなり」。カリブ海地域の先住民であるカリブ

族は食人族であるとの伝説が伝わっている。そうした話を、広八は同行のアメリカ人バンクスなどから聞かされたのだろうか。

丁度同じ時期に、鉄割(かなわり)福松の一座十三人もサンフランシスコで興行しており、広八らと同じ船でサンフランシスコを出発している。そして、その半年後にはミカド曲芸団と、大龍一座二十四人がサンフランシスコに来ており、更にそれから三ヵ月後には早竹虎吉一座三十人も同地に乗りこんでいる。一座はいずれも、幕府が出品したパリ万国博覧会への参加を最終目的にしていた。彼等もまた、パナマ地峡を横断して大西洋岸に出たものと思われる。

同じく慶応二年、イギリス人興行師に買われた曲芸師薩摩一座が長崎を出発して英国に向かっている。そのあと一座はニューヨークに回り、更に南下して明治六年にはブエノスアイレスに到っている。この地の有名なコロン劇場に出演しており、その時の記録が、同劇場の「地下に在る演劇博物館に錦絵の資料と共に残っている」と、富岡謙二『異国遍路 旅芸人始末記』に記されている。富岡は大阪商船に在籍し、ブエノスアイレスに駐在していたので、右の記述には信憑性がある。更に同書には、足芸師の美津田滝二郎が、南米及び西インド諸島各地を巡業していたことが記されている。南米の巡業で「小金を握った」美津田は、「明治二十年代も終わりのころには、ロンドンの市内に安住して余生を楽しむ結構な身分になって」いたと、富岡は記している。

『日墨交流史』には、榎本武揚の甥龍吉の一八九二年(明治二十五年)六月二十一日付けの書簡の引用がある。⁽³⁰⁾それによれば、ソノラ州々都エルモシージョに、「日本人難波市ト云ヘル者尋ネ来ル(中略)。千八百六十九年、市八歳ノ時、日耳曼人某^{ゲルマン}三雇ハレ、同行二十八人ニテ横浜ヲ去リ、桑港ニ到リ、夫ヨリ南米各国、キュバ島ヲ遍歴シ、輕業・手品ヲ演ジ、千八百七十四年、速綱由松、安、市三人ハ墨国ニ入ル」。そして、一八九二年当時ノ「難波市」は園丁

として「一ヵ月二十弗ノ給料ヲ受ケ居リ（中略）、現名ハアントニオト云ヘリ。能ク西語（スペインシゴ）ニ通ジ少シク日本語ヲ解セリ」とある。

一方、明治二十四年（一八九二）十月、キューバ滞在中の南方熊楠は曲馬師川村駒治郎と会っており、同年十月二十七日の日記に次のように記している。⁽³¹⁾

「朝川村駒次郎氏来訪、人物至て美なる人也、弟二人（一は十一、一は七才）つれて来り有る由。一昨年九月桑港よりテキサスを経てメキシコに入り、それよりキューバに來り、ハイチ、ジャマイカ、ポートリコよりヴェネズエラに往（後略）」。

熊楠は、京極駒治の芸名を名乗るこの曲馬師とその後の一週間を毎日のように会っていることが日記に記されている。また、「河（川）村氏当地近傍のいなかえ興行に赴く」と記されているが、川村らはハバナ近郊にも巡業していたのだろう。

川村駒次郎は米国及びカリブ海地域を興行する「前には天津よりカルカッタ迄行し由」と熊楠の日記に記されているが、幕末以後明治初期の旅芸人達はかなり広い世界にわたって巡業していたようである。キューバ滞在時の熊楠については、改めて触れることにする。

二 海外移民の開始

外務省領住移住武『わが国民の海外発展―移住百年の歩み（本編）』（一九七二年）には、「近代移民一〇〇年間の消長」として次の七つの時期を掲げている。

- 一 黎明期 明治元年(一八六八)——十七年(一八八四)
- 二 上昇期 明治十八年(一八八五)——三十七年(一九〇四)
- 三 低迷期 明治三十八年(一九〇五)——四十四年(一九一二)
- 四 高潮期 大正元年(一九一二)——昭和十五年(一九四〇)
- 五 中断期 昭和十六年(一九四二)——三十五年(一九五〇)
- 六 再興期 昭和二十六年(一九五一)——三十七年(一九六二)
- 七 低迷期 昭和三十八年(一九六三)以降

右の時代区分で明治期に該当する各時期について、前掲書では次のように説明している。

黎明期においては、少人数のハワイ及びアメリカ合衆国への移民が実施されているが、当時の外務省は移住に対して否定的な態度をとっていた。

上昇期もひきつづいて、主たる移住先はハワイ及びアメリカ本土である。明治二十二年には海外移住者が急増しているが、移住先は、ハワイ二二、九七三人、米国三、一四〇人、カナダ一、七二六人、ペルー七九〇人となっている。全体の年間総数は三一、三五四人に達しており、明治期における一つのピークを形成している。次に、明治三十九年に第二回目のピークを迎えることになるが、この年もハワイの二五、七五二人を筆頭に、メキシコ五、〇六八人、ペルー一、二五七人が主要移住先となっている。地域別の合計人数は、北米二九、五七九人、中南米六、三二五人、東南アジア二二〇人、年間総人数は三六、一二四人である。ちなみに、移住先全体のなかで中南米地域が占める比率は、

十七・五パーセントに達している。

大正期に入って移民の高潮期を迎えると、ブラジル移民の最盛期となるが、これについては稿を改めることにする。

三 「南米『ガテマラ』へ本邦人出稼一件」

明治期におけるメキシコ、ペルーそしてブラジルへの移民は良く知られているが、それより早く明治二十六年（一八九三）に七十五人（二説には百人）ほどの日本人が「出稼ぎ人」としてグワテマラへ入国した事実は、余り知られていない。いずれもハワイからの転航者であるが、『日本外交文書 第二十六巻』に六十頁にわたって「南米『ガテマラ』国へ本邦人出稼一件」関係文書が収められている。

まず、明治二十六年八月五日付をもって、ホノルル在勤藤井総領事より林外務次官宛に、「布哇在住本邦出人」合計七十五名が、米国人の斡旋によりグワテマラへ送られたことが報告されている。そして、日本とグワテマラの間には条約も締結されておらず、「後日奈何（いか）ナル危難ニ遭遇スルヤモ知レザレバ」と懸念している。

一方、同年九月十九日には外務次官林董（ただす）から東京、大阪、京都府など十三府県の知事及び北海道長官に対して、「『ガテマラ』国出稼取締ルベキ旨通知ノ件」が通達されている。ハワイからグワテマラへの「六十余名ノ渡航者」をハワイ現地の新聞は大きく報道していることを指摘した上で、「グアテマラ国ノ氣候不良ニシテ衛生ニ害アルノミナラズ人文未開ニ属スルガ故本邦人ノ渡航ヲ危険ナリ」と伝えている。更に、グワテマラ移住を斡旋したアメリカ人は、タヒチ島の「土民四百人ヲ誘拐シテ奴隷同様ニ売渡シ」ており、札つきの人物であると指摘している。従って、「此際同国へ出稼ノ義ハ可成差止候様致度候」と通達している。

十月二十六日には、在メキシコ藤田領事代理より陸奥外務大臣宛に「『ガテマラ』国出稼本邦人ニ関シ報告ノ件」として、「流浪日本人来墨ノ件並ニ中南米出稼人ニ関スル建議」が報告されている。

熊本県出身の「第十二回布哇出稼人」大塚米作が、グワテマラへ転航したものの「一日ニ食ノ量ニモ不足スル有様」である。八人の仲間とともにグワテマラ国サン・フランシスコのコーヒー農場を脱走し、九十日間を歩き続けた。結局、大塚ひとりがメキシコ市にたどりつき、なんとか日本領事館を捜し出した経緯が記されている。スペイン語も解せず、「半バ飢餓ニ瀕シ跣足露宿シ」て、メキシコ市に到着し得たのは「真ニ饒倖トモ不思議トモ」言うべきであると、藤田領事代理は感嘆している。

状況を詳細に報告したのち、「御訓令ヲ在布哇(ハワイ)並ニ桑港(サンフランシスコ)帝国領事館ニ発セラレグワテマラ国ハ勿論中南米並ニ墨国(日本人ノ計画ニ係ル購地植民ハ此限外トス)ヘノ無謀渡航者ヲ一切禁止相成候様」建議している。そして、グワテマラ在住の「百名前後ノ本邦人保護」を、同国駐在の米国又は英国公使・領事に依頼したい旨報告している。

同年十二月には、現地調査のためサンフランシスコ在勤珍田領事にグワテマラ国出張を命じたことが、米国駐節建野公使から陸奥外務大臣に報告されている。更に、建野公使は駐米グワテマラ公使アントニオ・ラーソ・アリアーガに対して邦人の保護を要請している。これに対して、グワテマラ本国の外務大臣に事実関係の調査を依頼し、苦情申し立て通りであれば(if the complaints are proved)、日本人労働者保護のためグワテマラ政府は可能な限り善処するという、一八九三年十二月二十七日付のアリアーガ公使が署名した簡潔な書簡をもって、本件の結末となっている。

グワテマラへ移住した邦人約百名の「虐待」事件に関する報告はこれまでほとんどとりあげられてないが、日本人

ラテン・アメリカ移住史における苦難の第一頁である。

四 榎本メキシコ殖民

駐露公使榎本武揚がマリヤ・ルース号事件の最終的な解決に尽力したことは既に第四章で触れているが、幕末期にあっては箱館戦争の総指揮官であった。この時、フランス軍事顧問団の十名が幕府軍に味方しているが、砲術指導を担当していたジュール・ブルユネ大尉もその一人である。その四年前の一八六四年、士官学校を出たばかりのプリユネは、メキシコに従軍していた。そして、フランス軍隊の敗退とともに本国に帰国しているが、今度は日本に派遣されることになった。

のちの榎本武揚がメキシコに関心を抱くようになったのは、箱館戦争の時にプリユネ大尉からメキシコの話聞いた記憶によるものであるとの推測は、それほどのはずれていないかも知れない。いずれにせよ、勝ち目があるとも思われない榎本軍に参加してくれた異国の若い将校に対して、榎本は充分に感謝していただろう。そして、プリユネから聞かされたメキシコ従軍談が榎本武揚の記憶に残り、彼がメキシコに関心を抱く伏線となったと考えられないこともないだろう。

かつて徳川幕府の崩壊に直面した榎本武揚は、旧幕臣を北海道に移住させて蝦夷共和国を建設しようと真剣に考えたことがある。近代日本の興隆期にあって、新天地の開拓と殖民の必要性を榎本が真剣に考えるようになって当然であろう。外務大臣に就任した榎本は、甥の榎本龍吉、農学者高野周省など四名を、農業移住地調査のためメキシコに派遣している。また、在メキシコ藤田領事代理も、現地の農業事情に関する報告書を榎本外務大臣に提出している

が、こうした経緯によって、榎本は農業殖民にはメキシコが最適であると考えてようになっていた。

榎本が外務大臣に就任した明治二十四年には、横浜にメキシコ領事館が設置された。榎本は、メキシコ領事マウリシオ・ウオルハイムに農業移住地の斡旋を依頼しているが、同時に藤田領事代理を経由して、メキシコ政府に対しても殖民候補地の紹介を要請している。

明治二十五年八月、松方内閣の総辞職とともに、榎本も外務大臣を辞し、枢密院顧問官に就任しているが、これまでと違ってそれほど多忙の日々を送ることもなかった。そこで、民間人としてメキシコ移民計画を積極的に推進するため、明治二十六年（一八九三）榎本は殖民協会を設立するとともに、自ら会長に就任した。そして、評議員には、田口卯吉、杉浦重剛、小村寿太郎、近衛篤磨、星亨、三宅雪嶺、金子堅太郎など、当時の言論界、政界、官界を網羅した有名人士が顔を揃えており、創立当時の会員数は、四一九名といわれている。月刊「殖民協会報告」が発刊され、海外移民に関する情報が提供されていた。

殖民地（農業移住地）としては、当初からメキシコが重点に考えられていた。現地調査のため、同協会評議員の根本正が、早速メキシコに派遣されたが、彼の報告はきわめて楽観的な内容であった。次いで、農業専門家である橋口文蔵も、候補地選定のためメキシコに派遣されている。

殖民協民が設置されたものの、実際に農業移住地を建設するにはまだほど遠かった。現地からの確な情報が伝わって来なかったことにも、もどかしさを感じられた。こうして、メキシコ移住を早急に実現するための資金調達を目的として、明治二十八年には榎本は、資本金五万円をもって墨国移住組合を設立している。勿論、榎本が最大の出資者であった。

その後、メキシコ政府から農業移住地を購入したため、明治三十年（一八九七）二月には、墨国移住組合の資本金を二〇万円に増資するとともに、日墨拓殖会社に改組している。榎本は、資本金総額の四分の一を引受けているが、約半数の株式が未引受けのままであった。

こうして、資金も十分に調達されず、準備も不十分なままに先を急ぐかのように一ヵ月後には、三五名の若者達がメキシコに向けて出発している。これが、最初にして最後となった「榎本植民団」の門出であった。

ペルーへの最初の契約移民七九〇名が横浜を出発したのが明治三十二年（一八九九年）であり、ブラジルへの組織的な移民が開始されたのが明治四十一年（一九〇八）である。そして、この「榎本植民団」は、ラテン・アメリカ地域への我が国最初の移民団である。

グワテマラとの国境に近いチアパス州南部に移住した榎本植民団の苦労とその後の経緯については、『日墨交渉史』（駐（30）を参照）「第二部 移民史」の記述が興味深い。この『日墨交渉史』は、一二〇〇頁に及ぶ大冊であるが、いわゆる「榎本植民地」が辿った悲惨な歴史についても詳細に描き出している。

榎本植民地といわれた農業移住地の開拓は、実質的に三ヵ月間であえなく挫折している。短期間のうちに計画が瓦解してしまったのは、事前の現地調査が不充分であったこと、事業資金が不足していたことなど、いくつかの原因を挙げることが出来るだろう。そして、移住者達が栽培しようとしたコーヒーについて、彼等自身が十分な知識を持ち合わせていなかったことも、失敗の原因といえるだろう。

榎本植民地の崩壊後も、岩手県出身の照井亮次郎ら六名は、明治三十三年に現地において「三奥組合」を結成しており、これが発展的に解消して明治三十七年（一九〇四）には、日墨協働会社が設立されている。我が国最初の農業

移住が失敗したのちも、榎本の開拓者精神がこの日墨協働組合に引き継がれたという記述を眼にすることがあるが、それは誤りであろう。

前出の照井亮次郎は、メキシコに永住することになり、昭和五年(一九三〇)に五六歳の生涯をオアハカ州で終えている。後年の彼は、「榎本殖民地」について厳しい批判を書き残している。

照井自身の言葉によれば、この農業開拓が失敗した最大の原因は、「榎本子爵等の殖民に対する赤誠と忍耐とを欠ける」ことによるものである。そして、榎本が「五稜郭当時の至誠を以て自ら殖民地に來りて采配を採らば」多くの人々の協力も得られたことであろうと記している。更に、「殖民事業」を単なる「營利事業」としてとらえてはならないとし、「資本の多少を以て事業の大小輕重を比較するを止めよ」と書き残している。そして、「殖民の如きは資本以外、事業以外に大なる所以のものであるを知らざるの人々は共に殖民を談するに足らず。(榎本)子爵の茲に思ひ至らざりしは吾人の痛惜に堪えざる処に御座候」と結んでいる(前出『日墨交渉史』による)。

現地で辛酸を嘗めつくした照井にしてみれば、榎本子爵などは、現場の苦勞も知らず机上の計画をひねくりまわしているに過ぎないということなのだろう。

加茂儀一『榎本武揚』(中公文庫)は、榎本の伝記として高く評価されている。しかしながら、榎本とメキシコ移民との関係については極く簡単にしか触れられていないが、「照井こそ榎本の殖民的精神を誠実にそして積極的に実行したものといつてよい」という記述がある。照井亮次郎本人が、あれほど厳しく榎本子爵を批判していることを考え合わせれば、加茂氏の指摘は、全く見当違いといわざるを得ないだろう。

農業移住の失敗にもかかわらず、榎本の開拓精神はメキシコの大地に伝えられているなど、いささか無責任な記述

を眼にすることがある。かつて、北海道の大地に理想の共和国を建設しようとした榎本武揚に、ある種のロマンティズムを感じるのと同じ同情的気分によるものであろう。榎本がメキシコに関心を抱いたのは、彼自身が描いた国家百年の計によるものかあるいは、ロマンを夢見ていたのか、または、それらが混ざりあった感情であったのかも知れない。いずれにせよ、その夢が崩れ去ったのは、榎本自身の責任である。榎本武揚については、このあと更に触れることになる。

五 ペルーへの移民

ペルー在住の日系人は、南米大陸においてはブラジルに次いで多く、一九九三年現在で五二、三〇〇名と報告されている⁽³²⁾。

明治三十一年、移民幹旋業森岡真の代理人田中貞吉がペルーに入学している。同国が邦人の移住先として有望であると判断した田中は、移住者の募集を外務省に申請した。このため、わが外務省はペルー駐劄公使を兼任していた在メキシコ室田公使に現地調査を要請した結果、契約移住者の選出が決定された。一方、ペルー側は、明治三十一年（一八九八）九月十九日に日本人契約労働者の渡航を許可する大統領令を公布している。

こうして、第一回契約移民七九〇名を乗せた日本郵船佐倉丸が一カ月の航海のちにカジャオ港に到着したのは、明治三十二年四月三日である。日本人労働者の契約条件は、砂糖きび農場あるいは製糖工場における四年間の契約労働であった。渡航費は雇主負担であるが、一日十時間労働で一カ月の給料は当時の邦価で約二十五円である。しかしながら、異国での苛酷な労働に堪え切れず、脱出する日本人労働者が相次いでいた。

ところで、第一回ペルー移民の出身地をみると、最も多いのが新潟県の三七二名で全体の四七・一パーセントを占めていた。ついで山口県一八七人、広島県一七六人、岡山県五〇人、東京府四人、茨城県一名であり、全員が男子である。

第一回移民の契約期間が満了した明治三十六年(一九〇三)に、第二回移民九八三人がカジャオ港に到着した。今回は妻帯者が比較的多いこともあって、現地農園における定着率は良好であった。更に三年後の明治三十九年には第三回移民七七四人が送り出されており、この結果、明治四十四年迄のペルー移民の合計は、八、三九二名に達している。⁽³³⁾大正期および昭和期に入っても、日本人のペルー移民は継続するが、これについては別項で触れたい。

六 榎本殖民以後のメキシコ移民

榎本殖民から四年後の明治三十四年(一九〇一)十一月、熊本移民合資会社による第一回契約移民八十二名がメキシコに到着した。その後、熊本移民会社は明治四十年(一九〇七)十二月に至るまで前後十二回にわたって合計一二四二人の移民をメキシコに送り出している。一方、東洋移民合資会社は明治三十七年(一九〇四)、カリフォルニア半島サンタ・ロサリアにあるボレオ銅山に五〇七人の鉱夫を送っているが、同社が取扱った最初のメキシコ移民である。その条件は渡航費前貸し、三年間の契約となっていた。東洋移民会社は、明治四十年十月まで十二回にわたって三〇四八人の移民を送り出している。更に、大陸移民会社が明治三十四年からメキシコ移民を取扱っており、同四十年までに十一回にわたって四四一六人の移民を送り出した。こうして、明治三十四年から四十年にかけて、前記の三社によって合計八七〇六人の日本人移民がメキシコに送り出されている。これらの移民は、エスペランサやフェンテ

の炭坑、ボレオ銅山、あるいはセントラル鉄道の建設のほか、コーヒー、麻、砂糖きび農場の労働者として働いていた。

明治四十一年（一九〇八）二月の在メキシコ日本公使の報告によれば、契約半ばで逃亡した移民が五、〇〇〇人以上にのぼっており、その大部分が米国へ転航していた。その原因は、移民会社が必要以上に多数の移民を送り出したことにあるが、最初から米国への転航を意図していた移住者も少なくなかったと言われている。

明治四十年三月、米国政府はカナダ、ハワイ及びメキシコからの転航禁止令を公布しており、日本政府に対してメキシコ移民の取締り強化を要請した。このため、同年九月、我国外務省は定着率が極めて低い鉄道工夫のメキシコ渡航を禁止しており、炭坑夫の渡航についても移民取扱会社が提出する許可申請を厳重に審査し、必要人員の移民のみを許可する方針をとった。このため、メキシコへの移民数は明治四十年の三八二二人を頂点にして、減少していった。

明治三十年に始まって明治期が終るまでにメキシコに渡航した日本人移民の累計は、一〇、九九三人である。特に、明治三十七年から四十年にかけて移住者が集中しており、この四年間で一〇、四九七名の日本人がメキシコへ送出されている。

七 ブラジルへの移民

明治四十一年（一九〇八）六月、最初の日本人移民を乗せた笠戸丸がサントス港に到着した。皇国殖民会社によって募集された一五八家族、七八一名の農業移民であるが、この辺の事情については、「第十一章 東洋汽船——中南

米航路の開設」で触れることにする。

この時から第二次世界対戦前の昭和十六年までにブラジルに渡った日本人移民総数は、一八万六二七二人であるが、明治期(四一—四三年)における日本人移民の累計は一、七一四名にすぎず、明治四十四年はゼロである。ブラジル移民が本格化するのは、昭和期に入ってからである。

八 その他中南米諸国への移民

一九九三年現在における在アルゼンチン日系人の総数は一七、八〇〇名であり、南米第三位の日系人々口である⁽³⁴⁾。しかしながら、ブラジルからアルゼンチンへの転住者をもって、同国への最初の日本人移民とされている。ちなみに、前出の『沖縄県史 第七巻』によれば、明治三十九年に水野 龍がプエノスアイレスを訪れた時、同地に在留する日本人十四名(雜貨商二、商業事務所二など)と報告されている。更に『沖縄県史』の数字によれば、明治四十年——四十四年の期間におけるアルゼンチンへの日本人移民者の合計は六名しか記載されておらず、やや増加するのは大正期に入ってからである。昭和期に入ると年間一〇〇名から四〇〇名の移住者が維持されているが、ブラジルに比べると遙かに少ない水準である。

戦前期において比較的日本系人々口が多かったその他の中南米諸国としては、キューバとボリビアがあるが、これらの国々への移民が本格化するののは、大正期に入ってからである。

古い時期のキューバ在住者として、大平慶太郎の名が知られている。高等商業学校を卒業した大平は横浜正金銀行に入行しているが、その後、同行を退職してメキシコに渡り貿易商を営んだ。更に明治三十八年(一九〇五)に、大

平はハバナに移り住んでいる。当時の大平を中心とする約五〇名の商業移民が、キューバへの邦人移住の最初のグループとされている。

第七章 高橋是清とペルー銀山

一 ペルー銀山事件の発端

二・二六事件の凶弾に倒れた高橋是清は、昭和二年の金融恐慌を乗り切った蔵相として今も記憶されている。その高橋が壮年時代にペルー銀山の開発を志した話は良く知られており、『高橋是清自伝』（「中公文庫」に所収。以下『自伝』と略す）には「ペルー銀山の失敗とその後の落魄時代」と題する章があるが、文庫本で八〇頁ほどの記述である。高橋自身の述懐によれば、「ペルー銀山は、わが国人のペルーにおける最初の企業であつたばかりでなく、恐らく明治時代におけるわが対外事業の先駆をなしたものである」。

一二歳の頃から洋学修行を志していた高橋是清は、幕末の横浜に進出していた英国系銀行のボーイに雇われているが、アメリカへの「洋行」を熱望しており、慶応三年八月、一四歳の高橋少年はサンフランシスコに到着している。米国人の家庭の下男となったり、危うく奴隷に売られようとしてたり、米国時代の高橋は様々な苦勞を重ねた。明治期における体験的国際人の一つの典型である。

そうした高橋是清がペルーに着目するに至った経験について、『自伝』に次のように記している。

「日本商人の海外発展もよいが」、先進国志向が強いにもかかわらず「話は出来ず、習慣は知らず、資力も乏し

いから至るところで軽蔑されるばかり」である。だから、「もう少し文明の程度や富の程度も低く、人民も傲慢でない、そうして土地も広い所、例えばスペイン語やポルトガル語などが話されている南米、中米等の諸国に向かって、市場の開拓を図ったがよい」というのが、高橋の感想である。「文明の程度が低い」などと、穏当でない表現もあるが、高橋の率直な述懐なのであろう。あるいは、少年時代の米国で味わったアジア人蔑視の体験の裏返しであるかも知れない。

ところで、幻に終わってしまったペルー進出企業の発端を辿ってみると、次のような展開となっている。

明治二年に來日し、貿易商を営んでいたドイツ人オスカル・ヘーレンは、その後ペルーに住みついていた。そして、ペルー政府から北部高地地帯の払下げを受け、農場経営に着手しようとしていた。農業労働者に日本人を雇い入りたいと考えていたのは、日本人の勤勉さを記憶していたからであろうか。ともかく、雇人の井上賢吉を日本に派遣して農場の共同経営者を探させようとしたが、ペルーを紹介するためにカラワクラ銀山の鉱石を持ち帰らせている。

明治二十一年の日本に帰って來た井上は、伝手を辿って当時の山梨県知事井上紫朗（のちに男爵）に会っている。當時としては耳新しいこのペルー案件は、山梨県出身の実業家小野金六を経由して前田正名に伝わっている。薩摩藩出身の前田は、同じく山梨県知事を経験しており、農商務省工務局長および農務次官に就任している。そして、この話が持ち込まれた當時の高橋是清は、農商務省特許局長の職にあった。

農場経営のパートナーとなる日本人を探すというのがペルー在住ドイツ人ヘーレンの意向であったが、参考のために持ち帰られた銀鉱石の見本に日本人の関心は集中していた。しかも、當時の鉱山学界の泰斗といわれた巖谷博士に分析鑑定を依頼したところ、「ほとんど純銀に近い良鉱」という結果が出ている。更に明治二十一年十一月、現地を

精査するために、理学士田島晴雄がペルーに派遣されている。現地における田島技師の調査結果は極めて有望であるため、「初の海外投資」であるペルー銀山の開発が本格的に推進されることになった。

こうして、農業開発案件がいつの間にか鉱山開発にすりかわってしまったのだが、当時の日本人の知識として、メキシコあるいはペルーは銀産出国として知られていた。明治五年のペルー船マリア・ルース号事件を契機に、明治六年には「秘露（ペルー）国トノ和親貿易航海仮条約」が東京において調印されているが、ペルーは、ラテン・アメリカ諸国のなかにあつて我が国と最初に外交関係を樹立した国である。

二 日秘鉱業会社の設立

明治二十二年十月八日付郵便報知新聞は、「初の海外投資、南米で鉱山を開発」の見出しで、資本金五〇万円の日秘鉱業会社が設立されたことを報じている。この時の発起人一〇名のなかには前出の藤村紫朗、小野金六のほか、奈良原繁（のちに沖縄県知事、貴族院議員）、森田昌純（のちに日本郵船社長、貴族院議員）、佐竹作太郎（この時から三年後に第十国立銀行頭取。いわゆる甲州財閥の一員。のちに衆議院議員）、高田慎蔵など、当時の少壮実業家が名を連ねているが、高橋是清は発起人に参加していない。高田慎蔵は、明治・大正期における代表的な兵器商社高田商会の創立者であるが、のちに改めて触れることにする。

更に同年十月十日付時事新報は、「有望なる大事業と財界も大乗り気」の見出しで、出資はいずれも「有名なる会社に勤め、しかもその頭に立つ人なれば、その成功の十分なるは世人の疑わざる所」と報じている。そして、「かかる有名なる人々がかかる多くの資本を下して、外国の事業に従事し、卑屈なる日本人」を刺激することは「悦ばし」

いことであるが、万一、事業が失敗すれば、日本人の海外進出意欲を阻害することになると懸念している。

発起人のほかに新たな株主として、高橋是清、牧野伸顕（のちに宮内大臣、内大臣、伯爵）、九鬼隆一（のちに皇室博物館総長、男爵）、曾我祐準（のちに枢密顧問官、子爵）などの有力な官僚あるいは政治家が名を連ねている。その翌年三月二十日の朝野新聞が報じるように、「その株主は堂々たる顯官紳士を以て充たされ」ていたのである。経済的に余裕があったこれらの出資者達は、単なる儲け話としてこの「海洋万里の異邦に於ける事業」（前出の「朝野新聞」による）に参加したのではないだろう。

この海外進出事業に専念するため、明治二十二年十月三十一日、農商務省特許局長の職を辞するに当たって高橋是清が記した「述懐」によれば、その頃の日本人の海外進出といえば「僅かに（中略）雜貨舗を開くがとき小商業を企てる者あるのみ、未だ邦人の力をもって外国に事業を起せるものなし」。従って、「海外諸強国と対等の地位に立つ」ためには、「邦人をして力を海外に伸べしむ」必要を痛感していた。当時の日本にあっては、平等の原則に立った条約改正が切望されていたが、日秘鉱業会社の出資者達も高橋是清と同じ考えを抱いていただろう。

三 ペルーへの旅立ち

鉱山経営に着出するため、三六歳の高橋是清は一八八九年（明治二十二年）十月、ペルーに向かって横浜を出発している。この時の同行者は、鉱山技師田島晴雄と通訳の屋須弘平である。既に触れているように屋須は、金星の太陽通過を観測するために来日したメキシコ観測隊の通訳を勤めたが、一行とともにメキシコに渡った人物である。そののちグワテマラに在住していたが、たまたま帰国した折に高橋是清に紹介されペルーに同行することになった。銀山開

発事業の挫折とともにペルーを離れた屋須はふたたびグワテマラに戻っており、この地でその生涯を終えている。

リマに到着した高橋は、現地側の唯一の出資者であるヘーレンと合併契約の内容について討議を重ねているが、高橋の『自伝』によれば、その概要は次の通りである。

一、「会社の資本金を英貨一五万ポンドとしペルー法律の定むるところにより有限責任とする」。

一、資本金は日本側株主とペーレン氏で折半する。

一、「坑夫は日本人を使用し本会社の事務員技師らは会社の最大利益を得るに便なる限り日本人を使用する」。

やがて、技手、坑夫あわせて一七名が日本から到着したので、高橋を含めて一行二〇名はペルー北部にある銀鉱山へ向かっている。アンデス山系の高地に辿りつくまで一行は様々な苦痛に直面しているが、現地に着いてみると、有望であるはずの銀山は全くの廃坑であることが判明した。

この鉱山地帯には、米国の鉱山機械製造会社フレザー・シャル社のガイアル技師が駐在していた。現地の事情に詳しいこのアメリカ人技師によれば、カラワクラ銀山開発の将来性は極めて否定的である。しかも、この銀山の鉱石を分析したところ銀の品位は非常に低く、分析結果はニューヨークの本社に報告済みである。更に、この米人技師は、同社の「日本代理店である高田商会（高田慎蔵君も組合員であった）はそのことをよく知っているものと思っていた」と語っている（『高橋是清自伝』による。ここにいう「組合員」とは、日秘鉱業会社の「出資者」を意味している）。

明治十四年に兵器輸入商として出発した高田商会は次第にその業容を拡大しているが、創業社の高田慎蔵は明治二十一年に欧米を旅行している。高田自身の述懐によれば、「米国では鉱山事業が著しく発達して新式の機械も沢山出来たから、夫等を輸入して我が国の鉱業に応ずる³⁵⁾」とある。以上が、高田商会がフレザー・シャル社の日本総代理店

となった背景であるが、高橋が記している米国人技師ガイヤルの言葉を裏付ける内容である。

四 ペルーからの撤退

この事業が経済的に可能でないと判断した高橋は、敏速に撤退策を講じていった。

ドイツ人ヘーレンは事業の撤退に激しく反対したが、日本人出資者に対する現地側の期待が大ききことは、昔も今も変わりがないようだ。たとえ貧鉱であっても、大量の鉱山を精錬すればそれ相応の銀を手に入れることが出来るから、事業を続けるべきであるという意見もあった。しかしながら、それには巨額の追加資金が必要であるとして、高橋は恐慌にペルーからの撤退を主張した。

結局のところ、現地に派遣された田島技師が満足な調査を実施せず、極めて無責任な報告書作りあげたため、我が国最初のペルー進出企業は幻のままで終わってしまった。それから四年後の明治二十六年、メキシコにおいて「榎本殖民団」を展開するため、専門家による現地調査が実施されている。この時の調査も不充分であったため、壮大な殖民計画は挫折してしまった。明治の頃、ラテン・アメリカの大地に展開されようとした二つの海外事業は、いずれも事前調査が不備のため失敗に終わった。

ところで、「日秘鉱業会社の株主三浦梧郎氏他四名」が、「技師田島晴雄氏に対し、詐欺取財の告訴をなしたる」ことを、明治二十三年十月二十三日付東京日日新聞は報じている。ちなみに、三浦梧郎はのちに陸軍中将、子爵となった軍人政治家である。観樹と号した彼の『観樹將軍回顧録』は中公文庫にも入っている。

「錚々たる人々」を株主に迎えた海外事業も、一転して詐偽事件に終り世間の嘲笑の的となったのだが、この事件

を契機に高橋是清は実業界に転じた。

明治期後半以降、見知らぬ土地に対する漠然とした期待を抱いて中南米各地に移住していった日本人移民は、少なめ挫折を味わっている。ラテン・アメリカ諸国に対する十分な知識を持ち合わせていなかったことが、失敗の原因となっていると言えるだろう。

五 その後の屋須弘平

明治八年（一八七五）、メキシコに渡った屋須弘平がその四年後にグワテマラへ移住したことは、第四章の「三 メキシコ観測隊の来日」で触れた通りであるが、この地でカトリックの洗礼を受けている。ペルー銀山開発に同行した屋須は、明治二十三年（一八九〇）ふたたびグワテマラに戻り写真館を営んでいたが、この地でその生涯を終えている。

屋須弘平がスペイン語で記した手記を入手した寺田和夫（東大教授・故人）は、次のように記している。

「（屋須は）てらいのない、自慢もない、不満もめったにもらさない、不思議な日系移民である。ただ一人海外に率先して出、少なくとも手記に望郷の念を綴らなかった一日本人の姿は、明治精神史上にいくばくかの影を落とすであらう」⁽³⁶⁾。

明治八年のメキシコそして、明治十一年当時のグワテマラといえ、屋須弘平のほかには日本人は在住していなかっただろう。

第八章 知識人の往来

一 南方熊楠

在野の博物学者南方熊楠については、今も彼の著作あるいは評伝類が数多く刊行されている。博学であるとともに、数々の奇行をもって知られる熊楠であるが、彼の奇行と破天荒さの故か、十九世紀末のキューバ独立戦争に参加したという伝説が、ある時期伝えられていた。

まず、明治四十二年五月の大阪朝日新聞に「彼（熊楠）がキューバにいる間に、折節起こったキューバの革命軍に身を投じて、スペインと戦った挙句一時スペインの捕虜になったとの説もある」と、杉村楚人冠は書いている。

その後も、熊楠の「革命伝説」を支持する記事が散見されるが、中でも平野威馬雄『くまぐす外伝』では、「独立宣言と共に蜂起した革命軍に、熊楠の熱血的義憤おさえがたく（中略）、義軍に加わったのである」となり、さらに「熊楠は各地に転戦、功名を立てたが、不幸敵弾に仆れた。左胸部に盲管銃創をうけ、直ちに野戦病院に送られた」と、事実を無視して、大幅に脱線してしまう。

こうした伝説の原因となったのは、発信地及び日付不明の次の熊楠書簡（喜多幅武三郎宛）であると思われる。

「（略）当市一昨夜より今に黒人と白人との間に合戦起こり、合衆国陸兵出張。（略）戦場は小生の住所より十五、六町これあり候。黒人およそ千人、白人三百人、民兵百人、軍隊五百人（とも三百人）とも申す。小生は今夜合戦見物に赴くつもりにて、唯今鉄砲用意中に候」

さらに、キューバ旅行直前の一九八一年八月十三日付の同じく喜多幅宛の手紙に「スペイン領キューバ島」などに

旅行の予定で、「ピストル 挺携帯する」とあるが「革命伝説」を生み出した原因の一端となっている。

ところで、熊楠がキューバを旅行した一八九一年九月―十二月の時期にあっては、次のような状況から、キューバ独立戦争に参加することも、さらには観戦することすら不可能であったことが明きらかである。

まず、キューバの第一次独立戦争は一八六八年十月に始まり、一八七八年二月、サンホン条約によってスペインとの休戦協定が成立しており、いわゆる「一八七九―九五五年の休戦時代」が到来している。従って、熊楠がキューバに滞在した時期には、軍隊と反乱軍あわせて二千人もが参加するような大きな戦闘はなかった。

次に、前出の熊楠書簡に、「合衆国陸兵出張」とあることから、熊楠ファンが「合衆国陸兵のキューバ出兵」と勝手に解釈したのではないか、と思われる。しかし、二十世紀初頭以降の中米・カリブ地域の動乱に際して、米国海兵隊が出兵しているが、スペイン領のキューバに対してはスペインに宣戦布告をしない限り、合衆国陸兵のキューバ出兵はあり得ない。事実、「合衆国陸兵」が初めてキューバに上陸したのは、このあと七年を経過した米西戦争勃発後の一八九八年六月二十二日である。

さらに、熊楠書簡には「黒人と白人の間に合戦起こり」とあり、キューバ旅行直前にかかれた喜多幅宛の手紙にも、「(キューバは)黒人のみの所にて白人としてもスペイン人のみ多く」とあることから、この「合戦」を直ちに「キューバ独立戦争」に結びつける解釈がまかり通ったものと思われる。

しかし、キューバ独立戦争は、支配者たるスペイン人と、スペイン人を祖先としていたキューバ人、すなわち「白人と白人」の抗争である。また、キューバの奴隷制は、一八八〇年二月十三日に廃止されているが、それ以降、キューバでの大規模な黒人暴動は伝えられていない。

明治二十四年(一八九一)九月十六日から三ヵ月半に及ぶハバナ滞在であるが、『南方熊楠日記 1』(八坂書房 一九八七年)によれば、熊楠は、藻類、菌類、隠花植物に関する簡単な記述以外に、当時のキューバに関する見聞を記していない。前述のように、キューバ独立勢力とスペイン政府との「休戦時代」にあったハバナは、平和であった。それ故に、曲芸師川村駒次郎らもキューバに来ていたのだが、これについては既に第六章で触れている。

前出の喜多幅宛の書簡には、口先ばかりで行動性に欠ける日本の学者を尻目に「自ら突先して隠花植物を探索すること」を、「スペイン領キューバ島」への旅行目的としていた熊楠であるから、所期の目的は達成されたと言えるだろう。

ところで、『南方熊楠日記 1』によれば、キューバ旅行の一ヵ月ほど前の一八九一年八月十二日の項に「支那人梅彬迺より九連発ピストル一個及弾丸十余個五弗にて購収」とあるが、このピストルを携行してキューバに渡ったのだろう。そして、翌明治二十五年一月七日ハバナを発って、同月九日にジャクソンビルに帰っている。七月五日の日記には、

「此夜市中にて黒人蜂起し、獄史と争闘に及び、獄史三名負傷」とあり、翌七月六日には、「兵士数百人來り鎮撫す」とある。

南北戦争後二十五年を経過した当時の米国にあつては、クー・クラックス・クラン(K・K・K)などの白人狂信者が、黒人に対するテロ行為を強めていた。一方、黒人側も、有色人種全国農民組合を結成するなど、白人に対抗して黒人労働者の団結を図っていた。熊楠がフロリダにいた一八九一年には、南部全州にわたって綿花労働者(主として黒人)によって賃上げ要求のストライキが宣言されている。

こうして、南北戦争以前には考えられなかったような黒人と白人の抗争が、米国南部で頻発していたことから、前出書簡の「陸兵出兵」とは、黒人暴動鎮圧のための軍隊の出動と考えられる。当時の米国では、正規軍の他に各州ごとに民兵制度がとられていたことを考えれば、書簡に記された「民兵百人」とも合致する。

熊楠の「革命伝説」を生み出した喜多幅宛書記に記された「合戦」が、キューバ独立戦争とは全く関係なく、米国南部における黒人暴動を指しているのは明らかである。さすがに、熊楠に関する最近の刊行物ではキューバ独立戦争参戦説は否定されているものの、時として無責任な記述を眼にすることがある。例えば、鶴見和子『南方熊楠』（講談社一九七八年）では、熊楠はキューバ独立戦争を「観戦したが、参戦したのではない」としている。また、山本厚子『パナマから消えた日本人』（山手書房新社一九九一年）では、前出の喜多幅宛の書簡を引用して、熊楠のハバナ滞在中に「スペインに反抗した、キューバの独立戦争が起こったのである」という記述がある。熊楠「革命伝説」の亡霊が、今もさまよっているのを見る思いである。

二 小泉八雲

のちに日本に帰化して小泉八雲を名乗ったラファディオ・ハーンが横浜に到着したのは、明治二十三年（一八九〇）四月である。それ以前のハーンは、一八七七年秋以降、新聞記者としてニューオーリンズに住んでいた。かつて、スペインそしてフランスの植民地であったニューオーリンズには、ラテン的雰囲気が残されていた。

フランス系クレオールに関心を寄せていたハーンは、クレオールの諺を集めた『ガンボウ・ゴージェンス』や『ラ・キュージーヌ・クレオール』（『クレオール料理』）など、クレオールに関する著作を出版している。

エリザベス・スティープンソン『評伝ラフカディオ・ハーン』（遠田勝訳 恒文社）には、ニューヨークリンズ時代のハーンが、スペイン語の勉強に打ち込んでいたことが記されている。彼が勤めていた新聞の日曜版に掲載するため、カリブ海各地で発行されていたスペイン語の新聞・雑誌の記事を英語するのが、当時のハーンの仕事の一つでもあった。

その頃のハーンは、彼の最初の小説である『チタ』を執筆している。物語は、メキシコ湾に近い小島で漁師として暮らしていたスペイン系家族の生活が主題である。三部構成のこの小説の随所にはスペイン語やクレオール語が使われており、地方色を色深く醸し出している。

更に、一八八七年から八九年にかけて、ハーンは二度にわたってカリブ海の島々を訪れている。第一回目の旅行でハーンが上陸したのは、マルティニック島などの小アンチール諸島と、南米大陸に近いトリニダード島である。そして、一八八七年十月から八九年五月初めまでの一年半にわたって、ハーンは仏領マルティニック島に滞在していたが、この時の見聞に基づいて、一八九〇年²²『Two years in the French West Indies』がニューヨークで出版されている（平井呈一による邦訳『仏領西インド諸島の二年間』恒文社 一九七六年）がある。

ハーンの妻小泉セツの『思い出の記』には、「ヘルン（ハーン——引用者）の好きな物」が列挙されているが、「場所では、マルティニックと松江、美保の関、日御崎、それから焼津」と記されている。生まれながらのコスモポリタンであるが、ハーンは一年半滞在したに過ぎないマルティニック島に、いつまでも好ましい思い出を抱いていたのだろう。

ハーンの長男一雄を父とする小泉 時が書いた『ヘルンと私』（恒文社 一九九〇年）の第一部は「I マルティニ

ク」として五編の文章で構成されている。マルティニック時代のハーンが描いた「ペレー火山のスケッチ」、「マルティニックの古写真」など、ハーンの遺品に関する思い出、幼い頃の一雄が父ハーンから聞かされ、そして、ハーンの孫である小泉 時が父一雄から聞かされたマルティニック島にまつわるいくつかのエピソードが記されている。

ハーンが愛したマルティニック島は、当時の日本人には余りにも遠い存在であったが、明治三十五年五月十二日付の時事新報は、「仏領マルチニーク島大噴火、死者二万人」の見出しとともに、「ペリー山^(ママ)噴火のため、マルチニーク島第一の港市セント・ピエールは全部破壊され、二万の人口事実^ニに於いてことごとく死亡し」と伝えている。このニュースが、ハーンを深く悲しませたことはいうまでもない。

ところで、かつて九州における最高学府であった第五高等学校の英語教師となるため、ハーンは明治二十四年に熊本に移住している。しかしながら、熊本の土地柄もこの学校の生徒達も、ハーンの肌に合わなかったようである。ハーンを熊本に呼んだのは、第五高等学校校長でありのちに講道館の創設者として知られる嘉納治五郎であるが、ハーンと入れかわるよう^ニにして東京へ移っていた。ハーンが嘉納に宛てた明治二十七年(一八九四)九月十四日付書簡には、ともかく五高教授の職を辞したい故、英語またはフランス語あるいは、スペイン語でも教えることができるので、どこか就職先を世話していただきたいという依頼である。ちなみに、拙稿「小泉八雲とスペイン語——明治におけるスペイン語教育の一端」(『ラテン・アメリカ時報』一九九二年十月号)では、ハーンとスペイン語の接点について検証している。

三 ホセ・ファン・タブラーダ

十九世紀のフランスでは、中国あるいは日本美術への関心とともに東洋趣味がたかまりを見せていた。こうした傾向に影響されて、十九世紀半ばころのラテン・アメリカの詩人達も東洋への憧れに触発されていたが、キューバ独立の父として今も讀えられており、詩人でもあったホセ・マルティ、ニカラグワのルベン・ダリーオなども、遠い日本に抱いた異国趣味を詩に託している。なかでも、メキシコの詩人ホセ・ファン・タブラーダは日本趣味に強く刺激されており、二十七歳の時(一八九八年)に出版された処女詩集『詞華』(El Florero)にも「日本」と題する詩が収められている。

そして明治三十三年(一九〇〇)、三十歳のタブラーダは日本を訪れている。この詩人について、田辺厚子『北斎を愛したメキシコ詩人——ホセ・ファン・タブラーダの日本趣味』(PMC出版 一九九〇年)に詳しく語られているが、この項は同書を参考にさせていただいた。

三ヵ月ほど日本に滞在したタブラーダは、和歌の翻案を試みている。明治六年(一八七三年)に來日し、一時期小泉八雲とも親交のあったバジル・ホール・チェンバレンには『英訳古事記』の出版のほか、古今和歌集の英訳がある。タブラーダが試みた和歌のスペイン語訳は、チェンバレンの英語訳の重訳である。

日本から帰国後、タブラーダは結婚しているが、その後スランプに襲われている。そして、「麻薬に溺れ、デカダンなパーティーに耽り、非生産的なボヘミアン仲間と空しい文学論を闘わすという頹廢的な生活が続」いたタブラーダは、結婚生活も破綻をきたしたと、田辺氏の前掲書に記されている。こうした生活から脱却したものの、一九一〇年十一月にメキシコ革命が勃発しており、その翌年から半年間、タブラーダはパリに滞在している。帰国後のタブラー

ダは、一九一四年に『広重——雪と雨と夜と月の絵師』“Hiroshigue, El pintor de la nieve y de la lluvia, de la noche y de la luna”を出版している。

その後、革命政府に追われたタブラーダは、一九一四年から一八年までの約四年間をニューヨークでの亡命生活を送っている。一九一九年にはニューヨークのアプルトン社から『太陽の国について』“En el pais del sol”を出版しているが、ほぼ二十年後に書かれた日本旅行記である。

一九一八年から二〇年までの二年間、タブラーダはメキシコ外務省二等書記官としてベネズエラ及びコロンビアに赴任している。外務省を辞したのちニューヨークに住みついており、一九四五年この地でその生涯を終えている。

更に、田辺氏の前掲書は、駐日メキシコ公使として一九〇七年（明治四十年）に着任し、約十年間を日本で過ごしたエフレン・レボジェードについても触れている。レボジェードは文人外交官であり、一九一〇年に詩集『竹の葉』と小説『日光』をメキシコで出版しており、一九一五年には『日本の叙情詩』を東京で刊行している。

四 パナマ運河の日本人技師青山 士

一八八一年、フランス人レセップスによって開始されたパナマ運河の掘削工事では、八年間で三万人もの労働者の生命が失われている。この数字は、レセップスの失脚を狙っていた対立者グループの誇大宣伝であるとも言われているが、いずれにせよ苛酷な地勢と気候、そして黄熱病による死者の続出に抗し難く、運河の建設工事は中断された。更に、レセップスが設立したパナマ運河会社は、一九八九年に経営に破綻を来している。

一九〇三年、コロンビアから独立したパナマ共和国を承認した米国政府は、この年、新政府との間に運河条約を締

結した。そしてその翌年には、パナマ運河建設工事が再開されている。

二十世紀初頭のこの大工事に、日本人青年青山 士(あきら)が測量設計技師として参加している。青山についていくつかの文献が残されているが、次のような経歴である。⁽³⁷⁾

明治三十六年(一九〇三)東京帝国大学工学部土木工学科を卒業した青山は、恩師広井勇の紹介状を携えて渡米している。その発端は、パナマ地峡地帯を視察してきた峯岸繁太郎の講演を、明治三十五、六年頃、東京経済学会で聴いた青山は、多いに触発されたためである。⁽³⁸⁾更に、卒業謝恩会の席上、これからの技術者は積極的に海外に進出すべきであると、広井教授に鼓舞されている。運河建設に先立って、パナマ地峡横断鉄道の建設工事でも「枕木の数だけ労働者が死んだ」と言われていた難工事であるが、青山青年は世紀の大事業への参加を熱望していた。

地峡運河委員会のメンバーの一人であるコロンビア大学教授ウィリアム・H・バー(William Hubert Burr)は、青山の恩師広井教授の知人であることから、バー教授宛の紹介状を携えて渡米したものの、運河の建設工事再開は翌年まで待たねばならなかった。このため、先ずシアトル近郊で様々な労働に従事したのち、翌一九〇四年二月には米国とパナマ共和国の間で運河条約が批准されたので、青山はニューヨークに赴いた。この地で更に二ヵ月間鉄道会社で働くことになるが、その年(明治三十七年)六月一日、ニューヨークからユカタン号に乗船し、同月七日にパナマ共和国の大西洋岸の港町コロンに到着した。パナマ運河委員会との契約に基づいて、青山はロッドマン(測量設計技師)として七年半にわたって、世界有数の土木工事に参加している。

パナマ運河の完成は一九一四年であるが、明治四十五年(一九二二)一月、建設工事が八〇パーセントほど完成した段階で青山は帰国している。

帰国後の青山は内務省に奉職し、荒川放水路など数多くの河川工事に従事している。そして、昭和九年に内務技監に、その翌年には土木学会々長に就任した。戦前の内務省は、警察権のみならず現在の自治省、建設省、厚生省などの機能を統合しており、軍部につぐ強大な行政機関である。内務技監といえ、技術官僚の最高位を極めたと言えるだろう。

昭和十一年に内務技監を辞した青山は、その後は満洲国及び国内の二、三の県の土木顧問を努めたが、昭和三十八年に八十四歳で没している。青年時代に内村鑑三に私淑していたクリスチャンの青山は、高潔な人格者として知られていたことが、注(37)に掲げた学会誌などに記されている。また、飯吉精一『近代土木者像巡礼』(日本河川開発調査会 一九八六年)の第一編は「国宝級の土木者・青山 士」のタイトルがつけられているが、専門家から見た青山の業績が紹介されている。⁽³⁹⁾

ところで、『工学会誌』大正元年十一月号(第三五六巻)には、同年(一九二二)七月三日に「工学会通常会に於いて演説」として、青山の講演「パナマ運河工事出稼談」が掲載されている。

先ず、「活動写真」上映による工事概況の説明ののち、青山の講演となっているが、パナマ運河工事参加に至る経緯が説明されている。更に、四十枚の「幻燈説明」によって、土木工事の内容と現地の状況が詳しく説明されている。そのあとの質疑応答で興味があるのは、運河工事には「日本人労働者が居たか」という質問である。これに対して、初めの頃は高賃金がとれるとの理由で米国より来た日本人、あるいはペルーから「逃げて来た者」もいたと、青山は答えている。その後は東洋人排斥の動きがあり、運河建設に従事する東洋人はいなくなった。そして青山が帰国する頃には、中国人商店で雇われている日本人、散髪屋あるいは菓子屋などを営む日本人三十人ほどが在住していたと説

明している。

高野裕「青山士氏をお訪ねして」(『土木学会誌』)によれば、青山の七年半にわたるパナマ滞在中の日本人来訪者としては京都帝国大学法学部教授神戸正雄、在サンフランシスコ総領事上野季三郎などである。また、八代海軍中將が率いる練習艦隊がパナマに入港しており、のちに横須賀鎮守府長官となる長谷川潔中尉(当時)と会っている。太平洋戦争当時、長谷川大將の紹介で来訪した海軍士官が、パナマ運河閘門爆破計画を持ちかけた。「せっかく皆で苦労して造ったものだから、そのままそっくり貰うことにしたらどうだ」と、青山は軽くないというエピソードが伝えられている。

五 横山源之助

明治期のジャーナリストとして知られる横山源之助は、下層労働者によって当時の社会問題を摘出しているが、更に、明治裏面史あるいは殖民問題などに関する幅広い著述がある。彼が残した『日本の下層社会』及び『内地雑居後の日本 他一編』は岩波文庫に、また『下層社会探訪集』と『明治富豪史』は現代教養文庫(社会思想社)に所収されており、今日でも容易に手にすることが出来る。

横山は、労働運動の首唱者高野房太郎あるいは社会主義者片山潜とも親交があり、早くから労働問題に関心を寄せていた。しかしながら、日本国内における労働運動の限界を痛感した横山は、労働力の海外流出に解決策を求めて、明治四十五年(一九二二)、殖民事情調査のためブラジルに渡っている。

二葉亭四迷の筆名で知られる長谷川辰之助とも親交のあった横山は、明治四十年頃「真人長谷川辰之助」を書いて

いるが、横山自身の殖民論を示す次のような一節がある。

二葉亭四迷は「殖民だの貿易だのということを口癖にいつているが」、それは「日本国という立場から常に割り出されていたので、この上からいうと君と同じことをいつている殖民論者の僕とは反対だ。(二葉亭は) 殖民といつても満韓殖民の意味で、君の眼にはハワイ殖民もなく、南米殖民もなかった」。

明治三十九年以降、横山は雑誌『商業界』に「墨西哥(メキシコ)に於ける活動之日本人」あるいは、「我が移民会社」など中南米移民に関する記事を数多く発表している。⁽⁴⁰⁾ その後も、移民事情を中心に中南米に関する雑誌記事を盛んに執筆しており、第十章でも触れるように明治四十年には『南米渡航案内』を刊行しているが、この時点では横山はまだ実際に南米に旅行していない。

西田長壽「横山源之助『日本之下層社会の成立——その書史的考証』(『歴史学研究』第一六一号 一九五三年一月)には、横山の著作及び論文が詳しく紹介されているので、以下の稿では参考にさせていだいた。

移民会社竹村商會が斡旋したブラジル移民を輸送する巖島丸に乗船して、明治四十五年三月、横山はブラジルに渡っているが、殖民事情の調査がその目的である。この時の見聞が「伯国移民の経過と現状」として、明治四十五年四月三日以降二回にわたって大阪朝日新聞に掲載されている。更に、同年十二月二十八日付の「伯国移民新傾向」に至るまで計三十五回にわたってブラジル移民関係の記事が同紙に掲載されているが、いずれも横山のブラジル報告である。

翌大正二年には、「南米ブラジルに行く移民」など、中南米諸国への移民に関する横山の論稿が、雑誌『新公論』に四回にわたって発表されている。この年、『南米ブラジル案内』(南半球社)が刊行されたのち、横山源之助の執筆活動はほぼ終わっており、翌大正三年には雑誌論稿三編が発表されているに過ぎない。そして、その翌年に四十五歳

の生涯を終えている。

第九章 米西戦争と日本人

一 メーン号に乗っていた日本人

米西戦争は、ラテン・アメリカにおける最後の植民地戦争である。キューバが主戦場となったこの戦争は、当時の日本にとっては遠い国の出来事であるが、何人かの日本人がこの戦争とかわりあっていた。また、ナシヨナリズムの気運がみなぎっていた日清戦争後の我が国においては、米西戦争に対する関心がさまざまな角度から示されている。米西戦争のきっかけとなったのは、ハバナ港に停泊していた米国軍艦メーン号の原因不明の爆発である。そして、この軍艦には、九名の日本人が炊事夫あるいは給仕として乗組んでいた。この時の状況については、外務省編『日本外交文書第三十一巻第二冊(自明治三十一年一月、至同年十二月)』に収められている「『ハバナ』ニ於テ米国軍艦『メーン』號爆沈セル際乗組本邦人遭難一件」が詳細な資料となっている。さらに同書には「米西戦争 附比島革命」と題する一連の報告書が収められているが、これについてはのちに触れることにする。

前記の「乗組本邦人遭難一件」によれば、一八九八年二月十五日、メーン号の爆発沈没に際して、同艦に乗組んでいた日本人八名(実際には九名)のうち七名が死亡し、生存者は一名であることが、第一報として報告されている(のちに、二名の生存者が確認されている)。この第一報は、ニューヨーク在勤内田領事より小村寿太郎外務次官宛に二月十九日付をもって報告されたものである。

九名の日本人が米国軍艦に乗り組んで、いわば下級労働に従事していたとは、今では考えられないような事実である。どのような事情でメーン号に乗艦するようになったのか、その経緯は明らかではないが、彼等の出身地は神奈川県、広島県、鹿児島県などさまざまである。爆発事故で命を失った邦人に対しては、合衆国政府から補償金が支払われているが、その間、在ニューヨーク日本領事と外務省との間に頻繁に文書が往復している。

ところで、在米公使館附海軍武官秋山真之および、在英公使館附陸軍武官柴五郎が、それぞれ観戦武官としてキューバに派遣されていたことは良く知られている。この時の秋山については、島田謹二『アメリカにおける秋山真之』（朝日新聞社）に詳細に記されているが、同書の終章「この研究の資料について」によれば、メーン号と同じように、日本人の炊事夫やボーイが米西戦争に参加していた米国の艦船に乗り組んでいたことが、柴砲兵少佐（当時）の報告書に記載されているとある。このような形で異国の戦争に参加していた日本人がいたとは、まさに隔世の感と言うべきだろう。

二 観戦武官

米西戦争では、キューバ東部にあるこの国第二の都市サンチアゴ・デ・クーバの周辺が主戦場となった。

ハバナ港は、その人口が狭く奥深い良港として知られているが、サンチアゴ湾の湾口も極めて幅狭いにもかかわらず、奥行きが深い港となっている。キューバに派遣されていたセルベラ司令官がひきいる六隻のスペイン艦隊は、サンチアゴ湾に入ったまま動かうとしなかった。この時、米国艦隊はサンチアゴ港の閉塞を試みているが、これを観戦していた秋山真之が、のちに旅順港閉塞作戦の際に参考としたことについては、既に多く語られている通りである。

一方、アメリカ陸軍第五軍団は、一八九八年六月二十四日、サンチアゴ・デ・クーバに近いダイキリに上陸して陸上戦を展開しているが、柴五郎少佐もこれにしたがってサンチアゴ攻略作戦を観戦している。余談ながら、このダイキリ Daquiri という地名は、島田氏の前掲書をはじめ「ダイクイリ」と英語読みに表記されている場合が多い。ラム酒をベースにしたキューバのカクテル「ダイキリ」があることは良く知られているが、この地名と関係があるのだろうか。

ところで、柴少佐が参謀本部に提出した米西戦争の観戦報告が「千代田史料」として所蔵されていることが、前掲の『アメリカにおける秋山真之』の終章に記されている。

「千代田史料」とは、日清戦争および日露戦争前後の時期を中心に、参謀本部から明治天皇にとどけられた極秘書類である。元来、宮内庁書陵部で所蔵されていたが、昭和三十六年に防衛庁戦史部に寄贈されている。現在、防衛研究所図書館には「千代田史料 極秘諸報告(武官報告)」として、明治三十一年一月から同三十七年十一月までの報告書類が所蔵されている。

島田教授は、前掲書の「終章」に、「第一報告と第十九報告が紛失している。第二報告の初めに『第一報告ハ未ダ着セズ』と注意書きがついていることから推測すると、あるいは日本に着かなかったのかも知れない」と記しておられる。ところが、防衛研究所図書館所蔵の「千代田史料」には、この第一報告と第十九報告だけが含まれていて、第二報告から第十八報告までが欠落している。

第一報告は、明治三十一年五月十日付となっており、米国に向かう大西洋上でかかっている。内容は、ワシントンに到着したのち、米西戦争を観戦する予定であることを至極簡単に報告している。

第十九報告は、同年八月十三日付華盛頓（ワシントン）発となっている。「昨十二日ヲ以テ米・西間（中略）ノ戦争中止トナレリ」とかかれている。観戦に関する資料は「一通り蒐集シ且ツ今後モ必要ノモノ」あれば入手できるよう手配したので、最早や「米国ニ駐在スルノ必要ナシト認メ」たと記している。あとは「英領加奈侖（カナダ）を視察する予定であり、「米西戦争ニ関シ報告スベキ件尚数多アレドモ」いずれはまとめて報告する予定であるとかかかれている。そしていずれの報告書にも、陸軍歩兵少佐柴五郎と署名されている。

これら二つの報告書がどうして島田教授の眼に触れなかったのだろうか。おそらく、（A）第一報告と第十九報告、および（B）第二報告から第十八報告という二つのグループに分けて保管されていたのだろう。島田教授の眼に触れることのなかった二つの報告書の所在について、直ちに先生に連絡すべきと思ったが、なにぶんにもご高齢であることを考えて遠慮していたが、そのうちに島田教授の訃報に接することになった。享年九十二歳とのことである。

なお、柴少佐の第二報告から第十八報告までの資料は、あるいは国立公文書館に保管されているのではないかと調べてみたが、同館には所蔵されていない。

ところで、島田謹二の前掲書には、柴五郎少佐の感想として、キューバ義勇軍（独立軍）兵士の服装が余りにもひどすぎるのが記されている。キューバ兵は「見てくれが乞食同様というだけでなく、性質まで乞食に近い。キューバ軍というと、見るのも、聞くのもいやらしい。そこで米軍も、キューバ兵を馬鹿にする。むしろイスパニア兵も、アメリカ人には降参したけれど、なんのキューバ兵に負けるものか、という負けおしみが目につく」といった感想が、「柴少佐の体験」として記されている。

この個所は、柴少佐の感想というよりも、島田謹二教授自身、つい筆が滑って書いてしまわれた表現ではないかと、

私は推測している。この「柴少佐の体験」に該当する箇所は、同少佐の第二報告から第十八報告までのいずれかに含まれていると思われる。これらの資料を未見であるため、前記の推測も根拠のないものであるが、のちに陸軍大将となる柴五郎について書かれたものを読むかぎり、先に引用したような悪意に満ちたとも言える感想を書き記すような人柄ではないと思われる。とはいえ、前記の感想に誇張があるとしても、米軍兵士そしてスペイン軍兵士のいずれもがキューバ独立軍將兵を軽蔑していたことは事実であろう。

防衛研究所図書館に所蔵されている「千代田史料」には、伊国(イタリア)公使館附陸軍工兵大佐落合豊三郎の「米西ノ戦争ニ関する所見」が含まれているが、これは観戦報告ではない。なお、米西戦争関係としては、フィリピンにおける米軍および革命軍に関する詳細な報告が「千代田史料」に入っている。

三 軍事情報としての米西戦争

陸軍将校の親睦と学術研究を目的として、明治十年(一八七七年)に偕行社が設立されており、機関誌として『偕行社記事』が刊行されていた。明治三十二年十一月発行の『偕行社記事』第二百三十号には、「戦艦及海岸砲台——『キューバ』ノ『サンチアゴ』ニ於ケル米国艦隊」が掲載されているが、フランスの『砲兵雑誌』からの抄訳である。また、『偕行社記事』第二百四十一号には、「『サンチアゴ・ド・キューバ』ニ於ケル西国海軍ノ損失」が掲載されている。ここに報告されているのは、秋山真之も観戦した一八九八年七月三日のサンチアゴ沖海戦であるが、この戦闘が米西戦争の勝敗を決したと言えるだろう。

明治三十二年十一月発行の『偕行社記事』第二百二十九号以降六回にわけて、長編の論文「米西戦争ニ関スル注意」

が掲載されているが、フランスの『軍事科学雑誌』（『ジュルナル・ド・シアンス・ミリテール』）一八九九年一月号の記事を抄訳したものである。その内容は、極めて詳細な戦聞記録であるが、明治の日本陸軍にとっては、合衆国陸海軍が米西戦争に使用した大小火器の近代性に関心があったようである。

明治三十三年二月発行の『偕行社記事』第二百三十五号に掲載されている「米西戦争ニ関スル注意」には、次のように記されている。

「黄熱、『マラリヤ熱』ハ絶ヘス軍隊ヲ脅カシ何時之ニ感染スルヤ知ル可（ベカ）ラス」。この黄熱病の脅威から逃れるため、米軍総司令官シャフターは海岸地帯にとどまることを嫌い、高地に上ることを望んでいた。「唯タ（ただ）將軍『シャフター』ノ心得ヘ（ベ）キ（唯）一の要件ハ黄熱ノ襲来セサル前ニ（サンチアゴ）市民を飢餓ニ陥ルニ在リ」と記されている。アメリカ本国からの援軍を待つて包囲網を強固にすれば、サンチアゴ市に籠城しているスペイン軍および市民達は、飢餓に耐えかねて降伏するだろうというのである。だが、シャフター將軍は、なによりも黄熱病の蔓延を恐れていた。

キューバにおける陸上戦は、実際には僅か十日間ほどで終結しており、米軍の死傷者はあわせて二千名程度であった。ところが、キューバ東部に上陸して十日間程度が経過した七月一日頃から、米軍兵士の間では毎日三百名を超す病人が発生していたが、そのなかに黄熱病患者が含まれていた。

キューバ東部の陸上戦を観戦していた柴五郎少佐の報告によれば、合衆国第五軍の病兵は増加してゆくばかりであり、患者を本国に送還する病院船が間に合わなかったほどであると、前出の『アメリカにおける秋山真之』に記されている。サンチアゴには四千五百名を超える病兵が残されていたが、毎日新たに六百名近い患者が発病しており、そ

のうち三十パーセントを上回る兵士が熱病に罹っていたと言われている。

海軍軍医少監戸祭文造が、米西戦争時のキューバ前線の衛生状態を視察しているが、その時の報告書があるかどうか、未見であることが島田謹二氏の前出書に記されている。

戸祭文造は明治二十八年、帝国大学医科大学卒業と同時に海軍に入っている。その後は、医務官として要職を歴任しており、大正四年には軍医としての最高職務である海軍軍医総監に就任している。

戸祭軍医がどのような報告書を提出したのか知りたいものであるが、防衛研究所図書館にもそれらしい資料は所蔵されていない。もっとも、当時の帝国海軍は黄熱病に関心を寄せる余裕もなかったかも知れない。その頃、陸海軍の医務当局を悩ませていた問題は、兵士の間で極めて高い罹病率を示していた脚気であり、その対応に苦慮していたからである。

四 内村鑑三と幸徳秋水

明治を代表する思想家の一人である内村鑑三は、明治三十年、当時の有力新聞『萬潮報』の英文欄主筆となり、数多くの英文論説を執筆している。そして、米西戦争が勃発した頃の内村は、「雑感」、「米西戦争」、「アメリカ大陸におけるスペイン支配」、「キューバの理想」など米西戦争に関する論説を明治三十一年四月から五月にかけて、『萬潮報』の英文欄に発表している。

アメリカは、スペインの支配からキューバを独立させるというヒューマニズムのために、一方のスペインは自国の名誉を守るために闘うのであって、米西戦争こそは近時三百年間の世界において見られなかった無私の戦争 (the

most unselfish war) であるというのが、内村鑑三の見解である。

日清戦争開戦当時、内村鑑三はこの戦争を「義戦」であると正当化していた。ところが、日露戦争に対して非戦論をつらぬいていたことは良く知られている。明治三十六年六月、東京帝国大学の七博士が桂内閣に対して日露開戦を建言した時、これに反対した内村鑑三は「余は日露非開戦論者である許りではない、戦争絶対廃止論者である」と記すようになっていく。その五年前の米西戦争に対して内村鑑三が肯定的な文章を書いたことは、余り知られていないようである。

内村鑑三が「無私の戦争」であると美化していた米西戦争も、実際には植民地争奪の戦争にすぎないことを、社会主義者幸徳秋水は指摘している。明治三十四年に出版された彼の著作『帝国主義』には、内村鑑三が序文を書いているが、この頃の内村は平和主義の立場をとっていた。

幸徳秋水は、この小さな本のなかで「米国の帝国主義」を非難しており、米西戦争について次のように記している。

「米国にして真にキューバ叛徒の自由の為に戦へる乎、何ぞ比律賓人民の自由を束縛するの甚しきや。真にキューバの自主独立の爲め戦へる乎、何ぞ比律賓の自主独立を侵害するの甚しきや。」

五 米西戦争と日本

アジアにおけるスペインの植民地フィリピンもまた、米西戦争の戦場である。この機に乗じてドイツがフィリピンをうかがっているという情報、アジア各地の在外公館から外務省宛に報告されていたことが、前出の『日本外交文書 第三十一巻第二冊』所収の「米西戦争 附比島革命」に見られるが、我が国政府は厳正中立の態度を維持してい

た。

それ以前の明治三十年(一八九七年)八月、フィリピン独立軍が蜂起している。その翌年八月、スペイン軍に代わって米軍がマニラを占領すると同時にフィリピン革命政府の樹立が宣言された。しかしながら、その年(一八九八年)十二月に調印された米西講和条約の結果、フィリピンの主権は合衆国に委ねられ、フィリピンの独立は達成されなかった。幸徳秋水が指摘していたのは、こうした状況であることは言うまでもない。

一方、日清戦争に勝ったものの、三国干渉として知られるヨーロッパ列強の強硬な要求に屈せざるを得なかった当時の日本にあって、ナシヨナリズムの気運がたかまっていたのは当然である。こうした状況のなかで、米西戦争はその頃の日本人に様々な刺激を与えることになった。また、十九世紀ぎりぎりの近代戦争である米西戦争に対して、我が国の軍事関係者が少なからぬ関心を寄せていたのは、遠からぬ将来に予想されていた大国ロシアとの戦争が念頭にあったからであろう。

新大陸における最後のスペイン植民地が消滅することになった米西戦争は、その頃の日本人にとって無縁な存在ではなかった。

第十章 明治期におけるスペイン語学習とラテン・アメリカの紹介

一 明治期におけるスペイン語学習書

明治期に出版されたスペイン語学習書として、次の七点が国立国会図書館に所蔵されている。

(一) C・イニエーゴ『スパニシエ會話』

丸善 明治三十年 二一四頁 一三cm (同第三版 明治四十三年)

(二) 片桐安吾『日本西班牙會話編』

神戸熊谷久栄堂 明治三十一年 一七七頁 一三cm

(三) 岡崎隆一『西和會話編』

門部書店 明治三十二年 六二頁 一五cm

(四) 金澤一郎『西班牙語會話篇』

大日本図書 明治三十八年 三三六頁 一九cm (同第三版 明治四十一年)

(五) 黛太郎『スペイン語會話篇 (墨西哥南米諸国)』

竹友舎 明治四十年 七二頁 一六cm

(六) 岡崎屋書店編『西版牙語独脩』

岡崎屋書店 明治四十年 一五一頁 一六cm

(七) 戸谷松太郎『日西會話書 (商人・興業家・労働者)』

雲梯舎 明治四十年 一一四頁 一九cm

右の表示サイズは、いずれも本の縦寸法であり、袖珍本あるいは現在の新書版といった小型本がほとんどである。内容も粗雑なものが多いが、その概略を以下に紹介する。

(一) 『スパニシエ會話』という題名は、英語のSpanishを誤記したのであろう。日本語にはローマ字表記が並

記されており、日本語会話も学習出来るよう留意されている。

(三)の序文には、「近時本邦ハ、カノ西班牙語ノ通用スル諸国ニ対シ商業上及び植民上ノ関係頗(すこぶ)ル密ナラント」と記されており、実用的な会話書であることを謳っている。スペイン語の発音は片仮名で表記されているものの全く不正確であり、どれほど実用に役立つのか極めて疑わしい。

(四)は、可成りの大冊であり、1。発音、2。単語篇、3。慣用句集、4。会話集、5。変化法(動詞の活用)によって構成されている。東京外国語学校教授村上直次郎が序文を書いているが、「未だイスパニア語独修の便に資すべき邦語の書なきは吾人の甚だ遺憾とする所なり(後略)」と記している。たしかに、ここに挙げた七点のなかでは、この書が最も充実している。

(七)の「例言」には、「南米、マニラ、墨国等方面への渡航者」に役立つように作成したと記されている。この頃から盛んになって来た中南米諸国及び、フィリピンへの海外移住者を対象としたものである。

右に挙げた会話書あるいは学習書は、いずれも、中南米諸国そしてフィリピンなど当時のスペイン語圏諸国への殖民あるいは交易を目的として実用書である。なお、明治期において刊行されたスペイン語学習書あるいは会話書は、前掲の七点だけではない。金澤一郎『西班牙語会話篇』に寄せられた序文に「独修の便に資すべき邦語の書なきは」と、その当時類書の出版がなかったことを指摘している。しかしながら、あとで触れるように金澤一郎は明治四十年代になって数冊の学習書を刊行している。

二 西班牙学会

若くしてオランダに留学し、在ロシア公使を経験した榎本武揚は、オランダ語、ロシア語のほかにも、英、独、仏語に通じていたといわれている。前述のようにメキシコが殖民（農業移住）に最も適した土地であると考えていた榎本は、スペイン語にも関心を寄せていた。

明治二十六年二月二十五日発行の『早稲田文学』第三十四号の「学界雑報」欄には、「西班牙語学」の見出しで、以下の記事が掲載されている。

「諸新聞紙の報道する所に依れば伊太利語学を以て有名なる曲木如長氏は今度榎本子爵並びに西班牙、墨西哥（メキシコ—引用者註）両公使等の賛成を得て西牙学会というを設立せるよし。其の目的とする所は西班牙語を研究し、これを用ふる各国の事情を詳にし通商貿易の便を図るにありといふ（後略）」。「この西班牙学会では、更に、「（スペイン語圏）諸国に於る状況の調査、西班牙語の翻訳及び通弁の依頼に応じ」ることが報じられている。

第六章の「四 榎本メキシコ殖民」で触れた殖民協会とはほぼ同じ時期に設立された西班牙学会の目的は、スペイン及び中南米各国の「事前の詳にし通商貿易の弁を図るにあり」とされている。明治もその頃になって、スペイン語そして、ラテン・アメリカ諸国への関心が持たれるようになったのだろう。こうした状況のなかで、榎本子爵が西班牙語学会の趣旨に賛同したのも至極当然といえるだろう。この時期の我が国にあってスペイン語を教えていた高等教育機関は、高等商業学校（のちの東京高等商業学校。現在の一橋大学）一校であったことから、西班牙学会の設立は、人々の関心をひくのに充分だっただろう。

その前年明治二十五年、榎本は日本気象学会の会頭にも就任しているが、西班牙学会では実際にどのような役割を

果たしたのかは不明である。とはいえ、駐日スペイン公使及びメキシコ公使とともに、榎本子爵が西班牙学会の設立趣旨に賛同して発起人の一人となったことは、この「学会」の権威づけに役立ったことはいうまでもない。

西班牙学会の設立者であり、「伊太利語学を以て有名なる」といわれた曲木如長（まがきゆうなが）については、『日本現今人名辞典』（明治三十二年刊）及び、『現代人名辞典』（大正元年刊）に経歴が紹介されている。それによれば、明治九年官命によってイタリアその他欧米諸国に留学している。そして、明治十三年には二等書記官として駐露日本公使館に赴任している。榎本は、既に明治十一年七月に駐露公使の任務を終えているので、曲木のロシア在勤期間とは重なり合うことはなかった。しかしながら、曲木が榎本の知遇を得るのに、ともにロシアに在勤していたという事実が役立ったことは容易に想像されるだろう。

その後の曲木は、司法省に勤務して国際法の研究に従事しているが、明治二十六年には官を辞している。同じ年、「伊国政府より王冠勲三等を贈られしは、けだし本邦に伊太利学を興し、伊太利邦訳したるは君を以て嚆矢となす」と、前出の『日本現今人名辞典』に記されている。

イタリア語のほかにフランス語にも通じていた曲木如長は、明治九年に『和伊佛三国通語』（續文社刊）を出版している。本文僅か一五七頁のこの小さな本には、日本語とイタリア語及びフランス語を対照させて、約二五〇〇語の単語が収録されている。

ところで、この西班牙学会でスペイン語を教えていたのは、イタリア人のエミリオ・ビンダであった。彼はその頃の高等商業学校で、スペイン語が選修外国語に加えられるとともに、ビンダはスペイン語も担当している。明治三十年に高等商業学校付属外国語学校（明治三十二年、東京外国語学校として独立）が開設され、西班牙語科が設置されるまで、

高等商業学校は、まがりなりにもスペイン語を教えていた我が国唯一の高等教育機関であった。

曲木如長そして、エミリオ・ピンダは、元来イタリア語に関係していた人達である。スペイン語に通じた者が他にいなかった当時にあつては、この両名が、西班牙学会の中心人物とならざるを得なかったのであろう。そして、いさかながらもラテン・アメリカ地域に関心を寄せていた当時の有名人士としては、榎本武揚において他にいなかったといえるだろう。

三 東京外国語学校

日清戦争で勝利をおさめた我国には、国力隆盛の氣運がみなぎっており、高等教育機関の拡充がすすめられていった。

こうして明治二十九年（一八九六年）一月、外国語学校設立の建議案が貴族院及び衆議院に提出されている。そして、「外国語の教授を以て専務とする所の学校は官私立ともに殆ど之を見る能はず（中略）。故に政府は速に外国語学校を創設し英獨佛露を始め伊太利西班牙支那朝鮮等の語学生を育成せむことを要す」と主張されている。付随的ではあるにせよ、スペイン語学習の必要性がここに来てやっと指摘されることになった。

上記の建議案が採択された結果、「高等商業学校ニ附属外国語学校ヲ附設ス」ることになり、明治三十年（一八九七年）四月に高等商業学校附属外国語学校が誕生した。この学校には、英、仏、独、露、西、清、韓語の七語科が設置され、三年間にわたって文法、訳読、作文、会話、修辭などが教授された。

明治三十一年における西班牙語科の在籍生徒数として正科生として一年生六名、二年生に四名が登録されており、

「西班牙語外国教師」として、「バチエー・エン・フキロソフキア・イ・レストラス フランシスコ・グリソリア」と日本人助教授松山剛三郎の名が見られる。「レストラス」は「レトラス」の誤記であるが、文学士の称号を示すものである。

開校したばかりの明治三十二年九月現在における西語本科在籍者数は三年生三名、二年生五名、一年生十三名の計二十一名である。三年生には、のちに同校スペイン語教授となる金澤一郎が含まれていた。そして、のちに触れる別科生は、一年及び二年あわせて七名の在籍者数である。

明治三十三年九月の西語本科生生徒数が十三名に減少しているのは、一年生となるべき新生がいなかったためである。参考迄に、英語科を除く同年度のヨーロッパ語系の各科生徒数は、露語科 四十七名、仏語科 四十四名、独語科 四十名、伊語科 六名であった。

明治四十九年には同校の規則が改正され、「語科」が「学科」と称されるようになったが、明治四十年には西語学科の生徒数合計は四十八名となっている。そして、三年生には、のちに同校講師となり、村岡『西和辞典』で知られる村岡玄が在籍していた。ちなみに、同年度の仏語科の生徒総数六十九名、伊語科は十二名の在籍者数であった。

一方、三年終了の本科生とは別に、「職業ヲ有スル者」を対象とした別科生のために夜間クラスが開設されていた。別科生のなかには、海外雄飛を夢見てスペイン語を学んでいた社会人も少なくなかった。明治末期以降、今日の東京外国語大学に至るまで、この学校で、スペイン語を学んだ数多くの卒業生達が、外交官あるいは貿易人として中南米諸国で活躍している。

なお、明治期におけるスペイン語研究の状況については、拙稿「明治期におけるスペイン語及びスペイン文学への

関心 (I) (II) (国士舘大学『教養論集』第三五・三六号 一九九二年十一月及び九三年三月) がある。

四 金澤一郎

金澤一郎は、明治三十三年七月に第一期生として東京外国語学科西班牙語科を卒業している。その後、外務省に奉職しているが、まもなく母校に呼ばれ助教授に就任した。ところが明治三十九年七月、金澤は東京外国語学校助教授を辞して東京汽船株式会社に移っているが、創業間もない同社の中南米航路開設計画に伴う人事である。入社後の金澤は、ペルー及びチリに派遣されているが、ブラジルへの第一回移民を運んだ笠戸丸に東洋汽船社員として乗り組んでいたといわれている。

日本国内在勤時には、東京外国学校へ出講していた金澤は、『ほるとがる語會話』(明治四十一年)、『日西会話』(明治四十一年)及び『西班牙語動詞字集』(明治四十二年)を刊行している。

大正七年十月、西班牙語科主任教授篠田賢易の死去に伴い、金澤は同科主任教授に就任しており昭和十五年の定年退官まで同校に在職していた。退官直後六十一歳の金澤は、その頃美貌の奇術師として知られていた松旭斎天勝と結婚している。終戦直後の昭和二十年八月、六十六歳の生涯を終えた(『東京外語スペイン語部六十年史 別巻——人物と業績』所収の永田寛定「日本イスパノフィロス列伝」による)。

五 『海潮音』のキューバ詩人

明治三十八年(一九〇五)に出版された上田敏の訳詩集『海潮音』は、永い世代にわたっていわば一種の青春詩歌

集として親しまれていた。ところでこの詩集にキューバ生まれの高踏派詩人ホセ・マリア・デ・エレディアの詩三篇が含まれていることに気づいた人は少ないだろう。

『海潮音』の序文には、「巻中収むる所の詩五十七章、詩家二十九人」とある。そして、その内訳として「伊太利亜に三人、英吉利に四人、獨逸に七人、プロブンス(プロバンス地方を指す―引用者注)一人、而して仏蘭西は十四人に達し」とある。

ここに収められているフランス近代詩の中には、ボードレル、ベルレーヌ、マラルメなど高踏派あるいは象徴詩の詩人が含まれているのは当然として、ホセ・マリア・デ・エレディアが取り上げられているのは、フランス高踏派を代表しているからであろう。

エレディアは、一八四二年、キューバの富裕な農園主の家庭に生まれたが、母はフランス人である。ハバナ大学を卒業したキューバ生まれのクレオージョであるが、その後フランスに渡っている。フランスで有名となったこの詩人は、通常、フランス語風にジョゼ・マリア・ド・エレディアと表記されている。『海潮音』では、「ホセ・マリア・デ・エレディア」と表記されているのは、上田敏が、いささかながらもスペイン語の素養があることを示しているのであろう。

フランス近代詩に関心がある人は別として、我国ではエレディアの名を知る人は少ないだろう。試みに日本フランス語フランス文学会編『フランス文学辞典』(白水社 一九七四年)で調べてみると、「エレディア」の項があり、彼の詩業が紹介されている。更に、十項目にわたる関連項目にエレディアでなく、ジョゼ・マリア・デ・エレディアとなっている。

一八九三年に出版されたエレディアの詩集を、上田敏は『戦勝標』と訳しており、現在の我国の研究者達は『戦勝牌』という訳語で紹介しているが、「トロフィー」を意味している。

全編一二八の詩が、この『レ・トロフィー』に収められているが、すべて十四行詩である。専門家の評によれば「最も完璧なソネット集として知られている」（内藤濯といわれている。前出の『フランス文学辞典』によれば、この『レ・トロフィー』（ザ・トロフィー）に収められた詩篇は、五つのグループに分類されるが、その中に「東洋と熱帯地方」を題材にした一連の詩篇がある。エレディアは、東洋趣味を歌った高踏派の詩人として知られているが、「熱帯地方」という主題は、キューバの記憶に基づくものであろう。

六 ラテン・アメリカの紹介

明治初期以降、ヨーロッパの歴史及び地理に関する出版物は盛んに刊行されているが、ラテン・アメリカの地理あるいは歴史に関する概説書の出版は決して多くはない。

国立国会図書館編『明治期刊行物蔵書目録』をはじめ、同図書館の蔵書カードを検索すると、中南米の歴史そして地理に関してややまとまった出版物が刊行されているのは、明治三十七年以降である。

先ず、野々村戒三述『早稲田大学三十七年度史学科第二学年講義録 南北アメリカ史』がある（前出の国立国会図書館編『明治期刊行物蔵書目録』には掲載されていないが、同図書館に所蔵されている）。「第一章 アメリカ発見に関する欧州人の地理的智識」にはじまり、「第五十四章 米西戦争」、「第五十五章 アメリカ諸国の近況」まで六百四十三頁に及ぶ大冊である。米国及びカナダに関する記述が全体の三分の二を占めているが、十九世紀末までの南北アメリカ史

概説書である。内容は、史実の紹介に終始しており、やや無味乾燥な記述である。この『南北アメリカ史』では、「スペイン」でなく、「イスパニア」の表記が用いられているが、明治のこのころでは、「イスパニア」あるいは「エスパニア」の呼称が一般に用いられていた。

著者の野々村戒三は、早稲田大学の西洋史担当教員であるが、『歴史教科書 西洋篇』（富山房 明治三十七年）を出版している。勿論、ラテン・アメリカの専門研究家ではない。欧米の出版物も参考に、この『南北アメリカ史』を書きあげたものと思われるが、先駆者の努力は讃えられるべきである。

ラテン・アメリカ事情に関するまとまった概説書として、東洋汽船株式会社編『南米事情』が明治三十八年に出版されている。内容は、第一編巴奈馬（ばなま）共和国、第二編秘露（べるゝ）共和国、第三編智利（ちり）共和国、第四編亜爾然丁（あるぜんちん）共和国によって構成されている。前述のように、東洋汽船は南米太平洋航路を運航していたが、この概説書も、実務的知識の提供に重点を置いている。更に、今井安良『最近南米事情 第一』（明治四十四年）、『同 第二』（明治四十五年）がある。いずれも日本羅甸亜米利加（らてんあめりか）協会によって刊行されているが、中南各地への海上運賃、各国の関税率などを含めてもっぱら実務案内を重視した内容である。

他に、『南米渡航案内』あるいは、メキシコ、ブラジル、アルゼンチンなど主要各国の案内書が出版されているが、本格的な研究書といった内容を持ったラテン・アメリカ概説書は、明治末期においては、まだ出版されていない。前述のように『日本の下層社会』（岩波文庫）の著者として知られる横山源之助が『南米渡航案内』（明治四十一年）を出版している。横山は、明治四十五年にブラジルに渡っているが、これは、ペルー、ボリビア、チリ、アルゼンチンなど四か国への移民案内書である。

第十一章 東洋汽船——中南米航路の開設

一 東洋汽船株式会社の設立

明治元年から同十四年に至る迄の我国の貿易収支は当然ながら輸入超過であったが、明治十五年から同二十六年迄の期間では出超となっている。しかしながら、外国船に対する海上運賃の支払いなどによって貿易外収支は大幅な赤字を計上していた。更に、日清戦役時の軍事輸送においては船舶不足に対処するため、大量の外国船を購入した。

こうした状況を背景に、明治二十六年には航海奨励法案が国会に提出されており、明治二十九年に至って航海奨励法並びに造船奨励法が施行されている。これによって、外国航路に就航する船舶に対して、また、総トン数七〇〇トン以上の鉄・鋼船に対して奨励金が交付されることになった。このため明治三十年以降、日本郵船あるいは大阪商船などの海運会社はいうまでもなく、三井物産あるいは三菱合資会社など商社による船舶の購入及び造船が増加している。

そして、航海奨励法施行直前の明治二十九年（一八九六）七月に東洋汽船株式会社が設立された。浅野総一郎が明治二十年四月に創業した浅野回漕部を母体に、澁沢栄一、安田善次郎、大倉喜八郎など当時の有力実業家の支持を得て、航海奨励法を背景に北米航路の開設を主目的にしていた。

創立者であり初代社長となった浅野総一郎は、明治六年に横浜で薪炭商として出発し、石炭商を経て明治十六年に深川セメント工場の払い下げを受けている。そして、貨物輸送を目的に共同運輸会社を設立したが、明治十八年に郵船汽船三菱会社と合併して日本郵船となった。しかしながら、単独で船会社の経営することを望んだ浅野は、明治十

九年に浅野回漕店を設立した。

当初はヨーロッパ線及びニューヨーク線の就航を予定していたが、更に、メキシコ線（香港を起点に横浜、ハワイ、サンフランシスコを経由してテワンテベックに至る）を加えることを決定したが、これは、浅野総一郎自身がメキシコに関心を抱いていたためである。このため、資本金を五百万円から七百五十万円に増資するとともに、明治二十九年六月及び九月に同社社員二名をメキシコに派遣した。

ところで、この稿の作成にあたって参考に行っている中野秀雄編『東洋汽船六十四年の歩み』（私家版 昭和三十九年）には、会社設立時の大株主名が記載されている。筆頭株主は当然ながら浅野総一郎（二〇、〇〇〇株）であり、第九位に澁沢栄一（二、〇〇〇株）が名を連ねている。第十位に安部幸兵衛（一、八〇〇株）、第十二位に増田増蔵（一、四〇〇株）、更には安部幸之助（一、〇五〇株）の名が見られる。安部、増田ともに横浜の砂糖商として財力を誇っていたが、第一次大戦後に没落している。

会社設立とともに、英国のジェームス・レーング造船所に十八ノットの自社船三隻の建造を次のように発注した。

第一船	日本丸	進水	明治三十一年八月
第二船	亜米利加	〃	三月
第三船	香港丸	〃	七月

明治三十一年十月以降、翌年二月にかけて三船とも北米西海岸を目的地とする太平洋航路に就航している。しかしながら、予定されていたメキシコ航路の就航は遅れていた。

二 中南米航路の創設

東洋汽船が中南米航路を開設したものの、外国船と競合することになり運賃率が低下した。このため、明治三十六年以降東洋汽船の業績は悪化することになった。

一方、翌三十七年に勃発した日露戦争によって、一時的に船腹需要が喚起されることになった。東洋汽船も、日露戦争後に大型船三隻を三菱長崎造船所に発注している。ところで、その当時東洋汽船は米国の太平洋郵船（パシフィック・メール||P・M）との業務提携によって太平洋航路を運航していたため、余剰となる従来船二隻を新規航路に投入する必要があった。これに先立って、明治三十七年、同社取締役白石元治郎が北米からメキシコ、パナマを経てペルー、チリ、アルゼンチンの現地調査に派遣されている。

しかしながら、新規航路として南米航路を開設しても商業的に採算に乗らず、国庫補助を受けることを考えたが、実現しなかった。結局、貨客船一船を備船して、ともかく試験的に中南米航路を開始することにした。

明治三十八年十二月、英国汽船グレンファーク号（三、六四七総トン）を定期チャーターして、香港を起点に神戸、横浜を経てペルー及びチリまで航行させた。寄港地は、香港、門司（補炭地）、神戸、横浜、ホノルル、マンサニージョ（メキシコ）、サリナクルス（メキシコ）、カジャオ（ペルー）、イキーク（以下チリ）、バルパライソ、コロネル（補炭地）とし、航海数は二カ月に一回である。

就航開始の三カ月前（明治三十八年九月）に開催された株主総会における白石取締役の説明が、前出の『東洋汽船六十四年の歩み』に記されているが、次のような内容である。

「往航は香港からペルー行の支那人移民、貨物としては、米、雜貨其の他が積載出来、復航は智利硝石（主として

肥料用)、砂糖、綿等がある。

また、日本からペルー砂糖農場行きの移民も有望である。同国政府の要請で、今日迄二回移民を送っているが、それは以下の通りである。

第一回 明治三十二年四月 日本郵船佐倉丸契約移民七五〇名(男)

第二回 明治三十六年七月 英船デューク・オフ・ファイ 契約移民八八三(男)、九八名(女)、計九八一名

自由移民一八四名(男)、一〇名(女) 計一九四名」

三 輸送状況及び就航の中断

東洋汽船の中南米航路開設以前には、サンフランシスコからパナマ・メール(パシフィック・メールの子会社)を利用してパナマに至り、そこで南米西海岸航行船に乗り換えるが通常のルートであった。稀に、ドイツのコスモス汽船の南米回航があったが、いずれにせよ日本から南米への乗客及び貨物の輸送量は極めて少なかった。

その頃、華南からの南米向輸出貨物は漸次増加していたが、主要復航貨物となるべきチリ硝石の輸送量が伸びなかったのは、我国における硝石の需要が振わなかったためである。一方、乗客の往来も極めて少なく、僅かにペルー行き中国人三等船客を主たる顧客とするにすぎなかった。更に、ペルー政府が中国人の入国を制限したため、乗客輸送も一層減少してしまった。

加えて、南米各地における船舶用石炭が極めて高価であり、検疫など船舶に対する諸規則も苛酷であり、高率の課税が賦課されていた。このため、運航費用が増大し、毎航海とも多額の損失を計上しなければならなかった。

一方、明治三十九年以降、政府委託船の笠戸丸（六一六七総トン）を南米線に配置したため、第一船のグレンファーク号とあわせて二隻の就航となった。ちなみに、笠戸丸は、日本海々戦で拿捕されたロシアの病院船カザリン号である。

明治三十九年頃には、毎往航時メキシコ行きの移民四、五百名を運んでいたが、翌年三月に日本移民制限が米国議会で可決された。このため、メキシコから越境して米国に入国することが不可能となり、メキシコへ行く日本人移民も激減した。

前述のように華南（中国南部）から南米への輸出貨物は活発であったが、復航の貨物は依然として僅少である。更に、北米・南米諸国航路を開設した仏国汽船との競争の結果、一時的に運賃が低下した。

加えて、チリ政府による日本船の入港拒否、日本政府の南米移民制限などの事情もあって、明治四十一年上半期をもって、東洋汽船の南米航路は中断されてしまった。これに先立って、グレンファーク号の傭船契約は明治三十九年末に解除されている。代わりに明治四十年末にカザリンパーク号（四八三七総トン）が新たに傭船されており、明治四十一年初頭の南米航路に一回だけ就航した。

四 ブラジル移民の輸送及び南米線の再開

中南米航路の中断とともに、笠戸丸及びカザリンパーク号の利用方法を考えねばならなかった。丁度その頃、ブラジル移民を計画していた皇国移民会社々長水野 龍の要請によって、ブラジル移民の輸送に笠戸丸が使用されることになった。同船は明治四十一年四月二十八日、契約移民七百八十一名及び自由渡航者十二名を乗せて神戸港を出帆し、

五十日間の航海ののちサントスに到着した。

それ以前に水野社長は、明治三十八年十二月グレンファーク号でペルーに渡り、チリ、アルゼンチンを経て、三十九年三月ブラジルに入っている。その頃日本人のブラジル移民計画に積極的であった同国駐節の杉村公使と面談しているが、翌四十年にはサンパウロ州政府との間に日本人移民導入に関する契約を調印した。更に、四十一年二月二十五日、ブラジル移民一千名募集に関して日本国外務省の許可を取得している。

明治四十二年四月には、亜米利加丸他二隻をもって南米線の就航が再開されている。その頃、ペルー及びチリでは中国人排斥運動が盛んであったため、この航路には他社船の配船がなく、東洋汽船の独占状態となっていた。

明治四十三年、メキシコは独立百年祭を祝ったが、東洋汽船の資金協力によって日本博覧会が開催されている。武道や日本舞踊あるいは茶会などの実演とともに、わが国物産が展示されたが、東洋汽船の南米派遣員森本金銀太郎がメキシコに派遣された。

注

- (1) 河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡 4』（東洋文庫）平凡社 1994年
- (2) 佐久間正ほかの訳注による『アビラ・ヒロン日本王国記』（大航海時代叢書XII）岩波書店 一九六五年
- (3) イタリア語で書かれた“Dottor Amati, Historia dell'ambasciate che Udate Masanune ha inviata al Papa Paolo V”（アマチ博士、法王パウロ五世を訪問した伊達政宗使節録）並びに、スペイン語で書かれた関係文書が、東京帝国大学文科大学史料編集掛編集『大日本史料第十二編十二』（明治四十二年）に収められている。
- (4) スペイン語の表記では、Marqués del Guadalcazar, Virey, Lugarteniente del Rey nuestro señor, Gobernador y Capitán

General de Nueva España

- (5) 板沢武雄『日本とオランダ——近世の外交・貿易・学問』至文堂 一九六六年
- (6) 沼田次郎ほか編『日本思想体系64 洋学 上』(岩波書店 一九七六年) 所収による。
- (7) 同じく、右に所収。
- (8) 『日本庶民生活史料集成第五巻 漂流』(三一書房 一九六八年)の二六三頁に、原本の編者あるいは善助が書いたと思われるスペイン語の図版がある。なお、正しくはnumero deとなる。本稿の「東航紀聞」の項はこの書によった。
- (9) 彦蔵の『漂流記』は、右の『日本庶民生活史料集成第五巻 漂流』に所収されている。同書の「解題」に「彦蔵の作としては疑わしく何人かの代作であるかも知れない」と指摘されている。「自伝」は、中川務・山口修訳『アメリカ彦蔵自伝(1)(2)』(東洋文庫・平凡社 一九六四年)がある。「自伝」の「上巻」は明治二十五年頃、「下巻」は同二十八年頃の刊行と言われる。
- (10) 近盛晴嘉『ジョセフ・ヒコ』(吉川弘文館 一九六四年)などがある。
- (11) 註(7)の『日本庶民生活史料集成第五巻 漂流』所収の「東洋漂客談奇」を参考にした。
- (12) 今井圭子「ラテン・アメリカ鉄道の旅(二)」(『ラテン・アメリカ時報』一九九三年九月号)
- (13) 阿部隆一編『村垣淡路守範正著 遣米使日記』(文学社 一九四三年)による。なお、村垣淡路守自身が記した原題は「航海日記」となっている。
- (14) 『万延元年 遣米使節史料集成 第一巻』(風間書房 一九六一年)所収の「亜行日記二」。
- (15) 右の「第三巻」に所収。
- (16) "Monedas Mexicanas" ("メキシコ貨幣")、"Artes de México" Vol.103, 1968 及び "Catálogo de Monedas Mexicanas 1536—1974", 1974 ("メキシコ貨幣カタログ")による。
- (17) 三上隆三『円の社会史』(中公新書) 一九八九年
- (18) "Viaje de la Misión Astronómica Mexicana al Japon" 大垣貴志郎、坂東省次共訳『ディアス・コバル Dias 日本旅行記』(新異国叢書(A)輯第七巻) 雄松堂 一九八三年
- (19) 『現代ラテン・アメリカ論』(ラテン・アメリカ協会 一九七七年)に所収。

- (20) 川崎晴朗『幕末の駐日外交官・領事官』(東西交流叢書四) 雄松堂出版 一九八八年
- (21) マリア・エレナ・オータ・ミシマ『19世紀におけるメキシコと日本——メキシコの外交政策と日本の主権の確立』駐日メキシコ大使館 一九七八年
- (22) 篠原宏『海軍創設史——イギリス軍事顧問団の影』リプロポート 一九八六年
- (23) 富岡謙二『異国遍路 死面列伝』(中公文庫『異国遍路 旅芸人始末書』に所収) による。
- (24) 吉村 昭『白い航跡 下』新潮社 一九九一年
- (25) 註(23)の『異国遍路 旅芸人始末書』
- (26) 註(22)の篠原『海軍創設史』
- (27) 右に同じ
- (28) ラテン・アメリカ協会「ラテン・アメリカ時報」1990年六月——四月号
- (29) 右の一九九二年十一月——一九九三年一月号
- (30) 日墨協会・日墨交渉史編集委員会『日墨交流史』PMC出版 一九九〇年
- (31) 『南方熊楠日記 1』八坂書房 一九八七年
- (32) 外務省編集『中南米諸国便覧 一九九三年版』ラテン・アメリカ協会 一九九三年
- (33) 数字はいずれも、沖縄県教育委員会『沖縄県史第七巻 移民』一九九三年による。
- (34) 注(32)の『中南米諸国便覧』による。
- (35) 『実業之日本』明治三十五年一月一日号から九回にわたって連載された「高田慎蔵氏経歴談」による。
- (36) 寺田和夫「屋須弘平——グアテマラへの最古の移民」(『現代ラテン・アメリカ論』ラテン・アメリカ協会 一九七七年)による。
- (37) 高崎哲郎『評伝 技師・青山士の生涯』(講談社 一九九四年)が新しい。また、飯吉精一『近代土木者像巡礼』には、次の文献資料が挙げられている。

青山 士自身の講演又は論稿

「パナマ運河工事出稼談」(『工学会誌』第三五六巻 大正元年十一月号)

『ばなま運河の話』私家版 昭和十四年

「世界の大工事と人類文化の発達」(『土木と利水』第十巻第二号 昭和十二年)

「パナマ運河開削工事懷古」(『学士会月報』第六五三号 昭和柔軟年十一月)

「パナマ運河 上・下」(『土木と利水』第十三巻第四及び五号 昭和十七年十一月)

その他の資料

高橋 裕(東京大学工学部土木工学教室助教授(当時))「青山 士氏をお訪ねして」(『土木学会誌』昭和三十七年一月)

土木学会「青山士氏の御逝去を悼んで」(『土木学会誌』昭和三十八年五月)

鈴木雅次(日大教授・工博、元内務技監)「光背まばゆき技術家——内務技監青山士氏の追悼」(『河川』昭和三十八年八月)

(38) 『工学会誌』第三五六巻 大正元年十一月号掲載の青山 士の講演「パナマ運河工事出稼談」による。

(39) 『近代土木者像』の著者飯吉精一氏は、土木専門家であり、間組、鉄建建設を経て、日本大学生産工学部教授・工学博士。

(40) 雑誌『商工世界太平洋』第五巻第二十号(明治三十九年十月)——二十五号に掲載され、『明治富豪史』(現代教養文庫)(世

界思想社 一九八九年)に所収されている。

(本学兼任講師)